とこまでも
ゆらゆら

忘れられないこと

発刊のご挨拶

髙藤建設株式会社
代表取締役　髙　藤　昌　和

このたび弊社五十周年記念事業として『忘れられないこと』を発刊いたしました。本書刊行に当たり執筆者の皆さまには、ご多忙のなか絶大なご支援とご協力を賜わりましたことを心から厚くお礼申し上げます。

廃墟の中から再出発をした我が国も戦後五十年、物質的繁栄の中で失ったもののあまりの大きさに驚くばかりです。いじめや汚職、犯罪の増加、バブル経済のツケ、拝金主義等々、戦後五十年の歪みがいま表面にあらわれています。

しかし、本来、人間の本心の部分では、人のお役に立ちたい、人に喜ばれたいという魂の願いは、誰でも持っています。

皆さまの貴重なご体験が、二十一世紀を担う青少年の本心の部分で暗夜の曙光となることを確信いたします。来るべき時代が人類にとって真の幸福と豊かな時代でありますことを念じ、併せて当社を今日まで育んでいただいた多くの方々に心から感謝をこめて発刊させていただきました。

発刊にあたり編集は加治屋知暁氏に、表紙は西島伊三雄画伯にお願いし、心のこもったご協力を賜わり感謝申し上げます。ありがとうございました。



若い人たちの道しるべに

北九州商工会議所
会頭　古賀義根

戦後五十年、わが国は焦土からまさに奇蹟的な経済発展を遂げ、私たちは物質的には大変豊かな生活を享受できる様になりました。

しかし一方では、昨今の様々な事象を見るにつけ、心の問題がなおざりにされたことを痛切に感じざるを得ず、誠に憂慮すべき事態だといえます。

こうした中、高藤建設さんが今回創立五十周年記念事業として、戦中、戦後の激動期を生き抜き、各界で活躍中の方々の貴重な経験や思い出深い言葉を収録し『忘れられないこと』を出版されたことは、誠に時宜を得たもので、各界・各層の方々、とりわけこれから様々の苦難を乗り越えようとしている人々にとっては、時どきの判断基準、又はみちしるべともなるものと確信いたします。

高藤建設さんは、これまでも創立四十周年、四十五周年の節目ごとに青少年の指針となる『父親のひとこと』『伝えたいこと』を出版され、企業がいかに地域文化や教育に貢献できるかを、いわば企業理念として真摯に考え、取り組んでおられます。

ここに改めて敬意を表すとともに、併せて益々のご繁栄を祈念し発刊をお祝い申し上げます。

目　次

発刊のご挨拶……高藤昌和……3
若い人たちの道しるべに……古賀義根……5
汀（みぎわ）
赤いマニキュア……青山政雄……14
神州不滅……鰺坂二夫……16
尊敬されたイモ泥棒……荒井範雄……18
ＫＩＴＡ誕生……有森隆繁……20
学童疎開、無試験組……石井幸孝……22
奉天に散った鎌田編隊……磯部重雄……24
町民の熱い思いが、堅い鍵……今井宜子……26
厭な記憶……入江伸明……28
なつかしい誤訳……岩城富美子……30
日々是新……上野正康……32
炎の恐怖……上村徹郎……34

機　転……碓井三子男……36
パリの〝日本人〟……大石　潤……38
復　員……大塚金藏……40
石油危機の教訓……大辻清次郎……42
うまかったヒトラーの演説……合馬又彦……44
母に導かれたこと……鍵山秀三郎……46
或る正月の日記……角川敏行……48
ひたすら越境、勝手に師事……加治屋知暁……50
大　連……神谷興士……52
尽分立用……川口孝行……54
神佛を敬う心……川崎安太……56
日の丸金魚……菊池　功……58
松下幸之助氏との出会い……北田光男……60
悲しい十五人の空白……木下和子……62
恩師ともらった銀メダル……君原健二……64
フルシチョフ失脚……清宮　龍……66
台風広報中九死に一生……空閑耕祐……68
自由の悟り体験……工藤憲男……70

王家崗……國ノ十善彌……72
雑草の如く強く生きよ……古浦誠一……74
一枚の寄せ書き……小柳陽太郎……76
桜島よ、燃えているか……近藤貢……78
五十年前の私……後藤豊彦……80
大正ロマン……下村史……82
日銀那覇支店の開設……鈴木三郎……84
心の原点、青春の日の結核療養……関原敬次郎……86
鉄拳に教わった人間性……高松工……88
戦後の柔道……竹村茂昭……90
二つの賞……谷伍平……92
財産となった猛練習……玉井信一……94
満州の終戦……佃亮二……96
空　襲……辻長英……98
我が青春……中間翼……100
届けてくれた方……西島伊三雄……102
少年倶楽部……花田徳行……104
友情が生んだ新講座……原俊之……106

毎日新聞の白紙事件……平田満夫……108
B29と空腹と……廣石敏彦……110
消えない心の逆目……福元喜久雄……112
ソ満国境警備隊にハハヨメツレテユク……藤川欣佐……114
師の決断……松信要三……116
おばあさんと孫娘……松元正……118
きのこ雲……円日成道……120
暗い星空……水野勲……122
敗戦の日に寄せる感慨……御手洗博……124
戦死後も教え子を救う源三教官……皆川節夫……126
一つの心を二十に分けて……宮田則子……128
シベリアの俘虜……柳瀬正貴……130
廃墟に得難い実学……百合野保文……132
北九州空襲……吉田和彦……134
真昼の閃光……吉田敬一……136
ひたすらに悔いなし……吉村慶元……138
埋み火……安達昌弘……142
変化とニーズ……

ウイグルの絵……碇　浩一……144
兄……石川　勝治……146
最後の教え……石村　僖悟……148
人の心―おむつのにおい……今田　章……150
ふくよかな手……入谷　節子……152
身勝手な思い……入谷　泰生……154
不思議な縁……上田　正昭……156
振り子……大木　二郎……158
艱難汝を玉にす……大迫　忍……160
継続は力なり……大野　隆司……162
苦しみに克つ……岡本　康夫……164
エベレスト・トレッキング……緒方　世喜子……166
憧れの甲子園球場……沖　俊作……168
父親の死……香川　孝志……170
元横綱栃錦の一語……金子　太郎……172
ペニシリンと長井先生……栗岡　博良……174
知・情・意……河野　嶺雄……176
平成元年という年……是則　宗興……178

古く懐かしい日々……後藤達太……180
教師の責任……酒井清……182
いじめで強くなる……佐藤啓一……184
父と私の北極星……四島司……186
先生……宗勝憲……188
石田武雄先生との出会い……髙城寿雄……190
パートのおばさんこそ特別焼香……髙藤昌和……192
思い出の旅……田中丸善昌……194
一瞬の恐怖……鶴原六郎……196
祖母のひと言……鶴丸大輔……198
「地球社会」への出発……寺島京子……200
お慈しみに浴して……出口次年……202
ある先輩……中尾禮二……204
「価値観の違い」という落とし穴……中谷哲郎……206
J君への手紙……中村昭三……208
少年時代と鎮西橋の明治屋……永木睦文……210
門信徒の熱い気持が……長谷川裕一……212
博多署の夜……花田衛……214

店はお客様のためにあり……深町勝義……216
やさしい先生……福山庸治……218
欲しいもの　必要なもの……松本攻……220
アッ私の帽子が……松本政敬……222
還暦祝い……右田久幸……224
父の言葉……三島正一……226
初仕事……溝口昇……228
最後の夢……光永徹……230
失敗に学ぶ……南康博……232
セピア色の思い出……宮田浩子……234
祖母との対話……山下真理恵……236
フェアかどうか……山田康雄……238
祖父の臨終……山田宜弘……240
人生を変えた出会い……山本敬一郎……242
一枚の新聞紙と「一日10分」……渡辺守将……244
あとがき……247

汀（みぎわ）

赤いマニキュア

青山政雄

そうですね。五十年すぎたのですね。あの日から……。

私が妻や子供達を引揚船に乗せて、自分は荷物と共に小さい闇船で日本に帰国すべく韓国を後にしたのは終戦の年の秋の事でした。

安全である筈の引揚船が対馬の沖で水雷にふれて沈没した事を知ったのは暮に近い十二月の初め頃だったでしょうか。世の中で一番大切な家族を失ってしまった失意の日々の後に、三十一年に再婚した現在の妻も又医師である夫を戦場で失い、本人もロシヤ語を専攻した許(ばか)りに関東軍司令部(旧満州国)で終戦の日を迎える事になりました。それからが彼女の長い抑留生活だったのです。

ハバロフスクに連行され、そこで正式に逮捕の通告を受け、一路モスクワへ。尋問に続く尋問で四年間の刑務所生活。軍事法廷で関東軍情報部員は一括スパイ罪の判決を受けた彼女に、飢えと寒さのシベリヤの収容所生活が待っていたのです。

結婚した当時、全く化粧一つしないのに爪だけには赤いマニキュアを塗っている事に気付き、話し合った事がありました。「何故?」とその理由を尋ねる私に返事は無く、長い沈黙の時間が過ぎて行きました。重い口を開いた彼女の話はとぎれ勝ちでしたが……。

零下四十度以上の寒さの続く日々の中で、その生活に馴れていなかったので、或る日山中で木材

の切り出し作業中に手や足の指先が凍傷になってしまい、爪の辺りがとても醜くなっていたこと。それを見るにつけて当時の痛い迄のきびしい冷たさ、ひもじさを思うこと。そして……そしてその中で亡くなった数多くの人達への思いが、醜い爪の跡に見えて来ること——日本に帰りたいと言ってシベリヤの土になった人々の声迄聞こえて来る様な……だからせめてその爪を見たくない思いで、マニキュアを塗っているということなど、堰を切った様に一気に妻が話し終えた時、辺りはすっかり夜の気配でした。

妻を失い、夫を亡くした人達は決して私達だけで無い事は勿論良く知っています。終戦という重さを引きずり乍ら生きておられる方も数多くおられるでしょう。でも妻の赤いマニキュアの下に平和という文字が見える様になる日を、老人は心から願い乍ら生きているのです。



'89年の寮歌祭で（中央）

青山　政雄　明治36年5月10日生　広島県出身・北九州市在住
▽大正15年3月京城高等商業学校卒業
▽昭和6年10月高等文官試験司法科及び行政科合格
▽昭和8年8月弁護士開業、今日に至る

神州不滅

鰺坂二夫

憲法が制定された時のことである。皇居前の広場に、両陛下をお迎えして祝賀の式典が行われた。その式に参列することができたのは、私の一生にとって忘れ難い思い出の一つである。そして夜は記念講演会。会場は占領軍のマッカーサー司令部に近い日比谷公会堂であった。時の文部大臣安倍能成博士と憲法担当の大臣金森徳次郎博士のお二人が演壇に立たれた。

初めに立たれたのは安倍文部大臣であった。哲学者として令名の高かった安倍さん。雪のような白髪が美しかった。その冒頭の言葉が私を驚かしたのである。「我々は長い間、神州不滅を念願した」大臣は神州不滅と明確に言い切られた。一瞬、少なからぬ危惧の念が私の脳裏をかすめた。占領下、この記念講演で、おそらくだれしも禁句と思うであろう「神州不滅」とは。

安倍さんは淡々と続けられた。「私は今もなお神州不滅を念願する」と。明日の新聞がどのようにこれを取りあげるか、文部大臣の首は飛ぶかもしれない……そのような連想が走った。大臣は「我々はその神州の不滅を、この新しい日本国憲法でこそ実現するのであります」。このように結ばれた。今、憲法をめぐっての改訂、非改訂の論議がやかましい。その論者たちに「神州不滅」の念願が生きているかどうか。

講演会の第二陣は金森さんであった。穏かな人柄のこの憲法学者は静かな口調で新しい憲法の真

髄について語られた。象徴天皇、主権在民、基本的人権の平等、男女同権、戦争放棄など。それは分りやすく、納得のいく名講演であった。そうして締めくくりに「憲法が変わりました。民法も変わるでしょう。家族制度も根本から変わるに違いありません。しかし、いくら民法が変わっても、古い日本にあった美しい点まで変えようというのではありません。このことは忘れないように。子々孫々に伝えてほしいのです」と。

アメリカの社会学者パーソンズは言う。夫は夫、妻は妻。親は親、子は子である。その力も役割もそれぞれに異っている。しかし、その異った力が「愛の義務」で結ばれなければならない、と。私もその通りだと思う。今、私たちの周りの家族をめぐる問題の原因の一つは「愛の義務」で結ばれようという求心的な力の弱さではあるまいか。



鯵坂　二夫　明治42年2月8日生　鹿児島県加世田市出身・京都市在住
▽昭和7年京都帝国大学文学部哲学科卒業
▽同25年京都大学教授、47年名誉教授
▽昭和47年～平成5年甲南女子大学長
▽著書『教育学』『教育原理概論』他

尊敬されたイモ泥棒

荒井範雄

戦後、私は長野県立屋代中学で最終学年を送りつつ両親の実家の農業手伝いをして居た。重労働だったが、戦後の食糧難にも腹一杯食べることが出来た。その頃、東京やその近辺から毎日のように多くの買出し部隊が信州へやって来た。米やイモを現金買いの人、物々交換する人達だ。だから終戦後の農家はホクホクの金持ちに変った。

或る日の午後、一歳年下のいとこと千曲川の土手で馬鹿話をして居た。土手下の畑で、一人のお百姓がイモを掘っていた。そこへ十五人位の買出し部隊が通り掛り、イモを売って欲しいと懇願する光景に出会った。お百姓は手を振りながら、「駄目だ。売られない」と言って相手にしなかった。遠くから必死の思いで汽車に乗り、買出しに来ているのに気の毒な光景だった。お百姓はイモを自転車に積んで帰って行った。その時私は、若者の正義感と大胆さを持って仕舞ったのだ。「ちょっと待っていなさい」。買出しの人達にそう言って、私はいとこに、家に帰ってクワを二本持って来るように言い付けた。彼は自転車で来ていたから、十分程でクワを二本持って来た。それからイモ泥棒が始まったのである。

「これから二人でジャンジャン、イモを掘るから、リュックサックに入るだけ詰めてかえりなさい」。そう言って掘り始めたのである。いとこも買出しの人達も「他人の畑でしょ。いいの」と言

って居たが「捕まれば俺が警察に行く」と言って必死でイモ掘りをした。彼は農家の長男だから、流石にイモ掘りは上手だった。私の何倍も早く作業が進んだ。最初、ためらって居た買出しの人達も目の色を変えてリュックに詰め込んだ。一時間足らずで全員のリュックが一杯になった。「早く帰って！気を付けて」。重いリュックを背負った集団が笑顔で頭を下げ下げ土手を歩いて行った。みんな振り返りながら手を振っている。

あの時の光景が忘れられない。あの時の買出し部隊は、私よりみんな年上だったから、今頃どうして居るだろうか。

平成元年九月、私の父の葬儀の時、あの時のことをいとこがしんみりと私に言った。「あれ以来、僕は貴兄を尊敬している」。想像もしなかった言葉であった。あの時の買出しの人達も生きていたら、きっと忘れられない思い出であろう。



荒井　範雄　昭和4年4月14日生　長野県更埴市出身・北九州市在住
▽昭和28年明治大学法学部卒、㈱田中製作所小倉工場入社
▽昭和43年4月現社名㈱セントラルユニ代表取締役
▽平成元年3月代表取締役会長就任、現在に至る

KITA（カイタ）誕生

有森隆繁

昭和五十年八月二十日千草ホテルの歓迎会でフィリピン、アルゼンチン他十ヶ国十名の研修員の喜びに満ちた姿が壇上にあった。それはこの北九州で初めてカイタが研修する「鉄鋼材料検査コース」の為に来日した国際協力事業団（JICA（ジャイカ））の途上国研修員達であった。彼等の姿を見ながらカイタ誕生までの様々な情景が頭に浮かんでいた。「とうとう夢が現実に」という感動とともに。

カイタ誕生までのいきさつは次の通りである。

昭和四十年代後半の鉄鋼不況時に遡る。マスコミに「鉄冷えの街」と命名された北九州の活性化をはかるべく北九州JCは、一年間の調査・研究の成果を発表するための市民集会を開催した。

北九州市を経済独立国と見たてた上での教育産業としての大学の必要性、それも世界に通用し北九州にしか出来ないものとして国際製鉄大学の建設が最適との提言がなされた。暗いニュースしかなかった中でのこの提言、マスコミのみならず地元経済界からもその受け皿づくりが切望された。

そこで北九州商工会議所、西日本工業倶楽部、北九州JCの経済三団体による会合が持たれ、この大学構想の実現にはJICA国際研修センター誘致がより現実的であるとの結論を得、受け皿の財団化が決定した。昭和四十九年十月、岡野正実商工会議所副会頭を長とする募金実行委員会を結成、県・市・民間企業約五百社から五千万円の浄財を集めることが出来た。また、この事業の成否

は理事長の人選で決まるという認識のもとに、谷伍平前市長、岡野副会頭による三顧の礼で水野熟新日鉄常任顧問が理事長に就任された。構成する理事役員も三団体より選出され昭和五十年七月カイタは設立された。

当初二名でスタートしたカイタも今では六十名を超えるスタッフを擁し、これまでに八十六ヶ国千五百名の技術研修員を世界に送り返し、日本ファンづくりに貢献している。また、カイタ設立の目的であったＪＩＣＡ国際センターは、平成元年十月八幡平野に完成、技術研修も出来る全国でも数少ないセンターとして偉容を誇っている。今カイタは年間十を超える行政からの調査団が訪れるほど全国で有数の国際的ＮＧＯとなった。ただ、他都市がまね出来ないのは水野理事長を中心としたボランティアな協力体制にあると思われる。私も初代事務局としてこの事業に参画出来たことを誇りに思い、カイタの今後の発展を望んでやまない。



大気汚染モニタリングコースの研修員と（筆者は左端）

有森　隆繁　昭和16年8月5日生　北九州市出身・北九州市在住
▽昭和39年慶應義塾大学経済学部卒、入交商事入社、40年同社を希望退職、有森工業入社
▽昭和43年有森工業代表取締役社長、平成7年取締役会長に就任
▽㈶北九州国際技術協力協会（通称ＫＩＴＡ（カイタ））事務局次長
〈好きな言葉〉「人生須（すべから）く跡有るべし」（福澤諭吉）

学童疎開、無試験組

石井幸孝

育ちざかりを、戦中戦後の東京世田谷区で過ごした。昭和十八年、戦雲もきびしくなり、奥沢国民学校も信州に集団疎開することになった。疎開先は松本の西、梓川の扇状地に位置する波多村（現波田町）で、今は上高地の入口でマイカーなども多いようだが、当時は桑畑の展開した豊かな農村だった。六年生だけは東京に残り、私共五年生は、親から離れる不安なうちにも、最年長組という責任感も持ちながら集団生活を始めた。最初盛泉寺という山すそのお寺に居たが、冬に向う頃になり、学校の近くへということで、青年学校の校舎を改築してそこに移ったのは良かったが、そこが火事に逢い、私共は寒空に焼け出されてしまった。急きょ二、三人づつ波多村の農家に分宿となり、また不安のうちに新たな生活が始まった。藤沢八一郎さんというお宅だったが、それはそれは実の子供のように可愛がってもらい、農家の仕事や生活、食べ物など、都会生活の私達にとっては、実に得がたい体験だった。

昭和十九年になると、最高学年六年生ということで、東京に帰ってきたが、皮肉なことに、それからが東京大空襲で大変だった。昭和二十年、都立六中（現新宿高校）を受験したが、三月十日新宿大空襲で寸前に無試験入学。国民学校も卒業式はなく、昭和五十五年に有志で思いでの卒業式をやった位だった。四ヶ月程軍事教練のきびしさを体験するうちに終戦。学制改革で六年間同じ校舎

にいたが、校名は「都立第六中学校」「都立第六高等学校併設中学校」「都立第六高等学校」「都立新宿高等学校」と四つも変った。何か事件がおこると「お前達は無試験だからな」といわれたが、大学受験の時は有名校合格者の数が開校以来の好成績だった。戦後も食糧難で、埼玉に冠水芋（洪水につかった芋で、ふかしても完全に柔らかくならない）の買出しなど思い出はつきない。今でも奥沢小、新宿高同期の結束は、共に苦労しただけに固い。

学校生活がこんな変則的な時代に二度となってほしくないが、私共はこの転変極わまりない学校生活の中で、世のこと、人のことを学び、苦労の体験を身につけてきたことは、今日に生きているような気がする。今の学校生活は、あまりにもそういう実社会の気持ちを学ぶ要素が少なくて、知識教育偏重になりすぎているような気がする。



石井　幸孝　昭和7年10月12日生　広島県呉市出身・福岡市在住
▽昭和30年東京大学工学部卒、日本国有鉄道入社、大船工場長、広島鉄道管理局長、工作局長、車両局長、常務理事首都圏本部長、同九州総局長
▽昭和62年4月より九州旅客鉄道㈱代表取締役社長
▽著書『蒸気機関車』（中公新書）

奉天に散った鎌田編隊

磯部重雄

終戦の放送は奉天（瀋陽）北飛行場できいた。当時操縦学生で未だ半人前という理由から「焦土再建の戦士たれ」と帰還命令を受け、列車で奉天を後にしたのが八月十九日十時で以下はその日の午後の出来ごとである。

これより先、終戦の聖旨伝達の為関東軍及び朝鮮軍に御差遣の竹田宮殿下は十七日から新京、京城を廻って十九日朝内地に向われた。この三日間宮機に雁行して護衛に任じた鎌田大尉指揮の四機の戦闘機も任務を終え奉天北飛行場への帰途についた。運命の悪戯と言うべきか、丁度この頃ソ連空軍は新京、奉天をはじめ満洲の主要都市近郊の飛行場に進駐して来た。鎌田編隊の隼四機はまさにこの混乱の極にある基地に飛び込んで来たのである。

編隊は悠々と美事な雁行形を保持しつゝ滑走路に沿って超低空でひと先づ通過した。敵も味方も一様に足を止め手を休めて空を仰いだ。編隊は大きく反転すると今一度反対方向から頭上を通過した。「どうする心算（つもり）だろう」と誰もが思った。再び大きく反転して来た四機は又々飛行場に向って超低空で進入して来た。突然編隊長機の機首がグイ、グイと持ち上がったと見る間に飛行場の中央で四機は一糸乱れぬ垂直上昇を始めたのである。「あっ！どうするんだ」。上昇の力が尽きるとそのまゝ右側の二機が右に左側の僚機は左へと正確な上昇反転を始め、次の瞬間隼は真っ逆様に唸りを

生じて地面に突込んで来た。「あ、あ、あ、……！」誰一人として次の瞬間を見ていることが出来なかった。目を閉じ耳を覆い思わず息をつめると同時に天地を劈く大爆音をたて、四機は等間隔をたもったまゝ猛爆煙を上げた。「やった！」日本人の胸を過ったのはこの思いであった。瞑目して唯々四人のパイロットの冥福を祈るのみであった。噂に聞いていた「侍の腹切り」を目前にしたソ連兵は悉く肝を潰し、その後の交渉は紳士的な態度に一変したという。（第二航空軍後藤参謀の著述要約）

鎌田正邦大尉（大分県出身陸士55期）　西谷眞六中尉（青森県出身陸士57期）
福田　滋中尉（岡山県出身陸士57期）　後藤宰久中尉（熊本県出身陸士57期）

の四人は先輩であり操縦教官である。齢僅かに二十歳から二十三歳。終戦記念日を迎へる度に私にとっては己の生きざまを反省させられる「忘れ得ぬ人達」である。



磯部　重雄　大正15年1月18日生　山口県下関市出身・北九州市在住
▽昭和20年陸軍航空士官学校卒
▽昭和24年九大工学部卒、27年九大経済学部卒
▽磯部鉄工㈱社長
〈好きな言葉〉「一大事とは本日只今のことなり」

町民の熱い思いが、堅い鍵

今井宜子

ラ・トラビアタの二重唱が終わると、場内は割れるような喝采にわきました。歌ったのも、伴奏をしたのも当校の生徒。なによりも自分達の学校で自分達のピアノを弾いて——昭和二十五年五月、緑の風も心地よい自前のピアノ開きです。体育館などない時代。前日、三教室の間仕切りを取り払ってつくった会場は生徒と父母、来賓、教職員で廊下もいっぱいでした。次のソプラノソロ「シューベルトのセレナーデ」では私も伴奏しました。新しいピアノ独特の堅い鍵の感触が夢でない現実の感激を熱くたしかに伝えました。

それは新米教師の無鉄砲な発言からでした。昭和二十四年春鹿児島青年師範を卒業して私が赴任した学校は鹿児島市から北西へ約五十キロの小さな温泉街にある中学校。二年前の学制改革で発足したばかりの中学校は二、三年生が新設の校舎、一年生はおよそ七百米離れた小学校に間借り。中学校にはピアノもなく、小学校の音楽教室を借りて授業するありさま。休み時間に二、三年生が息をきらして小学校への畦道を往復する姿は、音楽を担当していた私にとってつらい光景でした。着替えや雨具も足りない時代で雨風の日は哀れでした。

それで五月のＰＴＡ総会の折、教頭先生のお許しを得て音楽教育の狙いと実情を説明したところ、意外にもその場で全校力を合わせてピアノを購入しようということになり、びっくりしました。

どうして浄財を集めるか、役員会を重ねて、結局校区内挙げて芸能大会を開き寄付を呼びかけることになりました。当時はテレビやカラオケはもちろん、常設映画館もない地方の町としてはいちばんいい方法でした。効果を挙げるためには大がかりな企画がポイントです。学校は生徒達の歌やダンスにミュージカル。小学校の若い先生達の独唱のほか他校に赴任した学友にも応援を頼んで、私もソロや二重唱、混声合唱などに目いっぱい出演しました。一方、父母は父母で歌や尺八とバイオリンのアンサンブルをはじめ地方特有の太鼓三味線入りの踊りなど盛り沢山のプログラムを組んで、夕方から中学校区内三つの小学校で三夜連続開演しました。生徒も教師も父母、町民も暑い最中(さなか)一所懸命練習して夏休みも終わりに近く、毎晩トラックで移動し、精いっぱい演じた校区挙げての熱い思いは一年後のピアノ開きに大輪の花を咲かせたのでした。

新米教師の直線的な気持ちを受け止めて下さった教頭先生や発足したばかりの新制中学の支援にPTA、校区住民挙げて立ち上がっていただいた情熱は今日からすると夢物語りのようですが、昨年夏当時の生徒達から還暦記念同窓会に招待の便りが届き、改めて時の流れを痛感しました。



今井　宜子　昭和3年11月17日生　東京都文京区出身・鹿児島県樋脇町在住
▽昭和24年鹿児島青年師範学校卒、中学校教師▽カワイ音楽教室講師を経てピアノレスナー▽北薩ピアノ研究会会員、祁答院音楽研究会代表
〈好きな言葉〉「しても一年、しなくても一年」

厭な記憶

入江伸明

夏の西の空に巨大なキノコ状の雲が湧き上がっていた。それは今までに見たこともない異様な雲であった。少年の日に見たその光景は、今も脳裏にある。佐賀県の有明湾ぞいの一寒村の疎開先で見たのは、まさに原爆の雲であった。長崎に原爆が投下されたのは、今から五十年前の昭和二十年八月九日である。

米軍機による北九州への空襲は昭和十九年六月十六日に始まっている。私が九歳で国民学校（現在の小学校）の四年生の時である。初めての空襲のとき庭に掘っていた防空壕に、家族で転げるように逃げ込んだ。その時の空襲警報のサイレンの音、敵機を探すサーチライトの交錯する幾条もの光線、帆柱山の山頂の高射砲部隊が敵機を狙って撃ち出す轟音を思い出す。翌朝、庭のあちこちに砲弾の破片が散らばっていた。しかし、不思議に恐怖の記憶はない。

この空襲がきっかけになったのか、私達は家族挙げて佐賀の方に疎開した（その頃父は体調を少しくずしていた）。疎開先の田舎にも、戦火は徐々に押し寄せてきた。時々敵の艦載機が飛んで来て、田舎の細道を歩いている人に機銃掃射を浴びせたりした。ある夜、私達は有明湾の対岸にある大牟田が一面火の海と化して燃えている様を眺めつづけていた。大牟田も空襲でやられたのだ。

この様に戦況は、日増しに悪く傾き始めていた。ある日、天皇陛下から直々の重大放送があると

のことで、父を中心に私達の家族や近所の人達も集って、ラジオに耳を傾けた。ラジオからの天皇陛下の玉音は、雑音がひどく聞き取りにくかった。皆が父に天皇の真意を求めた。日本が戦争に負けた事を、父は告げた。

私が記憶している父の言葉は、この時を最後に、あとは思い出せない。父は、この日から十一日後に亡くなった。愛国者であった父は、日本の敗戦を知った時から発熱し、佐賀市の病院に入院した。病院といっても終戦の混乱のなかで、薬も氷もなく、言わば、戦場における戦病死に近かった。享年四十五歳であった。

母は生前に、終戦前後の事は思い出すのも厭だとよく言っていた。それだけに当時の詳しい事情を母にたずねる事は憚られた。五十年経った今頃になって、なぜか父の無念さや母の哀しみが胸に迫ってくる。



入江　伸明　昭和9年12月3日生　北九州市出身・北九州市在住
▽昭和33年早稲田大学第一政治経済学部卒業、三井信託銀行入社
▽昭和36年入江興産㈱入社、50年代表取締役社長
▽平成4年社名を㈱アステック入江に変更
〈好きな言葉〉「逆境順境に襟度を看る」（呂新吾）

なつかしい誤訳

岩城富美子

昭和十年代のはじめ私は女学校の生徒でした。当時は中国の東北部（旧名満州）で勃発した十五年戦争のたゞ中で、日々戦時体制が色濃くなって行く暗い時代でした。しかし私の住んでいたソウル市（旧名京城）は、植民地であった所為か、女学生を対象とした勤労動員もまだ始まらず、比較的のんびりしていたようです。（水面下ではいろいろな動きがあったのでしょうが）

ある時、それはたしか国語の時間であったように思います。私達の憧れの的であった若い教師が誰に語りかけるともなく「既に隴を得てまた蜀を望むか、愚かなことだ」とひとり呟いたのです。一瞬の出来ごとでした。今にして想えば、当時の戦局や軍部の動向に対する、知識人の一人としての愁いと、時局に対する痛烈な批判であったのでしょう。しかし一年生の私達は、故事によせる教師の思いが理解できませんでした。

「ロウヲエテ、マタ、ショクヲノゾム？一体何のことだろう？」。いささか早熟で生意気だった私、あれこれ考えました。そして思いついたのは、昭和不況の流れの中での失業問題でした。「大学は出たけれど」というその頃の流行語がありましたね。手広くやっていた事業に失敗し、当時不遇をかこっていた父の姿が、思考の過程に重ね合わされたのかも知れません。能力がありながらよい仕事に就けない。それでも遊んでいるわけにもいかない。口凌ぎのための臨時のアルバイトを得

て、ほっとしたのも束の間、それに安住出来ない悲しさ。「あゝ然るべき仕事につきたい」という切実な願いが込められている。即ち「労ヲ得テ、復職ヲ望ム」だと。

この珍解釈を友達仲間に喋っては得意顔だった若い日の姿、そして後日父から大笑いされた口惜しさと恥ずかしさを、今でも思い出しては苦笑させられます。改めて言う迄もありませんが、この故事は、中国の戦国時代、すぐれた戦略家であり、後に魏の始祖となった曹操が、司馬懿の野望をたしなめて言ったと言われている有名な話です。

今は亡き父ですが、当時娘の珍解釈が余程おかしかったのでしょう。その後しばしば口にし、その度に、小学校卒業後の男女別学（女児は女学校へ、男児は中学校へ）や教育制度に見られる男女の不平等に対して、彼なりの意見を展開したものでした。忘れられない懐かしい思い出の一つです。



岩城富美子　大正11年10月28日生　鹿児島市出身・福岡市在住
▽昭和28年旧制九州大学文学部哲学科卒、九大教育学部助手を経て西南学院大学に就職、平成3年定年退職、名誉教授
▽著書『保育と福祉のための乳幼児臨床心理学』（編著）、『子供の育て方と性格』（共著）その他
〈好きな言葉〉「われは植え、アポロは水注ぐ。されど育て給うは神」

日々是新（ひびこれあらた）

上野正康

戦後間もない昭和二十二年五月、先輩の強い勧めで母校の基礎医学の研究室に残った。当時臨床部門には復員した若い人達が残りつつあったが、基礎部門に残る人は殆どいなかった。さらに戦中戦後の荒廃から研究設備も古いものが多く、何か研究しようとしてもお手上げの状態であった。しかし、昭和二十六年頃になると、日本の世情も落ちつきを取りもどし、それと同時に同種の各大学からの研究業績の発表が始まったのである。私も研究室に籍をおいた以上、スタッフが足りない、研究設備が劣っているからと言って座視するわけにはゆかなかった。私は真剣に考え始めた。まだ当分の間はスタッフの充実と充分な研究施設など期待出来そうもなかったので、中央の同種大学の研究に太刀打ち出来るにはどのような研究を始めたらいいのか。考えているうちにテーマは他の研究者達があまり手を出さない地味でかつ困難な研究に絞られてきた。遂に思い当った。それは先ず組織中の神経線維を特殊染色して光学顕微鏡下に鮮明に浮き彫りにする手法の研究であった。

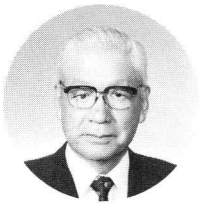
それから毎日が私の戦争であった。昔から組織中の神経線維を鮮明に染め出す手法は難しい仕事の一つであった。教科書通りにやっても満足のゆくものがなかなか得られなかった。その後、数年間寝ても覚めても、そのことのみを考えながら研究室での染色手法の実験が繰り返された。

この頃であった。私の心の中に「日々是新」ということばが定着したのであった。失敗の毎日が

続くので、時には落ち込むこともあったが、前日の惨めな気持ちを翌日まで持ち越すことはやめよう。そのためにも一日を全力投球でゆこう。そして明日の朝は新しい気持ちでまた実験に取りかかろうと自分の心に言いきかせながら数年が過ぎていった。

ようやく、昭和三十二年に私と二人のスタッフは数年間の努力が報いられて、ほぼ満足のいく実験結果が得られるようになり、この特殊染色手法を応用した研究が順調に進捗し、学会にもたびたび発表し、研究論文を学術雑誌に発表するまでになった。さらに嬉しかったのは、私の研究室以外の多くの研究者達が私の考案した手法を使って研究がなされていることであった。

私の研究生活は四十年続いたが、いつも座右の銘として「日々是新」の気持ちを持ち続けてきた。



上野　正康　大正10年10月19日生　大分県宇佐市出身・北九州市在住
▽昭和19年九州歯医専（九州歯科大学の前身）卒業
▽昭和29年九州歯科大学助教授、39年教授、54年学長
▽現在、九州歯科大学名誉教授
〈好きな言葉〉「和して同ぜず」（孔子）

炎の恐怖

上村徹郎

昭和二十年八月八日、旧八幡市中心部が米軍焼夷弾攻撃を受けた白昼の空襲は、当時小学四年生だった私にとって唯一の戦争体験でした。ちょうど近くの八幡製鐵病院構内に近所の友人と蟬採りに行った折に遭遇し、火に追われ必死の思いで逃げ回りました。

当日は快晴で昼前の焼夷弾落下数夥しく、火の回りも早く、病院内を逃げまどう内に友達ともはぐれ、退避途中では警護団とおぼしき人から熱気避けに用水桶の水を頭からぶっ掛けて貰ったりして何とか病院外の広場に逃れ、図らずも私を探してくれていた父に嬉し涙で抱きつく事が出来ました。

昨年一月の「阪神淡路大震災」の二次災害大火で焼野原と化した地区状況が映像紹介されましたが、八幡戦災もこれと同様建物家財等瞬時に焼失し、無い無いづくしからの再出発は、被災したどなたにも大きな試練を与えたものと思います。

父が経営する会社に入社当時、既に社名も現称号として紙加工主業の中での印刷部門は、技術革新の真っただ中で、自動化・高速化が叫ばれ、事務用伝票も手書きから電算機普及で連続帳票（フォーム印刷物）への転換期に入っていました。それで到津本社工場西側二階部分に新鋭機三台とスリッターを加え四台を並べた迄は順風満帆の感ありましたが、思わぬ落し穴が待ち受けていました。

年間を通じて湿度の高い北九州地区では、関東等に較べ紙の伸びが出易い為印刷室全体の空調が必要でした。今から三十年前の空調機といえば冷房は水冷で暖房時は熱盤挿入切り替えが必要な普及初期でした。そこで調湿効果を高めようと印刷室の壁や天井全面にモルトプレーン（石油化成品）を張りつめ効果を挙げましたが、翌年の四十二年秋、空調機熱盤修理不良もあって切り替え調整中でのスイッチ発火が化成品壁に燃え拡がり、手持消火器による初期消火に失敗して窓から黒煙が吹き出し、駆けつけた消防車による消火活動中は軌道敷の電車をも一時止めるありさま。結局、工場二階部分を焼失して近隣の方々にも迷惑をお掛け致しました。しかし階段が比較的大き目で二箇所設置していた為社員の避難では幸い怪我人を出さずに済みました。

産業界は一面競争社会ではありますが、この折の近隣フォーム同業他社の方々には、一時的な外注も快く受託いただく等〝人の情け〟のあり難さが身に泌みると共に、忘れかけていた空襲の恐怖もよみがえって火熱の怖さを改めて知りました。遅まきながらも今は防災にも力点を置く経営を目指しております。



上村　徹郎　昭和11年3月20日生　北九州市出身・北九州市在住
▽昭和33年学習院大学経済学科卒、上村紙業㈱入社、常務取締役を経て、44年代表取締役社長、現在に至る
▽北九州商工会議所議員・東芝北九州工場「芝栄会」会長
〈好きな言葉〉「眞実一路」

機転

碓井三子男

関東大震災の復興事業で東京工廠を小倉へ移転するその時期、小倉陸軍造兵廠の前身小倉兵器製造所に就職したのは昭和四年のことでした。兵器製造の職場だけに他の官庁にみられない指揮系統や人事権でした。当時、課長が軍人の中佐で掛長が文官の勅任官技師という人事でしたが、敬礼は中佐が先にして技師が答礼していました。職場は厳格で随分と規則も厳しく、公務出張の宿賃や食事も必ず領収書を持ち帰るよう指導されていました。移転工事費が当時の福岡県庁の全体の予算に匹敵する程でしたから綱紀の乱れを慮ってのことと思います。その中で建築技術は九州の他官庁、民間のトップであったと今でも思う程人材（先輩）に恵まれていました。先に申しました綱紀の乱れで思いだしますと戦前戦時を通して憲兵隊の手入れが三、四回ありましたが、その後始末の処理をその都度指名されて私が主任を務めました。堅い性格が見込まれたのでしょう。

それが戦時になると、若い技術将校がぞくぞく召集されて入って参り、軍紀になじんでない奔放さで教育教官が目をむくような考え方の違いがございました。忘れもしません、昭和十九年になると、戦局も危ふくなり、造兵廠も爆撃に遭い、第二製造所も大分県宇佐郡糸口村に疎開することになりました。このとき、通常一年半かかる工事を六ヵ月で完成するよう特命を受け、若い中尉二人と六月、現地に派遣されました。私が計画を担当したので止むを得ませんが、普通のやり方で工事

をしては間に合いません。そんな折、堅い制度の中に育った私が若いのびのびした二人に刺激されて今迄の制度もあったものではありません。工事の基礎も鉄筋コンクリート造を木杭に替える等して進め、幸い私が先年手配した波形鉄板や石油類（輸送用）が他に比べ豊富で本当に役立ちました。その年、台風が北九州を襲い、国道も国鉄も交通が止って予定の資材も入ってきません。中でも宇島の酸素は漁船を頼み深夜満潮時に駅館川を遡り国道の下流で陸揚げして現地に運び入れることが出来ました。昼夜なく工事を進める中、工事業者の食糧が足りません。本庁に電話上申、工廠長も動いて大分県から白米の特配を受けるなどして随分無理な工事量も無事に果たして十二月末には小倉の本廠に帰ることが出来ました。

融通無碍と申しますが、固定観念にとらわれず、環境の変化には臨機応変に対応することの大切を教えられた五十年前でした。



碓井　三子男　明治40年10月25日生　福岡県吉井町出身・北九州市在住
▽旧県立浮羽工業学校卒、㈶京都建築研究所を経て小倉陸軍造兵廠に勤務
▽終戦後会社経営を経て門司市役所職員、定年退職後髙藤建設㈱に入社、調査役で退職
▽社会福祉法人小倉新栄会（小倉新栄病院）理事長、現在無職
〈好きな言葉〉「信じられる友」

パリの〝日本人〟

大石　潤

一九六八年「プラハの春」の時である。革命最中（さなか）のチェコスロバキアに、突然ソビエトの戦車が侵入した。私はそのことを、パリ留学中に新聞で知った。パリでは学生達が騒ぎ始め、一般市民をも巻込んで抗議の運動となった。遂に軍隊が出動、交通機関もストップしてしまった。その上、郵便物までもが。留学中の私の生活は不安の中に閉じ込められた。音楽院でのピアノレッスンはそれでも続けられたのだが、パリ郊外に住んでいた私は、残り少ないお金にタクシーで通うことも出来ず、軍隊のトラックに便乗して音楽院まで通った。そのトラックの中で、私の頭の中は音楽を鳴らすことで精一杯だった。音楽だけが私に頑張る勇気をもたらしてくれた。花の都パリも、つめたい離れ小島のようであった。私のピアノの先生は「ジュン、大丈夫か」と、何度もたずねて下さり、レッスンの度に食事に誘って下さったのだが、私は心の中で感謝しながらお断りした。

このような状況の中で、私は夢中でピアノの練習をした。弾いて弾いて弾きまくった。もうやけくそ練習である。食事は一日一回。空腹のために、袋の中に残っているスパゲッティの折れたものをかじったりしたこともあった。しかし面白いことに〝やけくそ〟がだんだん楽しくなってきたのだ。音楽の中に色々なものが見えてきたのだ。空腹でお腹が音楽する音も妙におかしく、それほど悲愴感もなくなってしまった。

やがて騒ぎも鎮圧されて、パリは落ち着きを取り戻し、国からの送金もやっと届いた。私はパリの街に出向き、腹いっぱい日本食を味わった。日本人である自分を取り戻したのである。

その後、一軒の映画館の前で私の足は止まった。オーケストラの写真が目についたのだ。題名は忘れたが、感動の映画であった。ナチに追われている一人のアメリカ兵士が、最後に逃げ込んだ所はコンサートホールであった。今、将に始まろうとしているオーケストラの中に、彼は座りこんだのである。コンサートは始まった。そこにナチの兵士が入って来た。コンサートは中断、ただ一人服装の違ったアメリカ兵に、ナチの目は止まった。観客に緊張が走った。その時、アメリカ兵はトロンボーンでアメリカ国歌を吹き鳴らしたのだ。〝感動！〟観客から拍手とブラボーがかかった。

愛国心――私は無意識に食べた日本食に、何か共通感を覚えた。そして感動の一シーン、私は日本人であることに大きな誇りを持った。



大石　潤　昭和16年6月17日生　徳島市出身・東京都東村山市在住
▽昭和39年国立音楽大学卒業、パリ・エコール・ノルマル音楽院に留学▽国立音楽大学教授、日本ピアノ教育連盟会員、日本デュオ協会会員、グループえぴ会長、吉祥女子高等学校講師

復員

大塚金藏

終戦の年の九月十五日、私は徳島の海軍航空隊から復員業務の一端を終え、漸くにして小倉駅に辿り着いた。ホームでは戦時中の国防婦人会の方々であろう人たちがお茶の接待をしていた。てっきり私達復員軍人のためにこうまで、と思ったが、これは甚しい思い違いで、小倉に収容されていた米軍捕虜が解放され、長崎に送還のためのもてなしというのである。大きなリュックサックを背負い降り立った私は、むけられる白い眼差しに追い立てられるように改札口を通り抜けた。

駅前は疎開のために映画館をはじめ多くの商店が取り壊され瓦礫の山であった。残されていた電柱には麗々しく「キャバレー○○開店　美女大多数求む」というポスターが随所に張られていた。戦後の女性の職場がキャバレーなのかと複雑な思いを抱きながら停留所で電車を待っていたが、順番の列もなんのその、電車が着くや否や、我先に乗る者で押し合いへし合いで、重い荷物を持っている者は押し退けられる始末。道徳も地に落ちたものだ、とやむなく歩いて帰ることとした。汗びっしょりで帰る道すがらのこと、予科練あがりと覚しき若い集団が、復員服の上衣を肩に羽織り高足駄の音を響かせながら軍隊で覚えたであろう卑猥な歌を放歌高吟する有様を見たとき、先程の若い女性の募集ポスターが頭をよぎり、将来の行く末をつくづくと考えさせられたものであった。

二十二歳の多感な青年であった私は、家に帰るなり大声で「負けて帰ってきた！」と怒鳴ったと

いう。留守番の妹はびっくりして直ちに連絡したらしく、両親は急ぎ戻り、その日は家族ともども無事を祝福してくれた。それからは何もすることもないままの日々に両親が私の心情を察してか、書籍等を疎開していた大分の田舎に行かされ、二ヶ月ばかり晴釣雨読の毎日を過ごした。

心の整理がついた十一月末、家に帰る早々恩師の助言と地元校長先生のご協力により青年団の組織作りに取り組み、地元校区青年団を翌年一月に結成してその団長となる。各小学校区にも市から青年団の組織樹立を奨励され、これが機縁となって市役所に入職することとなった。三月には小倉市連合青年団の設立にこぎつけ、私は市職員在職のままその団長に推挙され、昭和二十六年辞任するまで活躍の場を与えてくれたことは、私の人生の大いなる裨益となり、当時の市長をはじめ上司の方々には感謝の思いで一杯である。



大塚　金藏　大正12年6月25日生　北九州市出身・北九州市在住
▽昭和17年旧制常磐中学校卒▽昭和21年小倉市役所入職、49年小倉北区長、51年病院局長、56年退職、北九州市土地開発公社専務理事、60年退任、医療法人北九州病院専務理事
▽平成6年同法人顧問理事、現在に至る

石油危機の教訓

大辻清次郎

社会福祉法人小倉新栄会は現在当会病院の画期的な増改策を計画している。私は理事長として、その推進の重責を担っているが、計画を進めるに当たって或忘れ難い思い出が胸中を去来している。

私は昭和四十八年に初めて当会の理事に就任したが、忘れ難い思い出とはこの年に起こった第一次石油危機のことである。理事就任早々、私は当時の石原理事長から病院増築工事の監督を仰せつかったのである。

昭和四十八年十月、世界を震駭させる大事変が発生した。第四次中東戦争の勃発である。アラブの産油諸国は原油価格を約四倍に引き上げ、原油輸出国に対する供給削減を行うというまことに荒っぽい戦略を展開した。石油輸入依存度が極めて高く、高度成長過程にあって、その消費量も大きい我が国は大変な経済混乱を被ることになったのである。若い人達には想像も出来ないだろうが、トイレットペーパーが市中から消え去る程の異常な混乱が起こり、家庭生活までがパニックに陥る事態になった。諸物価は高騰、当然建設資材、職人の人件費、輸送費等全てが著しく上昇、諸物資の需給は極めてバランスを欠くことになった。所謂第一次石油ショックである。遂に官公庁は、これまで例を見ないスライド方式を導入せざるを得なくなった。

その頃病院増築工事は既に契約を済ませ着工していたが、民間サイドでも官公庁方式に習わざる

を得ない状況になった。当事者である私は建築に関係して五十年の間、かつて経験したことのない異常事態に遭遇、その対策にとまどい、苦慮しながらも懸命の努力を傾け施工業者との交渉、円滑な工事の進行に当った。幸い、施工業者との交渉もうまくまとまり、工事は予定通りに進み、昭和五十年六月小倉ホテルで盛大に竣功式を挙行し得たのであった。因みに施工業者は高藤建設㈱であった。忘れ得ない我が生涯の一事である。

ところで、あの石油危機は教訓として生かされているのだろうか。確かに省エネ思想が生まれ、そのための設備投資もなされた。だが、平成五年冷夏の大凶作時、国産米を求めて右往左往する人々の姿は二十年以上も昔パニックに陥り、トイレットペーパーに血まなこになった人々の姿と同じではないのか。いずれ石油資源は枯渇するだろう。代替エネルギーをどうするのか。予想も出来ない危機が来た時どう対応するのか。「喉元過ぎれば熱さを忘れる」では私達の未来はないと考える。



大辻清次郎　明治42年6月1日生　東京都出身・北九州市在住
▽東京工学院建築高等科卒業、陸軍造兵廠技術部入職、終戦まで小倉造兵廠工場設計に従事
▽社会福祉法人新栄会理事長

うまかったヒトラーの演説

合馬又彦

日中戦争が始まって間もなく、昭和十二年八月横浜を出航してハンブルグ大学に留学したのですが、当時のドイツはまだ平和で、日本人もハンブルグには四人という静けさでした。

当時はヨーロッパに行くにもアメリカに行くにも船旅で、ヨーロッパの主軸通貨はイギリス・ポンド。渡欧するにも、ヨーロッパ内を旅行するにも英ポンドに両替して行きました。日本からの寄港地――上海（この時は第二次上海事変の直前で香港に回港）、シンガポール、ペナン、コロンボ、スエズなど全てイギリスの植民地だった時代です。途中スエズから陸路カイロへ行きピラミッドやスフィンクスを見物しアレクサンドリアで再乗船、マルセイユに着く迄の四十二日の船旅は愉快でした。特に靖国丸での三木清さん（昭和初期から同二十年没までわが国屈指の哲学者）との交友は私にとって有意義でした。後日三木さんに誘われてウィーンの自宅にフロイト（精神分析の創始者）を訪ねましたが、生憎入院中で面会謝絶で逢うことができませんでした。二年後フロイトは死亡して残念でした。

三木さんは三等船室に乗船していた久留米出身で川端康成の挿絵など描いた画家高田力蔵君と隣り合わせだったので、高田君が紹介したものです。

ハンブルグ大学のウィットマーク教授の下で昭和十四年三月帰国する迄約一年半内耳の研究をし

たのですが、当時のドイツは第一次大戦と世界恐慌の痛手から立ち直っておらずパンもバターも配給。パンには木屑が混っており、卵は外人が二日に一個、ドイツ人は三日に一個。フォルクス・ワーゲンが出始めた頃でした。それで大学の研究者や職員もナチズムより食糧難に関心が高く、教授たちもヒトラーは賢いから戦争はしない、と思っているようでした。ただ、若い医局員などはナチ特有の制服を着るものも少しはおり、ユダヤ系教授などは米国へ渡り始めていました。

宣伝と演説好きのヒトラーの街頭演説を二回聞きましたが、身ぶり手ぶりのヒトラーの演説はさすがで、ミラノで聞いたムッソリーニ、ハイドパークで聞いたチャーチルの演説など足下にも及びませんでした。

既に日独伊防共協定（昭和十一年十一月）が成立していたのですが、大学関係者も一般市民も日本に対する知識も関心も薄く、また昭和十三年正月、日独伊防共協定を記念して大島浩ドイツ大使がベルリンの日本大使館で開いた在欧日本人新年宴会でも防共協定の話など一切ありません。イギリスを始め欧州各地から集まった在欧日本人約四十人の普通の親睦会で、まだ静かな欧州のよき時代でした。



合馬　又彦　明治37年6月28日生　大分県中津市出身・北九州市在住
▽昭和6年慶応義塾大学医学部卒、同医局長、講師
▽昭和14年小倉市（北九州市小倉北区）に合馬耳鼻咽喉科医院開業、現在合馬クリニック耳鼻科担当
▽著書『ホルモン、内耳扁桃腺に関する論文』
〈好きな言葉〉「愚禿（ぐとく）」

母に導かれたこと

鍵山秀三郎

五十年前（昭和二十年）の八月、私にとっては生涯忘れることができない事がありました。

その頃私達の家族は東京で戦禍を受けて、岐阜県の山深い村に疎開をしておりました。元々から無気力で怠け者であった私は、環境や生活の激しい変わりようについてゆけず、自分自身をコントロールできないで、ますます意気地の無い人間に陥っていきました。

その日も耐え難い暑さを避けて、家の中で寝転んで本を読んでおりました。ふと何かの用事を思いついて、母を探しに行った私の目に飛び込んできたものは、焼けつくような炎天下で、線路工夫が使うような大きなツルハシを振るって山の荒地を開墾している母の姿でした。

厳しい太陽の炎熱にさらされている母を守るものは、熱暑を少しでも防ごうとして背中に背負った小枝の僅かな木の葉だけでした。

太陽も土も重いツルハシも、全てのものが母を苛んでいるように感じました。私が今すぐにでも手伝わなければ、母は死んでしまうという恐怖の念に駆られて、用事を忘れてその場から荒地の開墾を手伝い始めたのでした。

私はその瞬間から一大転機を得て、それ迄の怠惰で意気地の無い少年から、勤勉で何事にも真剣に取り組む一人の人間に変わったのでした。

私の果たす役割がたとえ僅かなものであっても、一鍬私が振るえばその分だけ両親が楽になると思うと、つい鍬やツルハシを握る手に力が入り、少しでも早く、一寸でも多くやりたいという意欲が次々と湧いて来ました。

誰から指図された訳ではなく、勿論命令されたものでもありません。唯々両親を少しでも楽にさせたい、喜ばしたい、喜ぶ顔が見たいと思って、日を追って夢中になっていきました。

まだ十二歳の子供ながらも、命懸けで取り組んでいくと、農業を本業とする人達よりも優れたものを収穫することすらできました。

日本史上初めて体験した敗戦という大きな出来事が起きても、変わることの無かった私の性格が家族を守りぬこうとする思いを込めた母の姿によって、一瞬にして変わったのでした。

裸一貫で上京し、三十余年の間に築いた財産を、一夜の爆撃によって失いながら一言も愚痴を洩らさなかった両親から人間の使命の大切さを学び、忘れ得ぬ事として人生を歩んで参りました。



鍵山　秀三郎　昭和8年8月18日生　東京都千代田区出身・横浜市在住
▽昭和27年岐阜県立東濃高等学校卒業、東京都港区のデトロイト商会入社
▽昭和36年独立、㈱ローヤル創業、平成2年株式店頭公開
〈好きな言葉〉「力耕せば吾れを欺かず。不問収穫　只問耕耘」

或る正月の日記

角川敏行

一九七九年　元旦

あけましておめでとう。異国の地で無事に新しい年を迎えられたことを、はるかなる故国から見守って頂いているであろう神仏と、郷に従う意味でアラーの神の両方に対し感謝。

夕べ、大晦日の夜空に光り輝く無数の星の中に、ゆっくりと移動していく人工衛星を見た。澄みきった大空を眺めている限り、世の中の争いごとなど全くのナンセンスとしか思えないのだが、私たちの住んでいる地上では、今日も「革命」という名の下に人間同士の殺し合いが続けられている。国全体が騒乱の嵐につつまれ、その度合いは日増しに、そして確実に激しくなってきているようだ。外部との連絡が途絶え、通信手段も使用不能となり、完全に孤立状態となって久しい。

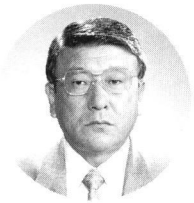
やはり昨晩、成功する確率はほとんど皆無であることを承知の上で、日本の家族に「無事でいるから心配しないで、よい正月を迎えてください」の一言だけでも伝えたい一心で、旧式の電話機に祈るような気持ちで手をかけた。何時間が経過したか。文字通り、指先に血豆ができるほどダイヤルを回し続けたが、一昨日、その前と同様に徒労に終わった。

何はともあれ、今日は元旦。「日の出」に間に合うように起床。空は快晴。可成り寒い。今頃、日本では年越しそばを食べている時間帯であろう。折角の正月だから何か日本の〝香り〟のするも

のでもないかと考えていると、机の引き出しの中に後生大事に仕舞っておいたセブン・スターの最後の一箱が残っていることを思い出した。

昭和五十四年元旦を迎え、見渡す限りの砂漠の果ての地平線から昇る眞赤な太陽を眺めながら、おもむろに、且つおごそかに日本煙草の封を切った。短時間のうちに、信じられないほどのスピードで上昇する砂漠の気温を肌に感じながら、モスクから流れてくる朝の礼拝、コーランのなんともけだるい旋律の歌声を耳にしながら、久し振りで、なつかしい日本の香りを満喫した。

もしも、無事で日本に帰れたら、今度こそ、煙草を止めようと思っているが—止めても止められなくても—今日のこの味は、一生忘れることのできない、ホロ苦い「想い出」として心に残ることだろう。（註・この年の二月十一日、王制政権が崩壊し、ISLAMIC REPUBLIC OF IRANという国家が誕生した）。



角川　敏行　昭和10年1月6日生　広島県呉市出身・福岡市在住
▽昭和33年山口大学経済学部卒、三井物産㈱入社、62年三井物産㈱九州支社運輸部長
▽平成3年同社退職、博多港運㈱代表取締役社長就任
〈好きな言葉〉「酒逢友知　友知己知　千杯酒少」

ひたすら越境、勝手に師事

加治屋　知暁

その年は占領軍が戦後初めて日の丸の掲揚を許し、ドッジ・ラインが実施されて、六月には自治体警察署が左翼に一時占拠される平事件が起こり、間もなく下山事件、三鷹事件、さらに松川事件と続き、世の中が騒然とした時代でした。昭和二十四年（一九四九）私が大学に入った年です。

大学は旧制で三年制。授業料は年間三千六百円。文学部の卒業資格は講義履修が二十一単位、卒業論文が三単位。通称「人民食堂」は朝がコッペパンにあさり汁。昼はうどん一杯。ご飯は夜だけで、開学記念日にチラシでもでると、食券を何枚も使って食べる奴がいて、最終講義を終って駆けつけると売り切れ閉店。新入生をがっかりさせました。こんな〝ウエテルの悩み〟はありましたが、当時は出欠などなく、試験に合格しさえすればよいので、一年目に片っ端から試験を受けて二十単位半とり、二年目からは気の向くまま学部を超えて教授の部屋を渡り歩きました。

太平洋戦争後、礼儀知らずの無鉄砲でドライな若者を「アプレ・ゲール」と蔑称しましたが、アプレ・ゲールだったのでしょう。友人三人と、わが国の推計学の草分けといわれる北川敏男・理学部教授に推計学の講義を一年間心理学教室でやってもらったこともあります。先生の都合で、半年で終わりましたが、医学部長に頼んで精神衛生学の講師を派遣してもらい、同じ心理学教室で聞いたこともありました。聴講生はいずれも四人でした。

また、マルクス経済学の高橋正雄先生、アナーキズム研究の今中次麿先生の話も面白く、今中先生は先生の部屋でよくコーヒーを沸かしてご馳走して下さいました。後年、北九州大学の学長就任挨拶で新聞社にお出になった今中先生は私を法学部の学生と思っていた、とおっしゃったほど。

こうした学部を超えた教授への師事は当時多くの学生がやっており、経済学部の友人は倫理学の助教授の家に仲間と押しかけていました。越境学生にありがたかったのは、どの先生も戦後回復した学問と大学の自由を守る情熱に燃え、熱心に指導してもらったことです。名講義で人気のあった田辺重三先生のゼミ、カントの『実践理性批判』流に言えば、学生を手段にせず、目的として向かい合ってもらったということです。戦災で住居もなく、田辺先生をはじめ多くの先生が教授部屋に宿泊し自炊をなさっていましたが、炊く米も乏しい中で、身を以て示された「人は手段にあらず目的である」が学問と思想の自由を回復した大学のエネルギーとなり、大学に限らず、学問と文化では負けないという国民のひたむきが敗戦日本を再建させたと思います。



S24年11月、鹿児島青年師範時代の恩師、鰺坂先生（前列左、一六頁参照）と酒井先生（後列左、一八二頁参照）と九大で（筆者は前列右）

加治屋　知暁　昭和4年12月7日生　鹿児島県大口市出身・北九州市在住
▽昭和27年3月旧制九州大学文学部哲学科卒業、毎日新聞社入社、編集委員、47歳で希望退職、同社終身名誉職員▽会社役員を経て自由業
▽著書『現代を演ずるもの』『こどもの心が見えますか』『思い出　田中辰治』他
〈好きな言葉〉「児孫の為に美田を買わず」（西郷南洲）

大　連

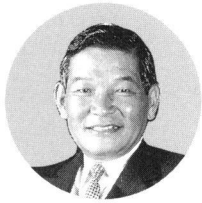
神谷興士

あのアカシアの大連で昭和二十年八月十五日を迎えた。快晴かつ非常に暑い日であった。母親に家の中に居るように言われていたのを振り切って通りへ出てみたものの人っ子一人いない異常な静寂がおおい、すごすごと家に戻ったのを思い出す。父親は直前の現地応召で不在であったが、幸いなことに戦地に着く前に終戦、除隊。旬日を待たず帰宅となりほっとした。だが、それからが混乱の始まりである。ソ連軍の進駐。日本人居住地の接収。何家族もの共同生活。つぎつぎと引き揚げる同胞とのあわただしい別れ。各地に発生するソ連兵による略奪の話。不凍港と言われた大連港の昭和二十年冬の凍結、新聞、ラジオなどマスコミのない生活などなどが脳裏を去来する。

さて、わが家であるが、父親の勤めていた満鉄の鉄道技術研究所は、ソ連軍に占領され、上級研究者は本土への引き揚げが認められないとのことで、数十家族とともに残留することとなった。紆余曲折を経て漸く昭和二十三年夏、全家族無事本土引き揚げとはなった。ただ、何時帰国できるともわからない状況下での三年間、親達の不安と望郷の念は子供には想像できないものがあったであろう。最後に家を離れるに際し、持って帰れないミシンなどの家財道具を知り合いの中国人に譲った光景を今でも妙に覚えている。

以上が思い出すままの断片的な「少国民の戦記」であるが、いまでも気になるのが希望して残留

した人達のその後と行方である。わが国の南満州経営は一九〇五年のポーツマス条約からであり、終戦時で四十年を経ており、三代目にもなろうという市井の人達にとっては、どうなっているか解らない本土より安全に見えたむきも少なくなかったということであろう。その後、朝鮮動乱や四人組の跳梁とがあるわけで『大地の子』（山崎豊子著）を読むにつけ胸の痛む思いがする。わが国の南満州経営は、日露戦争後ロシアから継承した権益をベースとしており、ポーツマス条約は、関係諸外国も認めた国際法上問題ないものであることを忘れてしまった人が多い。『かくて昭和史は甦る』（渡部昇一著）ではないが、戦前はすべて悪とするのではなく、明治維新以降のわが国の近代史観を正しく磨き語り継ぐことが非常に大切になって来ているのではないだろうか。いろいろな人の戦後五十年があった。私の戦後五十年はやはり南満州に在った市井の人達の五十年である。



神谷　興士　昭和14年8月10日生　東京都出身（大連市生まれ）・福岡市在住

▽昭和39年東京大学法学部卒、㈱日本興業銀行入行、証券部副部長、産業調査部長、取締役名古屋支店長、平成6年退任

▽平成6年国内信販㈱代表取締役副社長就任、現在に至る

〈好きな言葉〉「心明るく、心広く、心強く」

尽分立用

川口孝行

分を尽くして用に立つ―「尽分立用」は協和発酵工業㈱の社是の一つです。人には好むと好まざるとにかゝわらず将来を方向づける転機が訪れます。この転機にあたって大切なことは「尽分立用」の精神で、与えられた仕事に最善を尽くすことが、新しい道を切り拓く原動力となると思います。

私の転機は昭和四十年代前半で、当時、門司工場で酒造りを担当していました。柳川出身の杜氏蔵人が有明海の海苔養殖に転業して人手不足に悩みました。このため社員による酒造り体制と機械化を進めることに懸命で、研修テキストづくりから実製造へと二年間、家庭を後回しにする生活がまたたく間に過ぎました。そのような折、労働組合の非専従中央役員の話が持込まれ、酒造りを軌道に乗せることが優先すると固辞したものの、流れにはさからえず酒造りをしながら門司―東京を往復するようになりました。

会社業務に専念しようと考えていた四年目、委員長が体調を崩し、とうとう思ってもいなかった委員長職を引き受けることになりました。昭和五十五年までの九年間でしたが、当時はバブル景気の誘導期にあたる「いざなぎ景気」時代で、経済社会の動きは激しく第一次ドルショック、二度にわたる石油ショックと狂乱物価など大きなうねりの中でした。社内的には、医薬拡大に伴う専業他

社から多数の途中入社者、大学紛争の影響をモロに受けた人たちなど複雑で、会合では夜中まで激論をつづける日々でした。もっとも頭を痛めたのは、任期中に三つの工場閉鎖問題で、該当工場に所属する人たちにとっては生活に直結するだけに相手の立場になって徹底した話し合いの中から幸いにも円満解決をすることが出来ました。

組合役員時代に学んだことは、困難に直面しても問題から逃げずに相手の意見を尊重し、誠意をもって話し合えば解決出来ないものはないということを体得したことです。

明るい面では、昭和四十七年夏、上部団体の青年婦人百五十名の団長として訪欧し、ドイツ社民党を支えるドイツ化学労組の骨折りでノーベル平和賞を前年に受賞したブラント首相を官邸に訪問し「青年の協力なくしては、将来の社会も平和も語ることが出来ない……」と激励をうけ、温い大きな手で握手を求められた感激と感触は、忘れることが出来ません。



ブラント首相（左端）を訪問（左3人目が筆者）

川口　孝行　昭和9年3月26日生　熊本県荒尾市出身・福岡市在住
▽昭和27年現三池工高工業化学科卒▽46年協和発酵労働組合中央執行委員長
▽昭和57年協和発酵工業㈱九州支社酒類部長
▽昭和62年㈱協和サービス出向、専務取締役就任、現在に至る

神佛を敬う心

川崎安太

昭和十五年、私が大分中学（現大分上野丘高校）二年のときの二月、小学校時代から憧れていた陸軍幼年学校の身体検査が明日という日になって、扁桃腺炎のため四十度近い高熱が出、咽（のど）が赤く腫れ痛みだした。

入学試験は、身体検査に合格した者のみが学科試験を受けられることになっており、視力は一・〇以上、胸のレントゲン写真に若干の影があっても不合格になる等、たいへん厳格な検査で、私にとっては正に絶体絶命のピンチであった。

発熱のために、一年にわたる受験勉強の苦労を水に流す私を不憫に思ったのか、父は身体検査の当日、未明の三時頃、灯りは全くなく、昼間でも人通りの少ない約三キロの道を、折から降りしきる冷たい雨の中を歩いて、母の実家近くにある向原の稲荷神社に願掛けに参拝してくれた。

その願いが天に通じたのか、その日の早朝、父が仕事の関係で約束のあった藤本恕一郎先生（幼年学校時代の私の保証人）宅を訪問した際、私の病気のことを知った先生が、特効薬があると言って、白いキラキラ光る粉薬を下さった。

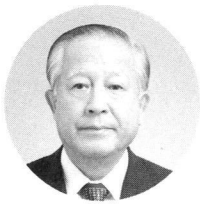
早速その薬を飲み、高熱と咽の痛みをおして大分市の公会堂で行われた身体検査場に向かった。ところが、どうしたことか、検査の始まる頃には奇跡的に熱も下がり、今まで痛かった咽も少し

赤い程度（軍医に風邪をひいたのかと問われただけ）で、無事検査に合格。数日後に行われた学科試験にも合格して、子供の頃より待望久しかった熊本陸軍幼年学校に合格することができた。

この時の父の稲荷神社参拝のことは、幾年か後に母の口から聞き、はじめて知ったが、平素より神佛に信仰心の厚かった父の無言の教えに感動し、より父を尊敬するようになった。

父の稲荷神社への願掛け、そしてあの白い粉薬との出会いがなければ、夢にまでみた幼年学校に入校することもできず、私のその後五十五年の人生も大きく変化したのではないかと思うとき、人間社会には、人知や科学の力では推し測ることのできない何物かが存在することを改めて強く考えさせられた出来事であった。

幼年学校で受けた教育は、今でも常に私の精神的、肉体的また知識の根幹をなすものと信じており、父に教わった神佛を敬う心は、今なお会社や家庭で苦難に遭遇したときの私の何よりの心の支えになっていることは確かである。



川崎　安太　大正14年9月20日生　大分市出身・大分県別府市在住
▽旧制大分中学、熊本陸軍幼年学校、陸軍士官学校を経て昭和27年明治大学商学部（旧制）卒
▽三菱鉱業㈱に8年勤務の後昭和35年㈱佐伯建設に入社、58年より同社社長
〈好きな言葉〉「敬天愛人」「真心（まごころ）」

日の丸金魚

菊池　功

我が家の水槽に紅白の美しい金魚が五匹元気に泳いでいる。九四年七月九日、向井千秋さんと宇宙に飛んだ六匹の金魚と兄弟であるとの証明書つきの貴重なものである。

名古屋から近鉄で約十分ほどの所に弥富町という三十万匹の金魚の故郷がある。その弥富金魚漁業協同組合長の三輪守夫さんがこの宇宙金魚の生みの親である。縁あってプレゼントを受けた。

向井さんの実験に同行する金魚はやはり真鯉ではいかん。日の丸にちなんだ美しい紅白の金魚がよく似合うと三輪さんは考えた。

三輪さんの宇宙実験へのつながりは十三年になるそうだが、その間本業の金魚を宇宙実験用に育てるのに苦労された逸話は数多く語られており、又多くの金魚も参加している。最後にスペースシャトルに乗せるたった六匹の宇宙金魚を選ぶために、千二百匹を提供した由である。

宇宙金魚とのご縁が出来たので、早速関係のデータ集めを秘書嬢の協力で始めてみると、現地漁協の皆さんはもとより、宇宙開発事業団より資料をＦＡＸで、ニフティーサーブで新聞情報を調べると忽（たちまち）七十件近くの記事が九四年七月頃のものとして出て来た。向井千秋著『メダカと飛んだ15日』も手元に届き、この全てに六匹の金魚のレポートが報ぜられている。

三輪さんはスペースシャトルが宇宙を飛んでる間、絶えず空を眺め「日の丸金魚」の無事を祈っ

たそうである。

北九州市では今、航空宇宙産業への想いが強いと聞く。新しい将来事業としての可能性をもつ都市である。然し新しい事業を興し、成功させ、定着させることは必要ではあるが困難なことが多い。この宇宙金魚は、宇宙産業とは言えないかも知れぬが、現実は宇宙開発研究である。然し事業としてみれば新規技術開発であり、新市場開拓と言えよう。本業を大切にその新しい展開発展を考えゆくことこそ貴重である。

小さな金魚にかけた大きな夢。その蔭で多くの方々の並々ならぬ努力、そしてそれを見た世界の人々の喜び、まさに二十世紀の美学と言えよう。残り二千日を切った栄光の今世紀も、最終コーナーで多くの問題が発生しているが、「日の丸金魚」は宇宙時代となるだろう新しい世紀への光となる「忘れられないこと」に私には思える。



菊池　功　昭和3年7月9日生　大分県中津市出身・東京都杉並区在住
▽慶応義塾大学工学部機械工学科卒、昭和27年㈱安川電機製作所（現㈱安川電機）入社、60年取締役社長、現在に至る
▽㈳日本電機工業会会長、㈳日本ロボット工業会会長歴任、㈳経済団体連合会常任理事、㈶北九州活性化協議会会長他を兼任
〈好きな言葉〉「心」

松下幸之助氏との出会い

北田光男

当社の前身であるバーゲンセンターはメーカーや地元業界の村八分にあい、私は十二年間に及ぶ辛酸をなめた。しかし消費者からの圧倒的支持を得て事業は順調に伸展、福岡市の本店をはじめ小倉や久留米まで店舗を拡張していった。折しも昭和四十三年、当時松下電器産業の会長をしておられた松下幸之助氏から「ちょっと大阪まで出てきませんか」という電話を突然いただいた。

天下の松下さんからのお呼び出しである。

面識はなかったが、よほどの大事であるに違いない。私はすぐ大阪の松下電器本社へ向かった。

松下さんはよく知られている通り、でっち奉公から身を興し、長者番付で日本一になった人で、「経営の神様」とまで言われた人。私も手本と考えて尊敬しているお方であった。その方から声がかかったのである。

挨拶を交わしたあと、松下さんは、優しい声で「なあ、北田はん、あなたの店に商品を出したい」とおっしゃったのである。

あの「松下」が、自身の商品を売ってくれると言ってきたのだ。私は心の中で「バンザイ」を叫び、その場で了承した。

「ただ」と前置きして、次に松下さんが切り出したのは店名の件だった。松下さんは「バーゲン

センター」は、いかにも値引き販売を強調したネーミングで我社の商品を出すのには抵抗がある、というのだ。「バーゲン」はアメリカではいい意味とされ、「グッドバーゲン」と言えば買物上手の意味だが、残念ながら日本では安売りのイメージしかない。

私は一週間の猶予と、一年間だけ新旧の名前を併用することの了解をもらって福岡に帰ってきた。そして考え抜いた。「バーゲンセンター」の看板を掲げて十二年。孤独な戦いを共にしてきたこの看板には、愛着もあるし知名度も高くなっている。「バーゲンセンター」の頭文字からとった「B」のマークも何とか残したい。そして「B」を生かした「ベスト電器」を考え出した。

あのときのネーミングはまさに「ベスト」だったと今、思うのである。

松下氏との出会いは今でも忘れられない思い出となっている。



北田　光男　大正3年3月21日生　熊本県八代市出身・福岡市在住
▽昭和12年巣鴨高商卒、卒業後大連に渡り幾多の職業を遍歴、20年6月応召
▽昭和25年九州鉄管継手㈱を設立、28年九州機材倉庫㈱を設立、31年3月テレビ販売業「バーゲンセンター」の看板を掲げる、47年「ベスト電器」に社名変更、56年㈱ベスト電器取締役社長、61年取締役会長、現在に至る
〈好きな言葉〉「天は自ら助くるものを助く」

悲しい十五人の空白

木下和子

昭和二十年（一九四五）四月一日鹿児島青年師範学校（現鹿児島大学教育学部）に入学した女子部学生四十人は全員寮に入り、激しい空襲の中で生死を共にすることになりました。学校は午前中が授業で午後は食糧増産のための農作業でした。

その年三月十八日には鹿児島市が第一回米軍空襲に見舞われ、この頃は毎日のように米軍爆撃機B29が空高く飛行雲を引いて銀色に光りながら通過していました。しかし怖かったのは急に機首を下げて機銃掃射してくるグラマン戦闘機。低空でくるので爆音が聞えた時には目の前に迫っており、だれかれかまわず撃ってくるので慌てて近くの蛸壺（避難用縦穴）に飛び込み身をかがめました。

六月十七日夜五回目の鹿児島大空襲で寮が全焼。寝巻のまま逃げた山の防空壕で市街地の方角、南の空も赤々と燃えているのを呆然と見つめました。この日鹿児島市の死者は二千三百十六人。負傷者三千五百人。被災家屋一万一千六百四十九戸、被災者六万六千百三十四人に上りました。夜明けを待って私達は裸足のままそれぞれの家に急ぎました。そして、既に沖縄は落ち、激しくなった鹿児島市の空襲に帰校して来たのは三十人でした。

八月九日夜には学徒勤労動員で鹿児島駅を出発、福岡県の陸軍太刀洗航空隊に向かいました。鈍行で肥薩線、鹿児島本線を乗り継ぎ十一日昼前久留米駅に着いた途端、ザァーッと焼夷弾のシャワ

ー。ピカッと目を射る光、足も焼けるばかりの炎と黒煙の見知らぬ街を人の群れについて一目散に走り逃げました。この時級友の一人が足に火傷を負い久留米医専病院に収容され、私達は市内の京町小に一泊して翌日宿舎に当てられた甘木市のお寺にたどりつきました。

敗戦を聞いたのは級友が入院している医専の病室でした。信じられない悔しさが胸をしめつけました。悪臭と暑さにむせる病室で、友人の傷口に蝿が止まらぬよう扇ぎ続ける担任の先生の手先で傷口にうごめくうじ虫。次元の違う世界に迷い込んだような空しさは今も忘れることができません。

混乱の中にも二十一年春には学生同盟に入り、海外から引揚げてくる方達の援助に立ち上がり、引揚船が着く岸壁や駅の広場にテントを張って湯茶の接待や帰郷のお手伝いに明け暮れました。

こうして友人と青春を語る暇もなくして迎えた二十三年三月の卒業式――あるいは空襲で傷つき焼け出され、あるいは帰郷した奄美が戦後アメリカの統治になって出国できなかったりして、卒業者名簿から級友十五人が消えていました。それは悲しい歴史の空白でした。



精一杯の正装で。S22年4月天長節の式後ー筆者は前列右

木下　和子　昭和3年11月13日生　鹿児島市出身・鹿児島市在住
▽昭和23年3月鹿児島青年師範学校卒業、中学教諭、結婚して退職▽鹿児島童話会会員、鹿児島読書サークル会長

〈好きな言葉〉「こころの貧しい人たちは幸いである。天国は彼らのものである」（聖書）

恩師ともらった銀メダル

君原健二

初めてオリンピックに出場したのは、東京オリンピックで、オリンピックの素晴らしさに感動し、選手としての喜びを胸一杯かみしめました。

東京オリンピックの最後を飾る日本期待のマラソンレースは、エチオピアのアベベさんが世界最高記録で優勝。そして、円谷幸吉さんは、ゴールの手前百五十メートルで、ヒートリィさんに追い抜かれたものの銅メダルを獲得、私は八位に終りました。

思わぬ成績に私の関係者は、大変落胆されました。その時の記録は、自己最高記録に対して三分三十秒も及ばなかったのですから。これに対し、円谷さんは、自己記録を一分上回る自己最高記録を作ったのです。厳しい結果に私は「自分の持っている力。それを発揮しきらないのも自分の力である」と割り切りました。

なぜ自分の力を出しきれなかったのか——私はオリンピック選手に選ばれてから「日本代表選手として良い成績を出さなければならない」という大きな責任を感じました。また、多くの方々から「頑張って下さい」「お願いしますよ」といった様々なプレッシャーもありました。当時二十三歳の私には、責任感やプレッシャーを受け止める心が十分備わっていなかったのです。

オリンピック選手という大きな栄光をいただいているのに、それが見えず、責任感やプレッシャ

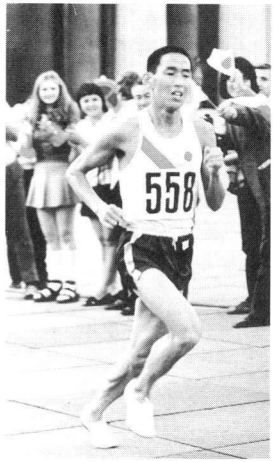
ーばかりが見え、それから逃げる行動をとってしまったのです。

オリンピックが終って一年間は、ほとんど試合に参加しませんでした。また、恩師の高橋進先生に仲人になっていただき結婚もしました。

そうして、東京オリンピックのほとぼりが冷め、新婚生活も落ち着いた頃、恩師から「青春時代にしかできないことは、青春時代にやっておかなくてはいけない。肉体の限界は、老いてから極めることはできない。今までやってきた走力の限界は、今しかできない」という燃えるような情熱の籠った説得が続きました。

そして、再び私は競技者生活へ戻って行きました。

恩師の説得がなければ、メキシコオリンピックの銀メダルも頂くことはなかったわけで、メキシコの銀もその後の競技も恩師の伴走で手にしたと思っています。



君原　健二　昭和16年3月20日生　北九州市出身・北九州市在住
▽昭和34年戸畑中央高校卒、新日鐵入社
▽東京オリンピックでマラソン8位、メキシコオリンピック2位、ミュンヘンオリンピック5位、ボストンマラソン、アジア大会など優勝
▽平成3年新日鐵退社、4年九州女子短期大学教授
〈好きな言葉〉「努力は、人間に与えられた最大の力です」

'72年、ミュンヘンオリンピックで

フルシチョフ失脚

清宮　龍

一九六四年十月十四日深夜、モスクワのホテルで寝ていた私の枕元で電話がけたたましく鳴った。受話器を取りあげると「フルシチョフが失脚したらしい」と友人の声。私はベッドから転げ落ちんばかりに驚いた。

信じられない事態だ。

その年の夏、特派員としてモスクワに赴任して以来、クレムリンの執務室、同大宮殿での外国元首歓迎レセプションなどで、短時日のうちに何度かフルシチョフを間近に見、彼の陽気なおしゃべりを聞く機会に恵まれた。

当時はソ連と米国が東西両陣営を率いる超大国として世界に君臨していた。西側のケネディ米大統領（前年暗殺されたが）、東側のフルシチョフソ連第一書記。国際政治は、この二人を軸に動いていた。

私が見たフルシチョフは、いつも自信満々、みるからに健康そうで精力的に国の内外を飛び歩いていた。彼の周囲にはたいていソ連政権の最高幹部達、ブレジネフ（フルシチョフ失脚後書記長）、コスイギン（同首相）らがひと固まりの集団になって追従笑いを浮かべながら従っていた。彼は完全に権力を掌握し、党内にゆるぎない地位を築きあげているように見えた。

それが失脚とは――。だが事実だった。それまで連日のようにマスコミに登場していたフルシチョフの名が新聞からピタリと消え、テレビ、ラジオにも登場しなくなった。

そして十六日午前零時、ソ連政府は突如としてフルシチョフが「高齢と健康」を理由に辞任したと発表した。だが、実際はブレジネフら、いわゆるフルシチョフ子飼いの連中がクーデターを仕組み彼を解任したのである。

以後フルシチョフは六年後に死ぬまでソ連のマスコミでは完全に抹殺されたままだった。スターリン時代なら殺されていたはずだが、生きていられただけ、まだましだったのかもしれない。

ジャーナリストとしてこの道一筋に生きてきた私は、幸いにも内外でさまざまな歴史的ニュースの現場に居合わすことができた。なかでも、このフルシチョフ失脚劇は、私にとって共産党独裁政権内部の非情ですさまじい権力闘争の実態をまざまざと見ることのできた貴重な体験であった。



清宮　龍　昭和3年7月28日生　東京都出身・東京都在住
▽昭和25年東京教育大卒▽時事通信社で首相官邸キャップ、モスクワ特派員、海外部長、整理部長等歴任
▽昭和49年から政治評論家、60年内外ニュース社長
〈好きな言葉〉「信頼」「誠実」

台風広報中九死に一生

空閑耕祐

秋風が立ちはじめる九月は台風シーズンである。電力会社にとっては、日々の天気図に神経を尖らし、大変緊張する時期である。

私の今日までの人生において「忘れられないこと」の一つは、この台風にまつわる体験である。

昭和三十四年、新入社員の私は九州電力佐賀営業所に配属され、電気故障の受付など窓口業務を担当していた。会社生活にもだいぶ慣れた九月初め、台風襲来が予想され、事前対策として電気安全のＰＲに出かけることになった。「切れた電線や垂れさがった電線には触らないように」などとマイクで呼びかけ、周知する業務であった。

当時は、ＰＲ周知専用の車などなかったので、ダットサン型の車にアンプを積み込み、運転は電気工事店主に協力をお願いして、先輩と三人で出発した。一つの村落が済むと、農道を突っ走って次の村へと向かうのであるが、時節がら稲穂がたわわに稔り、頭を深く垂れて農道に倒れかかった所も多かった。日も暮れかかり、最後の村に向かう途中で、右側は稲穂、左側にはクリークがある道巾の狭い所にさしかかった。昨日からの雨でクリークは増水し、農道と水面は僅かに十センチ程度の差しかなかったように思う。

「アッ」と思った瞬間、クリーク側の路肩が崩れ、車はズブズブーとクリークに進入してしまっ

た。その頃は、カークーラーなどなく、両側のドアのガラス窓は開けたままだったので、浸水も早くまたたく間に約二・五米の底に沈んでしまった。濁った水の中なので、視界はほとんどゼロ、車がどんな向きに沈んでいるのか全くわからない。とにかく、ドアの窓から出なければ助からない……。と右手の方に何か動くものが感じられた。無意識のうちに身体は右ドアの窓から這い出し、やっとの思いで水面に顔を出すことができた。

しかし、左側に乗っていた先輩がいない。運転者と私は再び水中に潜ろうとしたそのとき、泥まみれの先輩の顔がポッカリ現れた。私達三人はお互いの無事を確認し合いながら農道に這い上がった。

水面に浮かんだ靴と「いこい」（タバコ）の箱が今でも鮮明に脳裏に焼き付いている。とともに肩のかすり傷を丁寧に治療してくれた電気工事店の若い女事務員のあの白い指も忘れることはできない。三十六年前のほんの数分間の体験であるが、秋口になれば必ず思い出す出来事である。



空閑　耕祐　昭和11年2月27日生　福岡県甘木市出身・福岡市在住
▽昭和34年九州大学法学部卒、九州電力㈱入社、小倉営業所長、佐賀支店長
▽平成6年7月㈱菱熱出向、専務取締役工事事業部長、7年12月代表取締役就任
〈好きな言葉〉「誠実」「和」

自由の悟り体験

工藤憲男

五十年前の敗戦の時、「精神の国」の日本が「物質の国」の米国に負けたことが衝撃だった。日本は精神の国だから物質主義の米国に負けるはずがないと、つねづね教わって育っていたからだ。旧制高校の理科系の二年生であったから、外の世界が物の論理で組み立てられているが、心の世界は別だと考えていた。心ときめく恋愛感情を、目から入る電磁波による大脳の興奮と思えなかったからだ。

敗戦という現実に直面すると、なまじ理科系の素養があったから、精神が物質より優位であるという考えが間違っていることを認めざるを得ない。さりとて物質が精神より優位であることは認めたくなかった。悲しいほどに愛している恋人を思う心が、電磁波の動きに還元されてしまうことに耐えられなかったからだ。

わたしの学んだ旧制高校のスローガンは「自由」であった。東京の第一高等学校が政権のおひざ元にふさわしく「自治」を標榜しているのに対して、京都の第三高等学校は文化をよりどころにしていた。第二の人格が形成される思春期を京都で過ごせば、自由に生きることを理想とするようになる。心まで物の論理で動くとなれば、自由とは空疎な観念論になってしまう。だから、必死になって人間の自由について考えようとした。

あとで思えば、「唯物論と唯心論」「自由論と必然論」「認識論における心身論」という哲学の三大難問に、二十歳前の若さで挑戦したのだ。文化系であれば挑戦する勇気がなかっただろうが、素人の恐ろしさで、無鉄砲にも哲学の革命に挑んだのである。

東西の本を読みあさり、四六時中考える毎日が続いた。おしまいには寝床に入って目をつぶると、瞼の裏にいろんな言葉がキラキラと光る文字となって飛び交うようになった。「気が違うのか。いや、そんなことを思うと、気違いになるから考えるな」と自分に言い聞かせたりした。

ある日、「どうして物が卑しいといえるのか」と考えた。物と心を同等に考えるべきだと気付いた。「目が目を直接見ることができない」という事実にも気がついた。すると、もつれにもつれた糸が一挙に解かれてしまった。釈尊の「自分の意志に従って生きよ」という教えを悟り、道徳や知識から自由になった歓びで、まさに「手が舞い足が踊る」という思いを味わったのである。



工藤　憲男　大正15年9月21日生　香川県白鳥町出身・北九州在住
▽昭和25年京都大学理学部卒、川岸工業㈱入社、32年専務就任
▽昭和42年川岸興産㈱に移籍し専務就任、経営士事務所開設▽49年北九州経済研究所所長就任、現在川岸興産㈱会長
〈好きな言葉〉「自由」

王家崗（わんじやかん）

國ノ十善彌

昭和六十二年十一月のある日、中国の東北部吉林市の東関賓館に落ちつく。翌早朝松花江の河畔にたゝずむ。身を切るような寒さの中、河畔には大極拳を演ずる老人の姿が見える。巾三百米もあろうか、松花江はゆったりと悠久の流れをみせてくれる。川からの蒸気と暖房のため燃やす石炭の煙で視界は極端に悪い。川の面をボンヤリ眺める。私はこの川の流域で四十数年前繰り広げられた光景へと引き込まれていった。

吉林市に近い蛟河という小さな町で私達一家は終戦を迎えた。住民と八路軍に追われるようにして広々とした豊満ダム湖（現在は松花湖というらしい）を渡って王家崗という田舎の部落に落ちのびる。母と弟、そしてまだ二歳の妹であった。部落はその一辺が数百米もあろうかと思われる土塁で囲まれ、まるで中世の城下町のようであった。数百人の現地の人が住んでいた。日本人の一行はこの地で数ヶ月をすごした。この間に日本軍の敗残兵の訪問を受けてなつかしく思ったりもしたものである。一方ではこれを追求する八路軍の兵士による苛酷な略奪も受けた。

二歳の妹は厳寒の中、真中に土間をおき両側にアンペラを敷いたオンドルの部屋で母に抱かれて静かな生活をおくっていた。痩せて細くなった指で力なく豆腐をつまんでは食べる様子が思い出される。子供らしい活発な動きの記憶はない。

そして死。家族では初めての死。しかも最も年少のたった一人の妹であった。現地の人々に助けられ、土塁の外の広い畑のすみに小さな木の墓標と共に葬られる。ソ連国境から長途逃げ帰った父は、この木の墓標に手をそえて涙を流した。父が泣いたのは初めてであった。

小さな妹は四十数年たった今も一人あの玉家崗に眠っている。

十一月とて雪が降った。吉林市から玉家崗への道は遠く相当に悪路らしい。その上まだ解放されていない土地だという。車で一日程の行程だというがあきらめる。河原に下りて日本から持って行った蠟燭と線香を焚く。遠く日本からはなれているためか、さびしさが涙となって流れる。河原の土を一にぎりビニール袋につめる。一家の墓に入れてあげよう——。

松花江の水はただゆったり流れていた。



國ノ十善彌　昭和10年1月15日生　鹿児島県大口市出身・大阪府豊中市在住

▽昭和33年3月熊本大学工学部電気工学科卒、㈱日立製作所入社、同習志野工場工場長を経て

▽昭和63年日立西商品エンジニアリング㈱に転属常務取締役に就任▽平成2年日立西商品エンジニアリング㈱代表取締役に就任▽㈱日立西サービスエンジニアリングに社名変更、現在に至る

〈好きな言葉〉「光風　霽月」

雑草の如く強く生きよ

古浦誠一

昭和二十年八月七日、中学三年生の私は母と二人で下関駅から彦島の田の首まで、真夏の太陽の下を黙ってひたすら歩いた。行先は「山第四五〇三工場」である。正式の名は東亜坩堝(るつぼ)株式会社といって金属を熔かす坩堝を作る工場だが、軍事機密から当時はこの様に番号で呼ばれていた。私達下関商業の生徒五十人の学徒動員先である。

坩堝は黒鉛と粘土を混ぜて作るから一日働くと帰りには文字通り真っ黒になる。そして夜は空襲になると、近くの小学校に駆け付けて警備につく。

そういう生活を一年以上も続けているうちに到頭七月二日の空襲で我が家も焼けてしまった。全く着の身着のまま、母と弟の三人で豊浦郡の内日村に避難した。焼跡の片付けや緊急生活の工面などで、瞬く間に一ヶ月が過ぎた。一段落すると、動員の任務遂行が頻(しき)りに気になる。我々、勤労学徒の働きが戦争の勝敗に影響すると思うと矢も楯も堪らない。だけど内日の山奥から通勤はできない。ならば下宿を捜してそこから通勤しよう、と思い立ち、この日朝早くから母と二人で出てきたのである。

工場に着いて監督の教官に会った。教官は急な戦局不安に痛く憔悴の様子である。

「昨日、広島に未曾有の新型爆弾が落ちた。詳しい情報は判らぬが彦島も危険である。下宿などしなくてよい。暫く内日で待っていなさい」

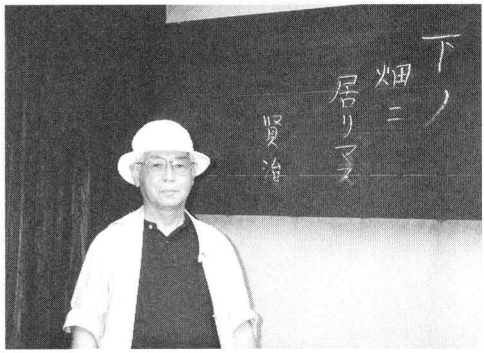
始めて聞いた原爆の報らせに、気も漫ろの帰途であった。途中の雑木林に、米軍が空中撒布した電波妨害の銀紙テープが無気味に光っていた。

八月十五日、天皇陛下の玉音放送は内日村で聴いた。雑音でよく聴き取れない。信じられぬ思いと、拠り所を失った空しさで思考は止まったままである。

九月になって授業が再開された。その日、全校生徒が講堂に集まった時の訓話が忘れられない。「我々は戦争に敗けた。日本という国は亡くなっても、大和民族は永遠に、強く正しく生きねばならない。これからの苦難のなか、如何に踏み躙られようとも、君達は雑草の如く強く生きよ」

話される校長の目に光るものがある。生徒も皆寂として声なく唯々頭を垂れ涙をのんでいた。

あれから五十年、今、日本は世界で有数の経済大国になった。バブルが弾けたとは言へ暖衣飽食の現在、敗戦の日のあの頃の思いを決して忘れてはならないと思っている。



宮沢賢治の故里花巻市の羅須地人協会で（H7年）

古浦　誠一　昭和5年7月14日生　山口県下関市出身・福岡市在住
▽昭和24年市立下関商業学校卒、石油販売会社勤務を経て27年丸食グループ入社▽現在㈱北九州丸食代表取締役
〈好きな言葉〉「まづ臨終のことを習うて、後に他事を習うべし」（日蓮）

一枚の寄せ書き

小柳陽太郎

いま私の手もとに二十首ほどの歌が記された一枚の寄せ書きがある。それは戦局いよいよ急を加えた昭和十八年十一月、学徒出陣を前に、最後の思い出の旅をつゞけた十一名の友人が霧島の硫黄谷温泉の霧島館に宿をとったその夜に認めたものである。

その中で先輩の寺尾博之氏は「再びは来る日もあらじきりしまのいでゆに遊びし夜忘れめや」と詠んでいるが、再び会うすべもない別離のかなしみが互いの胸にうづまいていた。だが、そのかなしみは決して単なる別離の感傷ではなかった。旧制高校以来机をならべた友人、高瀬伸一君が「わがどちの（私の友達の）つどひははかなししかれども日本はほろびずとこしへまでも」と詠んでいるように、当時の私たちの胸には神洲の不滅を信じ、信じればこそ祖国の危急に際してこの身を捧げて祖国永久の生命に帰一してゆくという国民的な緊張感がいたい程にはりつめていた。その魂の昂揚の中での別離のかなしみであった。

十一月といえば霧島のもみじも一きわ美しく、酒宴たけなわのころ、一人々々が山道で手折ってきた色さまざまのもみじの枝をかざし、座敷をめぐりながら声高らかに歌をうたい、或は踊り出す友もいて、かけがえのない青春の一夜をすごしたあの夜のことが、いま鮮烈によみがえってくる。それは単にその日がなつかしいというだけではない。出陣を前にした若者が、それぞれに与えられ

た短い人生を、精根こめて生きてゆく時にしか味わうことのできない感動がそこにはあった。あの時代ならではという青春のあかしがこの一枚の寄せ書きに刻印されている。

その日から僅か二年、終戦の直前に呉軍港を襲った大空襲のさ中、海軍少尉高瀬伸一君は戦艦伊勢の艦上に機銃指揮官として戦死、終戦直後の八月二十日、同じく海軍少尉寺尾博之氏は、敗戦の責を一身に背負って福岡市南部油山の中腹で自らの命を絶った。

現代の若者にとって、祖国のために命を捧げるなどということは全く理解を超えた世界だろう。だがあの時代の真実は決してそうではなかった。その真実を今の世に蘇らしめ、それを若い人の心につなぐためにはどうすればいいのか。この一枚の寄せ書きを目にするたびに常に心をよぎるのはこのやみがたいおもいとともに、戦後五十年、遠くすぎ去った時のかなたに、変わることなく輝いている若き日の友の姿である。



小柳　陽太郎　大正12年9月23日生　佐賀市出身・福岡市在住
▽昭和24年旧制九州大学文学部国文学科卒、福岡県立修猷館高等学校教諭、その後九州造形短期大学教授
▽著書『戦後教育の中で』『歴代天皇の御歌』（共著）
〈好きな言葉〉「仁豈不仁に勝たざらんや、若し勝たざれば仁に非ず」（吉田松陰）

桜島よ、燃えているか

近藤　貢

同窓会までにはまだかなりの時間があるので、会場のホテルまで歩いて行くことにした。ゆっくり照国神社横から山路に入る。舗装になれた足には、石ころ道はなかなかにほねの折れるものである。かれこれ三十分、やっと展望所につく。こゝしばらくは降灰もさ程ないらしく、今日の桜島はくっきりと錦江湾にいすわって見える。

長田町の学舎から下宿へと南洲ゆかりの小路をたどりながら、むせるような南国の香りをあびてはじめて深い喜びにひたったのも、すでに五十年も昔のことになってしまった。学徒動員で昭和十九年の九月には佐世保の海軍工廠へ。二十年の四月には海軍の特攻基地を作るとかで、桜島に派遣されて袴腰で働いていた。現役入隊の電報を受け取ったのは六月九日の昼すぎ。一週間も前に打った電報で入隊の日が十日とわかるだけで、どこの部隊に行けばよいのかさっぱり分からない。袴腰の最終の連絡船が荷物をまとめに帰る間、待ってくれることになった。西桜島の人々や友人達の見送りを受けて連絡船は桟橋をはなれて行く。船長さんの横に坐らせてもらったが、何を聞かれ、何を話したのかは思い出せない。はげしく降り出した雨の中を鹿児島連隊区司令部に。

「お前は熊本の西部第六十一部隊、六月十日午後一時入隊である」と言われる。家に帰る時間もなく、勿論、両親とも会えない。

何となく久しくご無沙汰の下宿を尋ねる。幸いにおばさんも娘さんも在宅であった。佐世保に行って以来とんと失礼を重ねていたのに喜んで迎えてくれたのが大変嬉しかった。暖かいご飯を、そして餞別まで。

「もういいから」と言うのに「送って行く」と、一緒に駅までただだまって歩いた。独りホームで送ってくれる彼女に「ありがとう」位は言ったのかどうか。遠いまぼろしの如き想い出である。

彼女の姿が次第に小さくなるにつれて、涙の出るような物悲しさと、兵隊にいく恐怖感におそわれたことを覚えている。

時計を見ると、はや五時十分である。間もなく会がはじまる。両手を高くあげて深呼吸する。「桜島をのめ！」と、おしえてくれた西郷どんに似たあのガイドのおじさんも今は亡い。往年とちがって、連絡船の往き来もしげく、いくつもの航跡が袴腰の港に吸い込まれて行く。

桜島よ、燃えているか。



近藤　貢　大正15年2月6日生　北九州市出身・北九州市在住
▽昭和22年鹿児島経済専門学校卒、九州女子学園教諭
▽昭和43年同校長、53年理事長、現在に至る

五十年前の私

後藤豊彦

昭和十六年十二月八日、真珠湾攻撃を契機に太平洋戦争が勃発し、年を追い戦いは熾烈を極めた。十八年、大学生の学徒出陣が始まり、秋には学徒・女子挺身勤労令が施行され、中学二年生以上の学徒は男女を問わず、学舎から軍需工場へと一斉に動員された。私のクラスも九州兵器㈱へ派遣され、真珠湾攻撃で名を馳せた特殊潜航艇の魚雷発射管の製造に従事した。一方、十七年四月の米軍機による東京初空襲を皮切りに日本各地の都市爆撃が続く中で、不幸にも二十年六月十九日、福岡市はB29による猛爆撃を受け、街の殆どが焼土と化した。

しかし、神州不滅、必勝の信念に燃える私達は常に学徒動員の歌を口ずさみ日夜勤務に精励した。

㈠ 花もつぼみの若桜
五尺の命ひっさげて
国の大事に殉ずるは
我等学徒の面目ぞ
あゝ紅の血は燃ゆる

㈡ 後につづけと兄の声
今こそ筆を投げうちて
勝利ゆるがぬ生産に
勇み立ちたる強者ぞ
あゝ紅の血は燃ゆる

二十年八月十五日、炎天下の正午、軍需工場の一角で、天皇陛下の終戦の詔勅を聞き、ただ茫然として我が家へ引き揚げた。そして悪夢の様な戦争は終った。当時私は十六歳の中学四年生であった。

翌日から懐かしい学舎へ戻ったが、蛻（もぬけ）の殻のはずの校舎は兵舎に変わり、軍隊が駐屯していた。旬日を経ずして平常を取り戻し、久し振りに授業が再開された。学生として学舎で机に向かい勉学できる喜びをひしひしと嚙みしめたものである。そこにはチョークや黒板の匂いもあり、グラウンドでのスポーツを含め、水を得た魚の様に喜々として残り少ない学生生活をエンジョイした。

一方、終戦後の世相は一変し、軍国主義への反省、天皇の人間宣言、極東軍事裁判の開始、財閥の解体等、新聞、ラジオではあるが、敗戦日本の変化を刻々と報じていた。米軍海兵隊の進駐により博多の街もその様相を一変し、あらためて日本の敗戦の厳しさを実感したのもこの頃であった。

あれから五十年。今日の日本の繁栄を見る時、私は多感な思春期を勤労動員で過し、当時の苛酷な体験をアルバムに仕舞い込んでいるが、それでも私は、生涯を通じ最も意義ある青春時代であったことを自負している。



後藤　豊彦　昭和4年2月14日生　福岡市出身・福岡市在住
▽昭和25年旧制大分経専（現大分大学経済学部）卒、福岡銀行入行、55年取締役就任、常務取締役、専務取締役、取締役副頭取を経て
▽平成5年同代表取締役会長に就任、現在に至る
〈好きな言葉〉「限りなきものと知りつゝ限りなきものを求めて」

大正ロマン

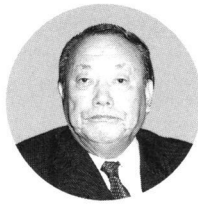
下村　史

人生斜陽に立つと無性に昔を懐かしく想う。特に少年時代はたまらない。人間のもつ回帰性の所以だろうか。私のロータリークラブではロータリーソングのほかに季節にふさわしい「小学校唱歌」「童謡」を唄うときがある。直近の例会でも当夜が仲秋の名月だったので「十五夜お月さん」を情緒たっぷりと唄った。この歌は野口雨情作詞・本居長世作曲で大正九年、一九二〇年少年雑誌『金の船』誌上で発表されたものである。もう七十五年前の歌が今日なお伝承されていることは驚く可きことであるが、大正生れの私はそれを当然と思うのである。何となれば明治と大正の年代の差異を挙げるならば、明治は勇武、いわば硬派であり、大正は文華、いわば軟派と謂えよう。戦争も世界第一次大戦への参戦、関東大震災の大きな災害も受けたとはいえ、国力増強、経済安定により文華指向は必然だった。児童文学のジャンルに於いても鈴木三重吉の『赤い鳥』が大正七年に創刊されて、わらべ唄から童謡へと新局面が開かれた。この運動に協力し支持したのは、北原白秋、野口雨情、西條八十等後世に名を残す錚々たる人々であった。従ってこの人たちの童謡は子守唄であった。

小学校の音楽学習は更にドライヴがかゝった。私は学芸会で当時のまだ珍しかった母が新調してくれた洋服を着て「からす　なぜ鳴くの」と、声一杯歌った。「からたちの花」も藤原義江風に歌

って好評だった。藤原義江が私の町へ来たとき現今のディナーショウのようなものが行われた。私はまだ五歳の幼児であったが、父につれられて陪席した。歌い終わったのち彼は私のところに寄ってきて「可愛い坊ちゃん」と頭を撫でた。見上げた私の眼と眼が合った。大正九年・一九二〇年、彼は当時まだ無名ではあったが、嘱目されてヨーロッパ留学の途中であった。現在、下関市阿弥陀寺町に藤原義江記念館「紅葉館」がある。福岡と下関、まだ縁があるのかも知れない。

私の家の近くにいた女の子も歌が上手であった。初めて学芸会できいたのは「人形」であった。「私の人形はよい人形　目はパッチリと色白で小さい口許愛らしい　私の人形はよい人形」と唄った。私はその子がその人形そっくりと思った。アメリカから人形が日本に贈られてきたとき、また「青い目をしたお人形はアメリカ生まれのセルロイド」と少しませた声で歌った。それから間もなくジャガタラのスラバヤに転校していった。待っていた「じゃがたら文」は来なかった。



下村　史　大正4年2月9日生　鹿児島県西之表市出身・福岡市在住
▽昭和13年九州帝国大学法文学部法律学科卒、14年同経済学科卒、㈱十七銀行入行（20年3月福岡銀行となる）
▽昭和35年福岡銀行取締役・小倉支店長、40年常務取締役に就任、46年専務取締役に就任
▽昭和49年退任、福岡証券取引所理事長、現在に至る
〈好きな言葉〉「常坐春風」

日銀那覇支店の開設

鈴木三郎

かつて日本銀行考査局で金融機関考査の仕事をしていた昭和四十六年四月のことである。小尾局長（前大分銀行頭取）の秘書から「局長から鈴木君を呼ぶようにと言われたが、どうもあなたのことのようなので、すぐ局長室に来て下さい」との連絡があった。当時考査局には鈴木昭徳考査役（故人、元北九州支店長）、鈴木淑夫考査第一係長（現野村総研理事長）と私の三人の鈴木がいたからである。秘書の推測は当たっていて、一年後の沖縄の本土復帰と同時に、日銀は現地に支店を開設するとの説明とともに、那覇支店開設準備室主査（開設後営業課長）の内示をうけた。また、必ず家族を同伴するようにとの指示があった。

当時、沖縄は米国の統治下にあって、一般の日本人の沖縄に関する知識は乏しく、沖縄の人は日常英語を話しているのですか、と質問されることも再三であり、これは大変なことになったというのが偽わらざる心境であった。

那覇支店の任務は沖縄の本土復帰を境として、沖縄経済のドル経済から円経済への移行、そしてまた、地元金融機関の米国の金融制度から日本の金融制度への移行の円滑化を現地の第一線で担当することにあった。とくに印象深いこととしては①復帰時の円ドル通貨交換レートが沖縄県民への配慮から実勢を上回るのではとの観測が流れ、復帰直前に差益を狙った投機資金の流入が懸念され

たが、実際には格別の動きはなかったこと　②復帰当日から一週間と定められた通貨交換期間中にドルと円の交換が順調に進み、速やかに日常の取引がドル決済から円決済に変わっていくかが注目されたが、後半になって急速に交換が進捗し安堵したこと　③日本本土との輸出入取引は復帰後外国為替から内国為替に変わり、信用状手数料がなくなるため地元金融機関の収益への影響が心配されたが、財政資金や民間企業の資金流入による著しい預金の増加で十分カバーされたこと――があげられる。

　このようにして復帰時における日銀那覇支店の業務はまずは順調に行われたが、これは一年間にわたって周到に準備を進めたこと、そしてこの間、地元金融機関との間に相互信頼関係が築かれ、また支店のなかでは新木支店長（故人、前福岡銀行頭取）を中心に五十数名の職員がいわば同じ釜の飯を食った仲間として気合いを揃えて頑張ったことによるものである。個人的にもまたとない得難い体験が出来たことを幸せに思っている。



鈴木　三郎　昭和9年8月11日生　東京都出身・北九州市在住
▽昭和34年東京大学経済学部経済学科卒業、日本銀行入行、61年4月退職
▽昭和61年5月北九州八幡信用金庫理事長就任
▽財団法人北九州国際交流協会理事長、社団法人八幡法人会会長
〈好きな言葉〉「着眼大局　着手小局」

心の原点、青春の日の結核療養

関原敬次郎

もう五十年余りも前になるだろうか。私は当時「国民病」といわれていた結核に罹(かか)ってしまった。その頃、私は久留米市で医学を学んでいた。戦時下で、栄養不足をきたす程の乏しい食糧事情の上にラグビーで鍛われる毎日ですっかり心と身体のバランスを崩し、遂に三年間休学する羽目になったのである。当時は結核に罹れば、凡そ九〇%から九五%は確実に死亡するといわれた時代である。

何しろストレプトマイシン、パス、ヒドラといった結核治療剤もなかった時代なので、治療法としてはただ「大気安静療法」のみであった。つまり新鮮な空気を吸い、消費カロリーのロスを安静によってコントロールするというまことに気の遠くなるような原始療法である。

それで、そんな「大気安静療法」などやってられるかと、全く逆療法に走る者もあり、そうした無茶な生活で、春秋に富んだ優秀な人材が死亡していったことを知るだけに、厳しい科学的なルールの下で、管理治療を受けることができた幸運を強く思わずにはいられない。

「福岡市今津日赤療養所」がその管理病院で、現在、福岡ドームのある百道浜から西へそう遠くない漁村に建てられ、壇一雄が晩年を過ごすことになる能古島を眼前に望む静かな海浜だった。病院では「沈黙の日」という治療法もあり、決められた日は病院内では一切しゃべることは許されず、

医師も看護婦も、私達患者も二十四時間沈黙の一日、用があれば筆談であった。

戦争の厳しさは容赦なく病院にも及んだ。海軍病院として接収されたのである。私は熊本県松橋町にある豊福園という療養所に転院させられた。その頃になると、私でさえ敗戦を予感せざるを得ない毎日だった。病院を兵舎と間違えるのか、グラマン機が操縦士の顔が見える程の超低空で襲ってくるのである。

やがて戦争は終わった。あれから五十年。「福岡市今津日赤療養所」での闘病生活は、私にあらゆる面で大きい影響を残しているようである。結核治療に約十年間を要したが、いまの私にとって、懐かしい「心の原点」ともいえる青春の日々であった。



関原　敬次郎　大正13年2月7日生　熊本県山鹿市出身・北九州市在住
▽昭和34年門司区原町別院で整形外科開業▽門司区医師会会長を経て現北九州市医師会会長
〈好きな言葉〉「知的好奇心」

鉄拳に教わった人間性

高松　工

昭和十八年。私は専門学校を卒業すると、当時の青年達がそうであったように海軍予備学生の道を選び、翌年五月予備少尉に任官、大湊海軍航空隊に赴任した。航空隊司令は浦大佐で、予備学生時代に教官として指導を仰いだ人だった。着任報告を終えると、司令は「オウ、来たか。貴様を戦闘指揮官として鍛えるために俺が呼んだんだ」と言ったが、その言葉通り一人前の士官になるために随分としごかれることになった。私は整備参謀付、第二飛行士（整備士官）に任命された。

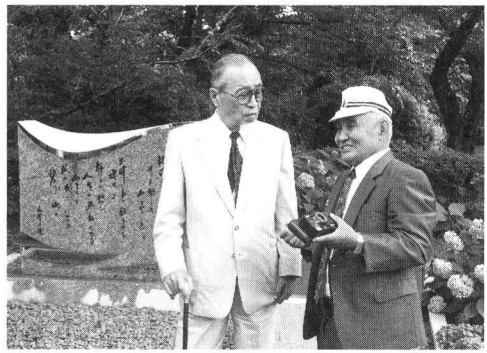
ところで、戦争の旗色があやしくなると、考えられないような妙なことも起こる。どう間違って海軍に入ったのか、極端に頭の弱いKという水兵が召集兵として配属されてきた。どうしても一人前になれない彼に与えられた任務は薪割りだった。召集兵達が入隊して三ヵ月位経った頃、新兵に上陸（外出のこと）を許可することになり、先任下士官にそのことを命令、「Kは誰か面倒みてやれ」と指示した。ところがこれが大失敗だった。誰に面倒みさせろ、と具体的に人選して命令すべきだったのだ。仲間の誰も彼に付き合わず、Kは上陸したまま帰隊しなかったのである。脱走？青くなって報告する私に司令は「捜索しろ」とだけ命じた。早速下士官五名を連れ三日間探したがどうしても見つからない。意を決して司令に「憲兵隊にゆだねたい」と具申した。途端に「バカ者!!」と往復の鉄拳を喰らった。「貴様!!Kが帰隊してもなんの役にもたたんと思っとるだろう。

草の根をわけても捜し出せ!!」と怒鳴られた。

私は二十人の隊を編成して必死に捜索、遂に或る港町でKを発見した。司令に報告すると「そうか。ご苦労、処分は追って達する」と言った。

しかし、その後本件に関する処分は出なかった。司令はこう言った。「Kにどんな処分をしても仕方ないだろう。それより、もし他の隊に放り出してみろ。奴がどんなに苦労することか」と。豪放な司令の心にかくされたキメ細かな優しさをその時始めて知った。同時に自らの心に、司令に指摘されたような思いがあったのではと大きく反省させられたのだった。

「弱者の立場に立つ」鉄拳は頬の痛さでなく、人を思いやる人間性の大切さを教えてくれたのである。



平成6年、森繁久弥さんと回天記念館碑前で

高松　工　大正11年5月17日生　山口県徳山市出身・徳山市在住
▽昭和18年横浜専門学校電気工学科卒、海軍技術研究所、館山海軍砲術学校（兵科三期）、追浜海軍航空隊（飛行機整備八期）、九〇三空、六三四空、海軍中尉で終戦
▽昭和43年より徳山市立回天記念館館長
〈好きな言葉〉「他人（ひと）にだまされても他人（ひと）をだますな」

戦後の柔道

竹村茂昭

身内のことをお話して恐縮ですが、私共竹村三兄弟の長兄竹村茂孝は大正五年第一回の九州学生（当時の中学生）柔道大会（今の金鷲旗大会の前身）に修猷館の選手として出場し優勝して以来、大の柔道熱心家でありました。

熊本の五高、京大を出て所謂アマチュアでありながら専門家ともよく交流し、本業そっちのけで柔道のお世話に明け暮れておりました。

昭和二十二年の二月、満州（中国の東北地区）の大連から引き揚げるや、福岡在住の次兄岩崎茂成（岩崎に養子に行きました）の助けもありましたが、直ちに福岡県柔道協会を結成、西日本柔道選手権大会を福岡の大博劇場で開きました。次いで二十三年一月、九州柔道協会を設立し、全関西と全九州の対抗戦を福岡の浜新地の丸太組みの野天の仮設道場で開くことにしましたが、当日は生憎（あいにく）の雨。この機に全国から集まられた先生方を次兄茂成の経営する岩崎組の会議室に参集願い、有段者会だ、武徳会だと言う従来の経緯を一擲して、戦後の柔道界は大同団結を計るべきだとの結論を得、後の全日本柔道連盟の基礎を築くことになりました。

同年十月、福岡で開催された国体に占領軍の諒解を取り付け、オープン競技ながら柔道の参加を認めさせ、この時初めて太宰府の会場に日の丸の旗が翻り「君ヶ代」が流れたことは私共にとって

最大の感激でありました。

昭和四十四年一月上京、講道舘の審議会に出席した後心筋硬塞で宿舎にて急死しました。その後を次兄岩崎茂成が継ぎましたが、平成元年春、身体の不調を訴えましたので、末弟の私がその後を引き受け今日に至っております。

昭和四十二年に茂孝が始めた「全日本体重別大会」、五十八年に茂成が肝入りした「福岡国際女子柔道」、それと大正五年以来続いている高校生の「金鷲旗大会」、この三つが福岡に於ける大きなイベントとして今日に及んでおります。

もともと九州は柔道王国と言われ、嘗ては二宮和弘、園田勇といったオリンピックの優勝者が出ましたが、其の後はやや停滞気味。最近は軽量の田村亮子、重量級の阿武教子（あんのりこ）、中村三兄弟等が出てユニバーシアードなどで活躍しており、今後更に青少年の奮起を促したいと考えております。



竹村　茂昭　明治42年10月17日生　福岡市出身・福岡市在住

▽昭和7年東大法学部卒業後直ちに渡満、旧満洲国政府に入り、熱河省凌源、興安西省林西、北支、天津、北京と歩き昭和18年蒙古人の共感を得ようと興安総省を造り上げたが終戦、帰国後は実兄岩崎の経営する岩崎建設㈱に入社、現在は代表取締役会長、九州及び福岡県柔道協会会長

二つの賞

谷　伍平

市長という仕事をながく仰せつかっていますと、辛いこと、苦しいことを山ほど体験しますが、それらは己の人間修業に役立ったものとして胸に納め、ここでは市民全体にとってよい思い出となる出来事を記させていただきます。

第一は「緑の都市賞」（総理大臣賞）を受けたことです。

この賞は、昭和五十六年に財団法人「都市緑化基金」が創設したもので、北九州市も早速名乗りをあげましたが、第一回は神戸市が受賞しました。当時市民一人当たりの都市公園の面積は、わが市が六平米で、神戸は十平米を超えていました。翌年も申請して、見事第二回の総理大臣賞を獲得しました。決定の知らせがあったときは、為我井公園緑地部長と手をとりあって喜んだものです。

市は公害対策と並行して、四十七年度を初年度とする「グリーン北九州プラン」という長期緑化計画をたて、公園の増設・市街地の緑化・自然の保護に力を入れ、緑ゆたかな産業都市の実現をめざしておりました。その努力と実績が認められたわけです。

昨年一月の神戸大震災で、市街地の公園が延焼防止に大きな効用を果たしました。わが街も、一層近隣公園、地区公園の増設に努めねばなりません。

第二は、日本建築学会創立百周年記念の「文化賞」を受けたことです。

明治十九年に辰野金吾博士らが集まってつくった日本建築学会は、昭和六十一年に百周年を迎えました（その時の会長は、芦原義信東大名誉教授）。学会は、記念事業のひとつとして「会員外で、広く建築文化の向上に貢献した者」に「文化賞」を授与することになり、不肖私が他の二人の自治体首長（静岡県知事、福島県三春町長）とともに、帝国ホテルで皇太子殿下ご臨席のもとに彰状を頂戴しました。百年に一度の栄誉でありました。

表彰理由は「文化の香る緑ゆたかな産業貿易都市へ向けて、公共建築物の建設誘致、都市機能の充実を精力的に展開、市営住宅建設に際しては、久岐の浜ニュータウンの公開設計競技を実施し、歴史的建築物の保存にも努力するなど、二十年間にわたり建築文化の発展に寄与した」という懇切なものでした。もとより、この破格の栄誉は、百万市民の支持があって、はじめてかち得たもので、市民は今後もますます美しいまちづくりに邁進していただきたいと望んでやみません。



谷　伍平　大正5年10月1日生　福岡県直方市出身・北九州市在住
▽昭和14年東京大学法学部卒、鉄道省入職、40年日本国有鉄道常務理事、東海道新幹線支社長
▽昭和42年北九州市長、62年退任▽現在、北九州市立美術館長
▽著書『丘の上の双眼鏡』
〈好きな言葉〉「毎日が初日」

財産となった猛練習

玉井信一

この原稿を書いている八月の中旬、甲子園では連日高校野球児の熱戦が展開されている。休日にはゴルフを欠かさない私も、この期間の休日だけは自宅のテレビの前で終日球児たちの熱戦を観戦することにしている。そしてテレビの画面に躍動する選手の一投一打に拍手を送りながら、出場を果たすまでに彼らが耐えてきた猛練習に思いをはせ、つい涙ぐんでしまうのである。というのも、実は私も高校時代は野球部の選手で、投手で四番を打った球歴の持ち主だったからである。

私の母校は北九州の地方都市にある県立高校で、この田舎高校と甲子園出場高校との練習は比較すべくもないと思うものゝ、当時を思い返してみると、部員二十名足らずの弱体チームにもかゝわらず、練習だけは猛烈を極めたものである。「どうせ勝てないとしても人並み以上に猛練習をし、それによって何かを会得して将来の糧にしよう」というのが監督の指導方針であったからである。

終戦後五年も経っていない当時であったから、用具の粗末さはもとより、グラウンドの状態も最悪で、イレギュラーしたボールで唇を切り、鼻血を出すことも度々であった。

しかしアメ、アラレと襲ってくるノックに耐えているうちに疲労で意識が朦朧となり、その頃から難ゴロが自然とグラブに収まるようになってくるから不思議なものである。そのうえ九州の夏の暑さは猛烈で、練習中の水飲みを禁じられていた渇きの苦しさは、今でも忘れることが出来ない。

こんな勝つ望みのない弱い高校時代の猛練習が、その後の自分に大きな財産を与えてくれていたとは、その当時は考えもしなかったことである。

大学を卒業して社会人となってからは、難事にあたる度に、「あの猛練習に耐えたのは何のためか？」と自分に問いかけて頑張ってこられたし、六十五歳の今でもゴルフでH6をキープ出来ているのは、あの猛練習で身につけた足腰の強さのお陰と思っている。

しかし、困ったことに還暦を過ぎてから、この猛練習の思い出が年々鮮烈になり、春と夏の甲子園大会が始まると、テレビの前で涙ぐむことが段々と多くなってきたような気がしてならない。この現象を年老いたせいとみるか、まだまだ血気盛んとみるか、自分では判断しかねているこの頃である。



玉井　信一　昭和5年11月26日生　福岡県行橋市出身・東京都小金井市在住
▽昭和28年東京水産大学卒、日本漁網船具㈱（現ニチモウ㈱）入社
▽平成元年代表取締役社長、6年代表取締役会長に就任、現職
〈好きな言葉〉「力をつくして狭き門より入れ」

満州の終戦

佃　亮二

終戦の時私は十四歳、南満州の安東という町にいた。その時の経験は未だに忘れ難く私の脳裡に残っている。記憶にあるいつくかの出来事を順を追って記してみよう。

㈠　昭和二十年八月九日、ソ連軍満州へ侵攻。守る精鋭関東軍は既に南方に転用されてもぬけの殻。敵軍の南下は恰も無人の野を行くが如くであった。私達中学生は対戦車爆雷を抱いて敵戦車に体当たりすることを命ぜられていた。あと数日終戦が遅れれば、私は確実にソ連戦車に蹂躙されていた筈だ。

㈡　ソ連軍進駐。囚人兵からなる先遣隊は暴行掠奪の限りを尽くした。わが家もやたらに自動小銃をぶっ放すソ連兵に数回に亘り襲われた。射殺されるかもしれない恐怖と、無抵抗の意志を表わすために両手を挙げざるを得なかった屈辱は未だに忘れることができない。

㈢　ソ連軍撤収後、中華民国政府軍と中国共産党軍の内戦が始まった。幾度かの市街戦の末、中共軍が町を制圧した。やがて大規模な日本人中学生狩りが行われた（中学校は既に閉鎖されていた）。彼等は内戦の前線に送られ塹壕掘りに使われた。幾人かの級友は遂に還らなかった。私は鉄路局の苦力（クーリー）（人夫）として働いていたので徴用は免れたが、数十キロのセメント袋の積み卸し作業は骨身にこたえた。

(四)　町ではかつての支配層に対する人民裁判が行われ、多くの日本人が処刑された。満鉄幹部職員であった父は、幸い、かつての部下であった中国人の庇護を得て人民裁判は免れたが、当然失職していた。ある日、父は残された幾許(いくばく)かの家財を携えて食糧入手のため中国人集落に赴いた。その折、中国人農夫は、父に同行していた妹を指さして「家財は不要。その娘を呉れ」と強く迫った。「慌てて逃げ帰ったよ」と、後日父は苦笑しながら話していた。まかり間違えば私の妹は中国残留孤児になっていたのである。

一年後、私達一家は祖国に引揚げたが、この一年間の経験はその後の私の人生観に強い影響を及ぼしたと思う。「いま私が在るのは、多くの僥倖の結果でしかない」、「あの苦力の辛さを想えば、どのような苦境にも耐えられる」という一種の「開き直り」の精神も、あの当時の経験の結果自然に身についたものであろう。



佃　亮二　昭和6年5月7日生　熊本県玉名市出身・福岡市在住
▽昭和30年東京大学法学部卒、日本銀行入行、名古屋支店長、営業局長、理事
▽平成元年福岡銀行副頭取、平成3年頭取
〈好きな言葉〉「得意淡然　失意泰然」

空　襲

辻　長英

昭和二十年六月十九日夜十一時過ぎ、恒例となった警戒警報のサイレンが「ウー」と鳴り渡る。虫の知らせか眠い眼をこすりながらラジオのスイッチを入れた。「米軍機が多良岳上空を北へ向かって進行中…」思わず背筋にすっと冷気が走る。多良には叔母が居り、そこから北方とあれば正しく目的地は福岡にほかならない。時計を見ると発見より十五分は経っている。「危ない」と直感し、祖父や家族を促して庭の防空壕へ誘導する。庭へ出ると、南の空にはサーチライトが数本夜空を照らしている。「本物だ、避難せよ」と叫ぶ。そのサーチライトにくっきりとボーイングB29が数機映っている。

当時の常識では、「探照燈で捕らえると高射砲の弾が命中するように連動している」と噂されていた。今に敵機が墜落するだろう、と固唾を飲んで見ていたが、どうしたことか砲弾は敵機の下で爆発し、弾煙が消えるとゆうゆうとこちらへ向かって飛んでくる。「こりゃぁやばい」と、防空壕へ駆け込むと同時に大音響と共に我が家に大型の焼夷弾が落下、弾は二階から下まで貫通し、雨戸はふっ飛び、紅蓮（ぐれん）の炎に包まれていた。

襲撃の恐ろしさも忘れ、日頃の訓練通りにバケツで水をかける。「焼け石に水」とはまさにこのことだ。水は一瞬にして蒸発し、火は火を呼び「バリバリ」音を立てながら迫ってくる。壕の方ま

で煙が充満してくるので、命大事と消火をあきらめ避難に移る。

幸いにも家の前は広大な大濠公園だ。素掘りながら防空壕も数多くある。我々が荷物をまとめる間に十歳の弟に末弟の赤ん坊を抱かせて先発させる。ところが、我々が公園に着いてみると、たった二十米位しか距離はないのに姿が見えない。爆撃の中、手分して探せども弟達の姿は見えない。煙と火の中でもはや狂乱状態の母を壕に押し込み、敵機が早く去ることと弟達が無事なことを神に祈っていた。母は「戦地の父さんに申し訳ない」と火中に飛び出そうとする。

やがて敵機も去り、煙の中で弟達を探す。もしやと自宅の方に向かうと何と焼け落ちた家の前に弟達が立っているではないか。母は思わずそこにへたへたと座り込んだ。

赤ん坊も今は大学教授だ。五十年の年月は短かった。



辻　長英　昭和7年1月1日生　福岡市出身・福岡市在住
▽昭和29年西南学院大学商学部卒、31年熊本大学工学部建築科選科終了、㈱辻組入社
▽昭和47年同社社長就任、平成2年九州建設㈱へ社名変更、現在に至る
▽建設業労災防止協会福岡県支部長▽福岡県建設業協会会長
〈好きな言葉〉「人間万事、塞翁が馬」

我が青春

中間　翼

昭和二十六年四月、私が二十一歳頃の話です。

医学部の合格通知を前にして途方に暮れて居ました。当時は終戦の混乱がなんとか収まったものの、まだ日本は貧しく、私達家族も貧しかった。私の名前が翼、「よく」とついているように、父は満州で民間航空の操縦士でした。敗戦の翌年全ての財産を捨て着のみ着のままで舞鶴に引き揚げてきたのが昭和二十一年夏でした。幸いに鹿児島の母方の祖父母が健在で家、田畑もあったので、両親がにわか百姓になり姉、妹、弟四人の大家族の食料は確保できましたが、父の技術を生かす職もなく、翼を失った鳥のようになり、現金収入の道が閉ざされてしまったのです。進学の気持ちが強かった私に、父は塩田で細々と収入を得ながら学校に行くように言ってくれました。

当時鹿児島市にあった旧制第七高等学校理科に入学できたのが昭和二十三年春のことです。然し、GHQ（占領軍総司令部）の命で学制改革が始まり、旧制高校は廃止となり、私達は一年終了で新制大学を受験し直し、昭和二十四年夏、新制九州大学教養部理科一年生となって久留米分校で二年間過ごすことになりました。この間奨学資金の貸与と、夏休みの土方仕事、教科書の訪問販売のアルバイトでなんとか学業が続けられたのですが、弟、妹達が成長してくると、父も私一人に学資を送れなくなりました。

そういう環境のなかで医学部の試験に合格しましたが、久留米の教養部の寮から福岡に居を移すにも先立つ金もなく、入学金も払えぬまま途方に暮れ、入学金をなんとかしなければと思って広島県の山奥に材木運搬の労働にアルバイトで出掛けて行ったのです。当時はこのようなアルバイトしかありませんでした。入学式も過ぎ、授業も始まったのに将来の計画も立たず、山奥で労働者達と夜の酒で憂さを晴らして居ました。

その時に鹿児島から一緒で共に医学部に合格した親友が心配して久留米の開業医に相談してくれ、子供達の家庭教師、医院の薬局の手伝い、カルテの整理などをすれば食事と部屋を提供してもよいという夢のような話を持って来てくれたのです。

こうして、久留米から福岡に通学するようになった四年間。朝早く弁当を作って学校に送り出して頂いた今は亡き医院の奥さん。薄汚い私を書生として受け入れて頂いた義侠心のある先生。私の窮乏を救ってくれた親友。この人達があって今の私があるのだと忘れることができません。



中間　翼　昭和5年3月15日生　鹿児島県川内市出身・北九州市在住
▽昭和30年九州大学医学部医学科卒業
▽昭和43年北九州市小倉北区片野一丁目にて中間胃腸科外科医院開院、現在に至る
〈好きな言葉〉「敬天愛人」

届けてくれた方

西島伊三雄

戦前の日本人は「納税」「就学」のほかに「兵役」の義務があって、男子は満二十歳になると、誰でも必ず兵隊検査を受けねばなりませんでした。私はその結果、第一乙種合格ということで、昭和十八年十二月一日「佐世保海兵団に入団せよ」との通知があり、否応なしに海軍に入隊しました。すると、もうその日から軍隊の規律厳しい、何が何だかわからない生活がはじまったのです。今迄のような勝手気まゝな暮しは許されません。

午前六時「ピイッ！総員起こし五分前！」の合図で跳ね起き、寒風吹きすさぶ練兵場を駆け足。海軍体操。軍歌演習。軍人勅諭の暗記等々……。

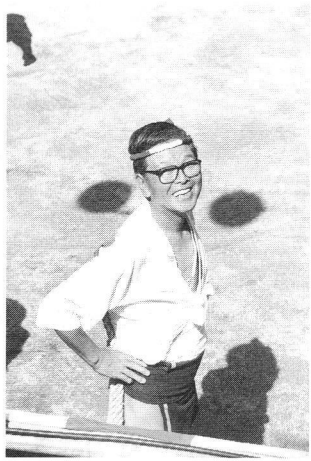
ちょっと、他のことを考えたりしていたらボイーンと鉄拳がとんできます。ただ、オロオロと恐怖と緊張の毎日が過ぎていって一週間目、突然「南方へ行く者はおらんか！前へ出ろ！」との命令です。これはまた……一瞬どう答えたら良いものかと、お互に顔を見合せて黙っていると、鬼の上官の目が次第に厳しく睨みます。私は「ハイッ！」と思わず手を上げて、一歩前に出てしまいました。

あっさり、いちばん危険な戦闘の第一線「南方派遣」に決められた私たちは、海軍の服装のひと揃いを支給されて、翌日佐世保駅から出発です。「行く先は秘密」。列車の窓は黒幕で覆われ、何処（どこ）へ輸送されるのかわかりません。一緒に乗った同年兵も、まだ一週間のつきあいでお互に無言です。

ただ列車がゴトンゴトンと何処かへ走っているだけです。

約二時間ぐらい経って「あれっ?これは長崎行きではないゾ?」と、列車の黒い幕をソッと開いて外を見ると、月の光で見える風景がどうも佐賀から鳥栖を過ぎているようです。「ウーム。これは博多駅を通過する」と気付きました。やがて列車は次第に速度を落しはじめました。黒い幕のすき間から窓外をまじろぎもせず見ていると、見慣れた瓦町の踏切が近付いてきます。「見えた!私の家だ!」二階の障子に誰かの影が写った。もう我慢できません。博多駅に停車すると「いま戦場へ行きます。伊三雄」と走り書きした紙片を手に、列車の窓からとび降り、ホームに居られた国防婦人会の、全く知らない人に「私は瓦町の二〇加屋旅館の息子です。父に渡してください」と手渡しして大急ぎで列車に駆け戻りました。

ボーッ、列車は博多駅を離れて行きました。目をつむり合掌してこみあげる涙をジッとこらえていました。



博多山笠に出る（H7年7月）

西島　伊三雄　大正12年5月31日生　福岡市出身・福岡市在住
▽昭和13年高等小学校卒、即日福岡市内の図案家に入門徒弟修業▽海軍でビルマより復員、24才で独立、二科、日宣美の審査員を経て現在九州グラフィックデザイン協会会長
▽著書　童画集『日本の十二ヵ月』『わたしの思い出』『あの頃』画文集『すんまっせん』
〈好きな言葉〉「相手の身になろう」

少年倶楽部

花田徳行

『少年倶楽部』という雑誌があった。数年前、復刻版が出たけれども、実物を手にとって読んだことのある人はもう六十歳前後をすぎた人たちばかりであろうと思う。

山中峯太郎の「敵中横断三百里」「亜細亜の曙」「大東の鉄人」。吉川英治の「神州天馬峡」平田晋作の「新戦艦高千穂」。佐々木邦の「苦心の学友」高垣眸の「怪傑黒頭巾」。田河水泡の「のらくろ」。島田一男の「冒険ダン吉」、それに山口将吉郎や高畠華宵、樺島勝一らの挿絵がついていた。

昭和の初期のことであるからすでに六十年以上も経っているが、いまでもこれらの名前や題名がすらすら出てくるので、少年時代の私にこの雑誌がいかに強烈な印象を与えたかがおわかりいただけると思う。

付録が毎号ついていて、それも楽しみの一つであった。エンパイヤステートビルやドイツの巨大飛行艇ドルニエ・ドックス号の模型など、これを組み立てるのが一仕事であったが、それに要する忍耐心や根気はその後の自分に少なからず役立ったような気もする。

小説や読みもののほとんどは勧善懲悪であり、勤勉努力であり、愛国心養成であり、当時の風潮としてもちろん軍国主義的であった。しかし、同時に当時の少年の夢を限りなくふくらませ、未来に希望を与えたという点では、私はいい雑誌であったと思うし、いまでも老人同士が集まると少年

倶楽部の話になるのは、忘れられない共通の思い出の最大のものであろうと思う。

私は少年時代を若松ですごした。市役所や武徳殿の傍らに公会堂があり、ある夜、そこで「少年倶楽部読者の集い」があった。少年倶楽部の歌の発表があり、全員で歌った。六十数年前のことで、歌詞は忘れたが、一節だけなぜか覚えている。それは

夕月淡く影さして
川の流れを照らすとき
少年倶楽部ふところに
鍬を洗って土手に立つ
ぼくらは二宮金次郎

というものであった。もし全部覚えている方がいらっしゃったらどうか教えてください。



花田　徳行　大正10年10月10日生　北九州市出身・福岡市在住
▽昭和21年慶応義塾大学経済学部卒、西日本新聞社入社、編集局長、専務
▽昭和61年6月㈱西広社長▽平成2年6月会長、7年6月相談役
▽福岡県中小企業経営者協会会長
〈好きな言葉〉「平歩　青天」

友情が生んだ新講座

原　俊之

昭和三十年七月、九州大学教育学部の二代目の学部長として平塚益徳教授が在任中のことです。教授の長年の悲願だった比較教育文化研究施設が、文部省令により同学部に付設され、第一部門として「日本およびアジアの教育・文化」講座が発足しました。

平塚教授の後を受けて学部長に就任した私は、学部の将来計画を実現するべく、度々文部省に出向き、講座の増設や設備充実などの折衝に努めていました。三十一年十二月に上京した際は、文部省での仕事を終え次第、旧制五高時代の親しい級友で、前年大蔵事務次官に就任した平田敬一郎君を表敬訪問することになっていました。

当日、約束の面会時刻に次官室で久闊を叙した後、話題が学部の実情にふれた時です。

「原君、君の学友の平塚さんとは、文部省関係の委員会で何度か話したことがあるが、国際的視野を持った立派な学者だね」と平田君が言うのです。さらに、

「創設早々の学部のためと、君の学部長就任祝いとを兼ねて、講座を一つ増設してあげようか。もちろん、文部省担当主計官の了解が前提だが」と、思いがけない申し出です。

平田君はすぐその場で、森永貞一郎主計局長（五高時代の一年後輩で、私も旧知の間柄でしたが）を呼び、私を伴ってA主計官室に向かいました。次官と局長の来室に驚いた主計官は、学部関

係の予算書類を取り寄せて、暫く両君と小声で話し合っていましたが、「比較教育文化研究施設の第二部門は増設の見込みがあります。ただし、省としては概算要求は一応却下しますが、文部省から復活要求があれば、承認します」という嬉しい回答が得られました。次官室に戻ると両君は「文部省との連絡は大丈夫か?」と心配してくれました。幸い、当時の文部省予算担当事務官Y・K君は、九大法文学部の卒業生で私の教え子でした。両君にそう伝えて深謝し、辞去するとすぐ私は文部省に行き、K君に委細を話すと、彼も最大の尽力を約束してくれたのです。

翌年の春、第二部門「欧米の教育・文化」講座の増設決定の公報に、一番喜んだのは勿論平塚教授でした。平塚教授を尊敬する平田君は私への祝いに事寄せて、草創間もない学部への好意を、講座開設の形で表してくれたのです。私は彼から受けたこの恩恵を、終生忘れることはできません。



原　俊之　明治41年9月17日生　福岡県大刀洗町出身・福岡市在住
▽昭和6年東京帝大文学部教育学科卒、佐賀県鹿島中学校教諭、福岡第一師範学校教授、九州大学教育学部教授、学部長
▽昭和47年退官後中村学園大学長、同短大学長、同56年退職、九州大学名誉教授
▽著書『トーマス・アーノルド』『教育のこころ(Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ)』他
〈好きな言葉〉「天我が材を生ず必ず用有り」（李白）

毎日新聞の白紙事件

平田満夫

昭和二十年八月十五日、私は小倉市北方（現在の北九州市小倉南区）の砲兵連隊にいた。終戦の日である。

正午にソ連に対する宣戦の詔勅がラジオを通じて渙発されるというので、私たちは石廊下に整列して静かに玉音を待った。ところが、ラジオが不調のためか、玉音の内容は聞きとれず、ただ陛下のお声に弱々しいかげりがあることだけはうなずけた。あとで、この詔勅がソ連への宣戦ではなく、米、英、ソ、支四ヵ国のわが国に対するポツダム宣言を受諾、無条件降伏をするものであることを知った時、私たち兵隊は茫然自失した。

軍隊に召集される前、すでに毎日新聞社の記者として働いていた私は、上官の命によって、当時、門司市にあった毎日新聞西部本社に急いだ。詳しい情報を聞いてこい、というのである。

編集局の中央には私の尊敬する編集局長の高杉孝二郎さんがいた。高杉さんは氷嚢をタオルで頭にしばりつけ、腕組みをして瞑目していた。私が近づいて挨拶すると、高杉さんはやおら目を開き、「もうわれわれの時代は終わったよ。われわれの日本は終わったんだよ」と吐


毎日新聞
東久邇宮殿下に
組閣の大命降下
復興の途
平和まで

S20年8月17日の西部・毎日新聞

き出すようにいった。私は言葉がなかった。このほか毎日新聞社の先輩、同輩は私にポツダム宣言の意義、武装解除の実体や原子爆弾の威力などをこと細かく話してくれた。そして「米軍は近く、門司、長崎、福岡に上陸」という情報もある、というのである。

私は連隊に帰り、こんな状況を率直に報告した。その後どういう経過をたどったかは分からないが、一日おいた十七日、避退準備命令が出て、砲兵連隊は火砲だけは残し、全員が午前十一時に営門を出て、福岡県企救郡東谷村呼野に向かった。それから十五日間、この農村での生活が続いたのである。

あとで知ったのだが、毎日新聞西部本社では八月十五日付も、十六日付も二面は真っ白の新聞が発行された。当時の新聞は小型で表と裏の二面しかないペラ新聞で、この白い新聞は五日間も続いた。俗にいう〝白紙事件〟である。

さきに書いた高杉編集局長はこの時の心境を次のように書き残している。「軍部のお先棒を担いで敗戦のドタン場まで国民の目をおおい、死地にまで引きづって行くことに無条件で盲従した新聞の責任は何としても免れまい」。彼は辞任を申しいで、社の最高幹部に毎日新聞の廃刊を進言している。廃刊はなかったが辞表は受理された。



平田　満夫　大正6年12月15日生　福岡県飯塚市出身・東京都府中市在住
▽同志社高商卒、昭和18年毎日新聞西部本社入社、47年取締役に就任、50年同取締役を辞任、新聞輸送㈱社長に転じ、現在同社相談役
▽平成7年、改めて毎日新聞監査役に就任、現在に至る
〈好きな言葉〉「得意淡然　失意泰然」

B29と空腹と

廣石敏彦

終戦の年、私は七歳。小倉市立清水小学校一年生であった。父が当時、山田部隊（現在の北九州市山田緑地）の副部隊長として広い庭のある官舎住まいで、私は毎日そこから約一時間、南小倉駅からの線路伝いにほとんど素足で通学していた。小学生一年の足で雨の日も風の日も片道約三キロは辛かった。

終戦も真近になった頃、上空には毎日B29爆撃機の編隊が悠々と銀翼を光らせて飛び回る下を、いつ襲われるかも知れない恐怖を感じながら通学した。空襲警報の連続で学校と家を行ったり来たりした、あの恐ろしさは今でも忘れられない。しかも学校に登校した時も一日中授業があることは希で、今でも女の先生であった事だけは覚えているが、校舎、教室の様子は記憶にない。何十年振りと言われた一昨年の夏、毎日猛暑が続いたあの青空が五十年前の七月から終戦までの小倉の空と良く似ていた事を思い出した。

戦時中、毎週だったか、十日ごとだったか、食料の配給があった。部隊の部下の兵隊さんが家まで届けてくれ、食べる物がなかっただけに子供ながらに楽しみであった。しかしこの配給はほとんど同じ物が多く、ヒジキ、コーリャンと粟。

ヒジキはまだしもコーリャンは焚いても米のようには膨れず、勿論、粘りもなく、箸では到底食

べられる代物ではなかった。匂いも多少あった。それでも他に食べる物はなく配給で我慢せざるを得ず、今でも時々食卓に出てくるヒジキを見ると、つい配給のことが思い出され、なつかしさと同時に成長期の私にとって食べることに苦労したあの頃が脳裡をかすめる。

戦後は郷里の門司・恒見に帰り、松ヶ江南小学校へ転校したが、グラウンドの隅は芋畑であった。我が家は代々農業で、沢山の田畑を小作人に耕作させていた。しかし、それでも米は手に入らず、父が終戦後芋、野菜、麦を作っていたものの、米は祖母が若い頃買い集めた着物と物々交換して手に入れる姿を時々見たことがあった。その様な食料事情が朝鮮戦争の勃発まで続いた。

今思えば、戦争と敗戦という社会背景とはいえ、人間として最低の生活を体験出来たことは我が人生の少年期であっただけに、与えられた苦労は一生忘れられない。それだけに、今の満ち足りた生活が将来再び戦争に依って破壊される事のない様、切に望みたい。



廣石　敏彦　昭和13年4月20日生　北九州市出身・北九州市在住
▽昭和38年慶応義塾大学法学部卒、宇部興産㈱入社、45年希望退職
▽現在、勝山自動車㈱社長、ユタカ開発㈱社長、若松パークホテル社長
〈好きな言葉〉「生涯現役」

消えない心の逆目

福元　喜久雄

「日本は無条件降伏だよ」、四年のSさんが言った。にわかには信じ難かったが、彼は真剣であった。天皇放送より十日前。私は早大の高師部一年でひよこだった。本土決戦になったら戦うが、竹槍では—という程度だった。大学四年の見識に驚いた。後日の新聞記事によれば八月十日朝六時にポツダム宣言受諾の電報が発せられたというから、短波での傍受がSさんにも伝わったのだろう。短波機器の所有や非国民的言辞への監視が厳しく、郵便物まで開封検閲された時代だったが、真実は必ずどこかから伝わってくるものだと思った。戦後五十年、記憶をたどると——

昭和十七年四月十八日、標識のない飛行機が低空で二階のすぐ上を飛んだ。新型の試験飛行だろう、と姉と見ていたら早稲田辺に爆弾が投下されたと話が伝わってきた。ドウリットル隊B25による東京初空襲だったのだ。こんなに簡単に侵入されるのかと心配した。杞憂ではなかった。十九年にはB29による大編隊の空爆がたび重なった。北九州に始まり二十年三月には東京の四割が焼けた。下町の被害甚大と聞いて見に行った。写真で見た関東大震災以上の惨状だった。

小石川（文京区）から見ると夜空に六十本ほどのサーチライトが編隊を照らし出す。悲しい美しさだった。数分もたたぬうち高射砲の煙で敵機は見えなくなる。一機も落ちない。高度一万米に届く高射砲は横須賀だけでそこを避けてくるのだと詳しい友人に聞いた。真っ昼間、安全高度でB29

が悠々とやって来た。戦闘機が攻撃する。きらきら光りB29の尾翼程しかない。二、三度交差してついに尾翼に体当たりした。敵機墜落！「やったぁ」と歓声も上がった。ゲーム感覚の観戦が既にあった。翌日、至高の魂として二階級特進を新聞は大々的に報じ、特攻精神が賞揚された。その人の命はどのように散華、供養されたのだろうか。

命と言えば、都立明化小学校のとき聞いた実戦の話が心から消えない。日本兵なら死ぬまで戦うのに英国兵が逃げて木に登り「ヘルプミー」と言った。言葉が分からない兵隊には「へーぷー」と聞こえたから、「この野郎」とやっつけてしまったというのである。小学生を笑わせながら暗示にかける洗脳だったのか、真実だったのか？〝鬼畜米英〟と教え込まれた沖縄の女性達は断崖に身を投じた。

幼少年の純粋な心が誤った国家政策で血に染められた記憶は忘れられない心の逆目である。



教え子の50歳記念同窓会で（中央椅子）

福元　喜久雄　昭和2年12月17日生　東京都文京区出身・鹿児島県郡山町在住

▽昭和20年早稲田大学高等師範部国語漢文科中退、24年鹿児島青年師範卒業、中学・高校国語教師、鹿児島県学校図書館協議会会長、小・中学校長、63年退職後高校講師等、現在無職

〈好きな言葉〉「流水腐らず」（呂氏春秋）

ソ満国境警備隊にハハヨメツレテユク

藤川欣佐

「ハハ　ヨメツレテユク」という電報が当時のソ満国境警備部隊にいた私にとどいたのは、昭和十八年十月下旬のことだった。私達の結婚式は十一月三日に予定され、私は休暇の許可をもらって内地へ帰る日程をたてていた。ところが、関東軍の緊急命令で在満部隊全軍の待機指令が出て帰れぬことになり、留守宅へ連絡をとったところ、母が花嫁を辺境の地へ連れて来るとの返電である。

十一月一日の夜、母と花嫁が朝鮮半島を北上し東寧県下城子駅へ寒さで震えながら到着したのを出迎え、懐中電灯の明かりで官舎へ案内した。幸い部隊長の泉鉄翁大佐と恵美夫人が媒酌の労をとって下さることになり、三日には部隊長官舎へ副官をはじめ部隊本部の将校が列席し、私が筆をとって書いた誓詞を読みあげ、乾杯となった。母も嫁も思いがけない極寒の僻地で、温かい挙式となったことに喜びの面持ちであった。

それまでの私は、昭和十五年の春に学業を了え、就職すると直ぐ当時の満州奉天市へ赴任となった。それも僅か一年足らずで兵役のため内地へ戻って福岡で入営し、初年兵は直ちに原隊のいる牡丹江省東寧へと派遣された。思えば広漠たる旷野で過ごした慌しい青春の月日であった。

やがて私は主計将校に任命されたが、日ならずして結婚式の直後、前記守備隊に南方転進の命令が出て、十一月三十日には駐屯地出発という事態になった。結婚式から三週間目のことである。母

と嫁の驚くまいことか。短い新婚生活に別れを告げ、深夜の出陣式を終えると、涙ながらに見送る家族をあとにして軍用列車は一路釜山港へと向かったのである。

我々が着いたところは、南洋群島のトラック島から更に東のクサイ島という孤島であった。時に昭和十九年一月三日。防寒服を半袖夏服に着替え米軍邀撃に備えての陣地構築やら食糧の確保にとそれぞれの任務に昼夜を分かたぬ日々となった。空爆、銃撃、艦砲射撃と米軍からの攻撃を受けながら、幸いにも山あり川ありの島であったのと、米軍の戦略が沖縄へと向ったので、サイパン玉砕のあとは我々の島と覚悟していたのに九死に一生をえた。

やがて終戦となり、浦賀へ上陸、復員してリュック一つの身で焼野ケ原となった門司へ帰り着いた。疎開の家族を探して帰宅した途端に、妻から母の位牌の前に連れてゆかれ、呆然自失、有為転変のわが青春は消し飛んだのである。



S18年11月3日結婚記念

藤川　欣佐　大正7年8月6日生　北九州市生れ・北九州市在住
▽昭和15年旧制山口高等商業学校卒、日満商事㈱入社、▽昭和16年から20年迄兵役
▽昭和25年門司市役所入職（38年五市合併により北九州市）51年同市退職
▽昭和51年高藤建設㈱入社、58年退社
〈好きな言葉〉「人生に別離なかりせば誰か恩愛の重きを知らんや」

師の決断

松信要三

物心ついて五十年、人は還暦を迎える頃自分史の青春編がまとまる、と言えまいか。家族とのめぐり逢いに始り、ドラマチックな人とのめぐり逢いが運命を決定づけ、それが「喜怒哀楽」の個人史を築き、反省や満足の中「塞翁が馬」が頷ける年頃となる。

私は中学時代柔道を習って茶帯までは貰った。柔道着を持たなかったことが縁でラグビーで青春を完全燃焼することになった。一六三センチで鈍足のチビタンク。骨丈夫が唯一の取柄だった。強運に恵まれ明大に進学、現役十五年（高校・大学・社会人）、ＯＢコーチで二十五年。この間流した汗は約二十噸―を時々自慢する。全て諸先輩の汗の指導と同輩後輩の支援の賜であり感謝し続けて今日がある。明大新人で対中央二軍戦に初出場。懸命なタックルが認められて、一軍に抜擢され、夢舞台であった早明戦にも四回出場。全日本軍在籍七年間（一九五九～一九六五）桜のマークを胸にする名誉も摑んだ。戦後初カナダ遠征や八幡の海外遠征（カナダ、オーストラリア、ニュージーランド）全国社会人大会に六回優勝、国体に九回出場等その歴戦の中で、忘れられない血と汗の話は山程あるが、全ての起点は師の決断にあったと思う。

圧巻だったのは一九五九年早明戦の時、私は四週前の対東大戦で膝の靱帯を負傷、次の対法大戦に欠場、負けた。早明が一週間後に迫ったが、痛くて充分走れず出場を断念しようと覚悟して先生

を訪問したその時、目が会った瞬間「要三ッ今度は痛くても出るんだぞ!!」と命令が下った。「ハイッ」と答えてしまって覚悟が決った。監督三十五年目の北島忠治先生は、ファイテングスピリットを大切にされ、またキャプテンシーを重視された。故に負傷中ながら主将に選ばれたのである。試合中、前半十五分でSO北島が脛骨折で退場し十四人での戦いとなった。だが、メンバーの組み替えやFBのスクラム参加指示命令等の采配が成功し、再逆点の末勝利を得た。この時の喜びは格別であり、オヤジの笑顔も爽やかだった。師の決断で忘れられない事がもう一点。

私は高校三年の時、友人三人と共に謹慎処分の罰を受けた。部の強化の為新入部員勧誘の時ビンタを食わした者がいて事件となった。「謹慎祝をするから家に来い」、当校教師でラグビー部長故桑野司磨先生の伝令が届いた。「罰は罰、神妙に受けよ。動機は純粋だから俺は許す。くよくよせず胸張っとけ!!」消沈の我々に檄をとばしてくれた先生の笑顔が明治の親父とダブル。勇気ある師の決断に最敬礼して一生青春の顔で生涯現役で走り続けたいと思っている。



明大ラグビー部創部70周年記念で北島先生(左)と

松信　要三(旧姓松岡)　昭和12年1月28日生　福岡県山田市出身・福岡市在住
▽昭和35年明治大学卒、八幡製鐵㈱入社、全日本ラグビー社会人大会8回出場・6回優勝、38年主将、41年史上初の四連覇、43年全明治軍で現役終了
▽昭和53年新日鐵九州支店、現在会社顧問
〈好きな言葉〉「鉄は熱いうちにうて」

おばあさんと孫娘

松元　正

「高校生の孫娘が落ち込んで困っている。知覧へ行きたい。どうやって行ったら良いか教えて下さい」ある夏休みの午後、こんな電話が来ました。「成績が落ちた、友達とうまくいかない」と、悩んでいる孫娘に知覧の特攻平和会館を見せて目を覚ましてやりたい、とのことでした。

この電話は北九州市在住のご婦人で、以前ツアーで知覧を見て、とても感動なさったそうで、くよくよしている孫娘を見て、自分が話をして聞かせるより連れて行って見せてやりたい。そんな思いから電話をされた、と聞きました。

一週間程したある日の夕方「やって来ました。朝早く列車に乗り先程着きました。今晩の最終で帰ります」。はっきりした口調でそうおっしゃるご婦人はきりっとして、やさしい方でした。

一時間程説明を受け、丁重なお礼を言って帰られました。

おばあさんは孫娘にどんな話をなさったのでしょうか。また、孫娘さんは若い命を蕾のまま散った特攻隊員の遺書や遺品にどんなことを感じて帰ったのでしょうか。私はふと、ある特攻隊員の手紙を思い出しました。

お母さん　お母さん　今俺は征(い)く
母を呼べば　母は山を越えてまでも

雲の彼方からでも　馳せ来る

昭和二十年四月七日午後知覧から出撃した金沢市出身の第二九振武隊長　中村実大尉（二十歳）。死に向かい合っても、母を慕い、呼べばいつでもとんで来てくれるという安らぎを与えた五十年前の中村大尉のお母さんと、落ち込んだ孫娘を黙って包み込んで知覧に連れてこられたおばあさんと、何か〝母子像〟が重なるような気がします。

十七歳から二十歳前後の若者が自分の命を捨てることによって祖国が救われる、親兄弟が助かるなら喜んで死ねる、と書き残して沖縄へ出撃して再び帰ってこなかった隊員。明日を生きようと思っても生きられなかった隊員の心情を、あの孫娘さんにどう汲みとっていただけたのでしょうか。

生まれた時から平和で物があまり過ぎた社会しか知らない孫娘さんにおばあさんが分かってもらいたかったのは、平和の尊さ、平和であることの幸せと命の尊さ。そして特攻隊員の遺書に見る親子のきずなと情愛の深さではなかったのではないでしょうか。



松元　正　昭和26年1月17日生　鹿児島県知覧町出身・知覧町在住
▽昭和44年3月薩南工業高校卒業、名古屋市の建設会社現場監督など経て49年4月知覧町役場入職、町立知覧特攻平和会館館長
《知覧特攻平和会館》昭和49年3月町立知覧特攻遺品館として出発。63年12月知覧特攻平和会館に改称オープン。陸軍特別攻撃隊員一〇三五名の遺影、遺品等を展示。年中無休

きのこ雲

円日成道

一九四五年八月九日、私は学徒動員で長崎県川棚にあった海軍工廠で人間魚雷を作っていた。高等学校一年生。夜は工員の寮でノミとシラミになやまされ、仕事中は海軍の兵士から青竹でしごかれ、朝食と夕食のあとでは広い食堂で眠りこけながらドイツ語や数学の講義をうけていた。

その日の朝。工場で新聞、それも今日の半片一枚だけのものだったが、私たちはソ連の参戦を知った。みな黙っていた。まだ十七歳の若者たちもそれが何を意味するのか、ぼんやりと感じていた。死は他人ごとのように、そこにあった。

十時半ごろ警戒警報のサイレンが鳴ったが、そのころはもう防空壕に逃げこむことはゆるされていなかった。上半身まるはだかの私たちは工場の外に出ると真夏の青空を見あげた。キラキラひかるB29が二機、長崎のほうへきれいな飛行機雲を引きながら飛んでゆく。しばし敵機であることも忘れて、その機影の美しさに見とれていた。

仕事にもどって、どれくらいたったであろう。それは稲光のようだった。何がおこったのか、わからないまま外へ出た。ド、ド、ドーと大地をゆるがすような地ひびきがおこった。夢中で防空壕に頭から飛びこんだ。せまい壕の中、みんなおりかさなって次に何がおこるか待った。なにごともおこらない。ぞろぞろと壕からはいだした。

「あーあ、あれを見ろ！」

だれかが南のほうを指さして叫んだ。大村湾をはさんで長崎の方向に、ピンク色したきのこ雲が青空をつきさすようにそびえたっていた。

あくる十日の朝、寮を出た私たちは隊列をくんで工場へむかっていた。途中、大村線の川棚駅前を通る。息をのんだ。隊列はとまってしまった。貨車から出てくる被爆者が長蛇の列をつくって、こちらにやってくるのだ。私たちは道路のはしに身をよけた。人に背おわれている人、棒ぎれにすがって歩く人、戸板にのせられて黒こげになっている母親、その胸にすがりついている火傷の赤ちゃん。

あのときの私の聴覚は失われていたのだろうか。物音も人びとの泣きさけぶ声も、私の耳には残っていない。ちょうど無声映画をみるように、私はただ茫然とたたずんでいたことを覚えている。

その日、工場の片隅で見た新聞には「長崎に新型爆弾、損害軽微　軍民ともに戦意盛ん」という文字がおどっていた。



夏期仏教講座で

円日（マドカ）　成道（ジョウドウ）　昭和2年9月4日生　福岡県田主丸町出身・福岡市在住
▽旧制佐賀高等学校を経て、九州大学経済学部卒▽浄土真宗本願寺派で得度。
現在、同派光円寺住職

〈好きな言葉〉「さるべき業縁のもよほせば、いかなるふるまいもすべし」（歎異抄）

暗い星空

水野　勲

あの日のこと、あの日の夜のことは忘れようにも忘れられない。終戦の日、昭和二十年（一九四五）八月十五日のことだ。毎年終戦記念の日に、繰り返し反芻しているから、記憶が薄れるどころか、むしろ増幅しつゞけているといってよい。

あの日の正午の詔勅のラジオ放送を、私は八幡製鉄所の人事課長室でひとり聞いた。この放送は所内全職場の隅々まで、スピーカーを通じて知らされた。八幡の街中も、もちろん全国津々浦々まで報道された。聞き終えた人は、それぞれの感慨を胸に抱き今日に至っている。昨年は戦後五十年の節目の年ということで、マスコミは例年になく大々的に、この日のことを採りあげた。あの日あの時の回想を、大勢の人が語っている。それには年齢や境遇や性別などのちがいに加えて、各人の価値観も窺い知ることが出来て、私には興味深かった。

あの夜、私はちょうど防護当直の当番で、この一年余の間、何回となく寝泊まりをした本事務所の仮眠室に、この日も同僚の二、三人と詰めていた。昼にあの詔勅があったが、これで戦争が完全に終わった訳ではあるまい。事実、夜のラジオは時どき「九州南方の洋上に敵機―」という放送がなされていた。しかし八幡製鉄所には、この夜、空襲警報はもとより警戒警報が出ることもなかった。

この静謐はいったい何年ぶりのことなのか。私は夜も更けた本事務所の屋上にある監視哨に立った。つい一週間前に大空襲に遭った八幡製鉄所のあちこちから灯がこぼれ、紅い炎もチラチラ見える。三分の一が焼夷弾に焼かれたというのに、街中のそこここに灯火が瞬いている。

戦争は終わったのだ。そのまぎれもない証拠が眼下にある。しかしこの後にやって来るものは何か。無条件降伏、地上軍による占領、責任者の処断、賠償等々、戦敗国の国民としてどんな苛酷な運命が待ち受けているのか。私は恐怖に震えた。

何回かの八幡の空襲でも、私は怖いと思ったことはなかった。日中戦争で一兵士として二年半中国大陸を転戦した時も、同じだった。待ち設けている時は怖くはない。何が起こるか分からないから怖いのだ。

多くの人は、戦争が終わって安心したという。平和が戻って来る、安穏な生活が蘇ったのだという。この夜、私には平和という言葉は全く浮かばない。よく晴れた夜空の星くずを眺めながら、立ち竦んでいただけだった。



水野　勲　大正3年8月10日生　北九州市出身・北九州市在住
▽昭和12年3月、東京帝国大学経済学部卒業、直ちに日本製鐵㈱入社、爾来、八幡製鐵所勤務が最長、本社、外地（ブラジル）、他作業所等若干の移動あるも、昭和54年、新日本製鐵副社長、八幡所長を最後に現役を終える
▽現在㈶ＫＩＴＡ理事長
〈好きな言葉〉「随処随縁」

敗戦の日に寄せる感慨

御手洗　博

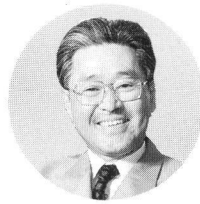
「四月とはこのうえなき残酷な月」とうたった西洋の詩人がいた。冬眠を貪ることの出来る死の季節「冬」が望ましく、人々の意識を覚醒する春は残酷な月と映ずるというこの詩人特有の逆説である。私にとって、このような月は八月であった。敗戦が従来の価値体系に対する不信を突きつけ、否応なしに覚醒を迫ったからである。

あの八月十五日、わが家は主のいない盆祭りをむかえていた。父は戦地にいた。わが家のラジオの前に、近所の人が集まってきた。正午、畏き声が何事かを伝えた。長老の解説で、それが日本の降伏であることが分かると、一斉にざわめきが起こり、そして沈黙が座敷を支配した。母は放心したように遠くを眺めていた。

私は完全に「マインドコントロール」されていた。なにしろ私の生まれたのは神の国であり、物心ついたころから、私は大御心を体する聖戦を賛美していたのである。幼時より「ススメ　ススメヘイタイススメ」を読まされ、長ずると竹槍訓練に駆り出された。このような軍国少年にとって「玉音」の伝える敗戦の報は、余りにも衝撃的であった。悲壮感にうち震えていた私の眼に、静かに席を立って台所に向かう母の姿が映った。どことなく軽やかなその足取りが私には不快であった。その時母の胸中に去来したものを正しく理解したのは、狂信から覚醒した、ずっと後のことである。

父の復員も衝撃であった。風土病に冒され、やせ衰えて帰還した父の姿には、もはや昔の面影はなかった。理不尽に苛立ち、夜半にうなされる様子は不気味であった。父を苛む悪夢の正体は兵士としての体験だけではないとの思いが、私を苦しめた。次々と明るみに出る皇軍の実像―現地民間人に対する暴虐の数々―が、おぞましい妄想をかき立てたのである。父は実直な農夫であり、平凡な家庭人であった。この父が、仮に異常心理による一時的暴走をしたとすれば、それは戦争という極限状況の結果だという以外に説明がつかない。だが、一時的にしろ、この「聖戦」が何十万という恐ろしい人格破壊者を作ったことは紛れもない事実なのだ。

あの時から五十年。またぞろ「聖戦」肯定論が飛び交い、サリンをばらまく集団が跋扈している。狂信とその独善的思想の恐ろしさを、私たちは片時も忘れてはならない。



御手洗　博　昭和8年11月21日生　島根県津和野町出身・北九州市在住
▽昭和40年早稲田大学大学院文学研究科修了
▽昭和48年北九州大学教授、図書館長、外国語学部長歴任▽山口・北九州言語文化研究会会長
▽著書『ことばと文学』『十九世紀アメリカ文学―レイシズムの軌跡』等

戦死後も教え子を救う源三教官

皆川節夫

源三教官とは私の恩師・陸軍中尉永瀬源三教官（陸士五十期生・昭和十三年当時二十三歳）に私たち士官候補生が捧げた愛称です。教官は零下四十五度の三ヶ月、北満で私たちの訓育を終り、その年十四年八月末、惜しくもノモンハンの戦闘で戦死を遂げました。このとき以来今に至るまで、旭川師団の管内ではその人柄と武勲を慕って人々は「軍神　永瀬大尉」と称えてやむことがありません。

さて再び奇しくも教官の霊によって私は一瞬の危機を救いとられました。それは教官の戦死から一年七ヶ月後の昭和十六年三月四日北支派遣の新設旭川部隊（歩兵二二一聯隊）でのことです。当時私たち五名は初年兵教育を実施中でした。

この日の早暁三時に私を頼りに苦心の百キロを踏破した四十名の初年兵がやっとの思いで中隊兵舎に帰りついた直後のことです。いつもの様に内務班まわりを始めたとたんに私は異様な光景―一人の初年兵小菅三郎が暁闇の屋外に立って幼児のように激しく泣きじゃっくていた―を発見したのです。瞬間に私は「あれほど初年兵教育に協力を誓ってくれた古年次兵め！堪えに堪えて帰りついた初年兵をいじめるとは卑怯だ！」と五体のふるえが止まらず、なぐり込もうと構えたその時「待て待て皆川候補生！」、なつかしい源三教官の秋田弁が天の一角にひびきわたりました。わずかに冷静を取り戻し「小菅、古年次兵がいじめたのか」「ちがいます。うれしくて泣いているのです。

教官殿、中に入って見て下さい」、数語を交わした私は驚きました。何と古年次兵Aは小銃手入れに、Bは春雨に濡れた初年兵に軍服を着せ替えるなど、肉親をいたわる愛情そのままのなつかしさでした。みがきあげられたランプは煌々と荘厳に輝いていました。そしてやがて古年次兵への感謝と懺悔の涙でその美しさもいつしか見えなくなりました。

この出来ごとを転機として私の所属した通信中隊は北支でも完ぺきに任務を達成し、苛酷な西部ニューギニア戦線から復員した今も、ひそかに一隅を照らすいたわりの絆を絶やすことがありません。

源三教官は私たちに訓へ続けてくれました。

「指揮官は常に精神の平衡を保って判断し決心せよ。そのため平素から心の動揺をなくすんだ。『待て待て』と自分に言いきかせるのだ。十回でも二十回でも。時には百回でも二百回でも。わかったか候補生」と。



皆川　節夫　大正8年2月11日生　福岡県大任町出身・北九州市在住
▽陸士54期、小倉外専（現北九州大学）米英科卒。
▽北支、西部ニューギニアに従軍。アメリカ駐留軍を経て経営コンサルタント。

〈好きな言葉〉「肝胆相照　意気衝天」（歩二七将校団の訓）

一つの心を二十に分けて

宮田則子

予期しなかった召集令状を手に青年学校に勤めていた父は鹿児島第四十五聯隊に入隊しました。米軍が沖縄に上陸して一週間後の昭和二十年（一九四五）四月八日。その日鹿児島市は第一回の空襲に見舞われ、米軍の影が迫る不安の中で母と私を頭に五人の弟妹の心細い生活が始まりました。

兼業農家だった私の家で大黒柱の父が軍隊に召されて第一の問題は、どうして農業をやっていくかです。既に食糧不足は農村にも及び、自家用の食糧をどう確保するかは農家でも頭の痛い悩みでした。父の代わりに男手を頼もうにも青壮年は軍隊や軍需産業に徴用されて農村も厳しい労働力不足。農繁期には私達女学生も動員されて五、六人の班別に農家に派遣され、麦刈りや田植え、稲刈りを手伝わされていました。寒い日は、この時ノコ鎌で刈った左手の小指が今でも痺れます。

こんなありさまでしたから父が征った今、私達六人が母を助けるほかありません。それで、みんなで話し合って、私と妹が朝夕食の準備と後片付け。小学五年の弟は馬の草刈り。三年生の弟は裏庭、一年生の弟は表庭の掃除と分担を決め、母が農作業に専念できるようにしました。四歳の無任所の弟もみんなの手伝いをしようと走り回りました。七月に入ると、日曜日の朝はカルガモのようにみんなで水田に入り、小さな手も田の草取りにジャブ、ジャブ泥田を掻き回しました。この頃は沖縄も陥落、鹿児島から北へ約二十キロの農村まで米軍機が来襲し、怖がってしがみつく下の弟を

抱いて裏庭の防空壕に逃げ込む時はもう息がつまる思いでした。

だが、やがて終戦になり父が帰って来ました。あの時の喜びは、まさに空襲の恐怖から解放されて、電灯を覆っていた灯火管制の黒い布を取り払った光の輝きでした。

しかし、そんな喜びも束の間でした。ほどなく外地にいた二人の姉家族と叔父の家族が敗戦の重い足をひきずって引き揚げて来て、わが家は母屋と隠居屋にそれぞれ二家族計二十人の共同生活が始まりました。私達の食糧も乏しい時代。そこに一挙に家族が増えてどうして空腹を満たすか、炊事手伝いの私にも気が遠くなるような毎日でした。人数が多いので食事は二回に分け、カボチャやイモダンゴ、庭に実った柿まで主食に繰り入れて、先ず子供達に食べさせ、大人達はその残りをすすりました。

食糧も衣服も何もない、それは飢餓線上の共同生活でしたが、それを支えたのは、一つの心を二十に分け合った〝家族の心〟でした。



宮田　則子　昭和5年1月1日生　鹿児島県姶良市出身・鹿児島市在住
▽昭和24年鹿児島青年師範学校卒業、中学校教諭、小学校校長、平成2年3月定年退職▽平成2年4月～6年6月鹿児島市勤労婦人センター所長▽平成6年10月から人権擁護委員
〈好きな言葉〉「継続は力なり」

シベリアの俘虜

柳瀬正貴

七十年間の人生で最も心にも肉体にも刻まれている思い出は、終戦後のシベリア抑留生活である。朝鮮興南港を出帆する時は、日本に復員するものと信じ乗船した。ところが接岸したのがナホトカ港（当時は不凍漁港）である。その日から三年、過酷なシベリア俘虜生活が始まった。

誰が名付けたか「地獄谷」に集結させられた俘虜千名、復員用の装具は着けているもの、、今後のことは不安が募るばかりである。軍隊の時は指揮官が頼りであったが、俘虜になってからは、将校も下士官も兵もない。頼りになるのは通訳のみで、その通訳も明日のことさえ不詳である。凍った生木を焚き火にして、零下数十度の露天で移動の指令を待つばかりである。生木の煙のため角膜異常の患者が続発する。

翌日やっと無蓋貨車に乗せられ、北へ北へと向かうが、貨車が停車する度にソ連兵が入り込んで来る。「チキチキイエス」とボディタッチをする。「チキチキ」とは時計のことで、一人のソ連兵が両腕に数個の時計をはめている。その他万年筆、キーホルダー等ソ連に無い物は貴重品として全て略奪するのである。

二日目に到着したのがスプーチンカという伐採場である。そこはまだ前人未踏の地で、大森林地帯であった。先ずカンバスのテントを張り、収容所用のキャンプ造りからはじまった。煖房はトロ

ッコを逆さにし、薪の焚き口をカッターで切り、そこから無尽蔵にある松の薪を一日中燃やすのである。松は燃やすと大量の煤が出るが、その煤がテント内に充満するため、兵士の顔も手も被服も真黒になってしまう。最も悩ませたのが虱（しらみ）の大群である。虱の駆除は、はじめは一匹一匹手作業で、次は冷凍法、乾熱ｅｔｃやってみるが、どの方法も無効であった。最終的に成功したのが煮沸で、ドラム缶に被服を入れ煮沸することにより虱騒動一件落着することが出来た。

伐採場での事故は勿論、入ソ二年目位から栄養失調（ディストロフィー）が多発し、多数の死亡者を出した。収容所では、死者は全て解剖をするが、栄養失調で死亡した人の内臓、ことに心臓、腎臓、脾臓などが健康人の半分以下に萎縮しているのに驚いた。シベリア抑留の実態が、あまり書物などにならないのは、あまりの悲惨さに筆にならないのではないだろうか。



柳瀬　正貴　大正11年10月23日生　北九州市出身・北九州市在住
▽昭和19年12月満州国立桂木斯医科大学卒、医学博士、23年7月シベリアより復員
▽昭和24年10月より現在地にて内科医院開業▽山口大学医学部非常勤講師、北九州医師事業協同組合理事長、福岡県医師会裁定委員、民事調停委員
〈好きな言葉〉「幸福とは健康であること」

廃墟に得難い実学

百合野保文

私達大正末期生まれの年代は戦争と平和を劇的に体験しました。今思えば、なかなか得難い体験だったと思います。

太平洋戦争（当時は大東亜戦争と言いました）も敗色が濃くなった昭和十九年に大学予科に入った私は三ヵ月後の七月には学徒出陣で陸軍に入隊。満州（現中国東北地方）の東方国境に近い蜜山炭鉱付近の飛行場つくりをしながら幹部候補生の教育を受けました。その時は戦病死者の遺骨を内地に持って帰っていたので終戦は日本で迎え命拾いしました。現地は湿地帯だったので、夏にソ連の戦車が来ることはないと言われていたのが、八月八日にはソ連の戦車に蹂躙（じゅうりん）されたと、後で聞きました。

大学に帰って講義に出るようになったのは翌年の二十一年ころだったでしょうか。渋谷にあった大学は空襲で焼けて世田谷の今の馬事公苑前に移転し未だ建設中でした。二十二年に元陸軍士官学校や海軍兵学校の学生達と一緒に試験を受けて本科に入ったのですが、勉強はあまりせず、アルバイトに明け暮れる学生生活でした。大学自体が食糧の配給がないと休みということもありました。というのは、二十年の冷夏と枕崎台風による米の大凶作で戦後の食糧不足は危機的状況になり、二十二年七月には東京都の主食配給の遅れが約二十六日になりました。食糧の配給がないと、都民は

自分でヤミ食糧を探すほかなく、大学も休みになったわけです。

しかし、それだけではありません。学生自身も生活に追われ、或は目標を失って、勉強よりアルバイトに打ち込んでいました。私も予科に入学して三ヵ月後には学徒出陣し死ぬ気でいたのですから敗戦のショック、生きている空しさから容易に立ち直れず、講義より〝余技〟に力が入ったわけです。

なかでも面白かったのが学生アルバイトの斡旋業。拓大や東大の学生約十人で銀座に事務所を設けて繁昌しました。当時は学校が休みになる前によく国鉄運賃の値上げがありましたが、値上げ前に切符を買って二等車で帰郷したものです。また、北九州青果の前身福岡県青果㈱の東京事務所の手伝いをして、ここで仕事を覚えました。卒業論文に青森リンゴの問題を書いたのも余技が実技になったようなもので、父の後を継いだのも座学より〝実学〟に励んだせいかも知れません。今にして思えば、空腹ながら自分の思いで自分の生活を大胆に追っかけることができていい時代だったと思っています。



百合野　保文　大正15年8月23日生　北九州市出身・北九州市在住
▽昭和25年東京農業大学農学部卒、北九州青果㈱入社、54年代表取締役社長就任、現在に至る
▽丸北産業㈱取締役社長、デル・フレッシュ㈱取締役社長、関門九州青果センター㈱理事長、北九州信用組合理事、㈳全国中央市場卸売協会理事

北九州空襲

吉田和彦

平成七年、戦後五十年という大きな節目を迎えたが、昭和の時代、苛酷な戦争と苦しい生活を体験して厳しい戦後の混乱期を生き抜いた人々は、忘れられない貴重な経験や出来事を後世に正しく伝える必要があると思う。

中学生時代から今日まで毎日、日記をつけているので忘れられない出来事や想い出が日記を読むことによって、まるで昨日の出来事のようにはっきり甦ってくる。

日本の敗色が強くなってきた昭和二十年、日本全土が毎日B29の投下する爆弾や焼夷弾の被害を受けるようになった。各家庭では防空壕を掘り、空襲警報発令の都度、防空壕に避難していたが、自宅の座敷に飾っていた武将の鎧の兜を父がヘルメット代わりに使用していたのが印象的だった。

B29が北九州上空に飛来したとき、迎撃した日本の戦闘機がB29に捨身の体当り攻撃を行い、ボーイングが黒煙を吐きながら大きく旋回して墜落していくのが地上から良く見えた。高度を徐々に下げた巨体が視野に大きく迫り、今にも頭上に落下してくるように感じられ、墜落して行く機体を緊張しながら見守った当時の出来事が生々しく想い出される。

小倉中学校横の菜園場の大きな防空壕にB29が墜落した為、防空壕に避難していた多くの人々が尊い犠牲となった。その日、敵機を撃墜するため高射砲も活躍したが、その破片が樹齢二百年の庭

の梅の木に深く突き刺さり家族の身代わりになったのか、間もなく枯れてしまった。

六月二十九日夜半にB29の大規模な空襲があって関門地区に焼夷弾が投下された。門司に大量の焼夷弾が落下している様子が小倉から良く見えたが、まるで夜空から美しい花火がバラバラと間断なく降っているような光景だった。

七月三十一日は午前十一時頃空襲警報が発令されたが、関門地方にグラマン戦闘機が甲高い金属性の爆音を響かせながら急降下して機銃掃射をしている状況が小倉からはっきり望見できた。

そして終戦間近の八月八日午前十時、約百二十機のB29が北九州地区に来襲、約一時間八幡・若松・戸畑は火の雨のような焼夷弾攻撃を受けたが、小倉は被害を免れた。

戦後五十年が経過した今でも忘れられない若き日の貴重な体験であるが、戦争の悲惨さと忘れかけている平和の有難さをしみじみ感じる。



吉田　和彦　昭和3年12月10日生　北九州市出身・北九州市在住
▽昭和31年山十㈱入社、38年山十㈱代表社員
▽昭和40年山十㈱代表取締役、平成元年山十㈱取締役会長
〈好きな言葉〉「朝は希望に起き、昼は努力に生き、夜は感謝と反省に眠る」

真昼の閃光

吉田敬一

昭和二十年八月九日、私は長崎県の大村湾に面した彼杵の浜辺に立っていました。太陽は殆ど真上にあり、さざ波が砂浜を静かに洗っていました。

当時、旧制高校二年生の我々は佐世保海軍工廠に動員され、私は横穴式作業所で小型潜水艦に使う傘歯車を作っていました。ところが健康診断にひっかかり、健民修練ということで、空気のいい環境の中で健康の回復に努めていたのです。

その日は一叟の小舟を借りて修練生数人が乗組み、沖に漕ぎ出し、私達はそれをぼんやりと岸から眺めていました。夏の空が海を染めるように晴れ上がっていました。と、何かピカッと稲光のような光が空を走りました。見上げても勿論雷雲など見当たりません。おかしいなと見回していると対岸の山のうえに真っ白な雲がむくむくと湧き出すではありませんか。はじめは火山の爆発かと想いました。漕ぎ出していた船には人影が見えなくなっています。（後で聞くと、この人たちは熱かったので海に飛び込んだのだそうです）

そうこうする内に耳をつんざく爆音が襲いました。何が何だか分からず、頭を抱えて家のなかに駆け込みました。彼杵と長崎との距離は約三十五キロですが、あれだけの音の大きさは今考えても驚きより恐怖でした。

広島に新型爆弾が使われたという情報はすでに流れていたと記憶しますが、しばらくして外に出て見上げた雲の不気味さは、形といい、色といい、何かこの世のものとは思えませんでした。夜になると、体の焼けただれた無数の人たちが、大村の海軍病院に送り込まれているという噂が流れました。これが長崎の原子爆弾だったのです。

戦後五十年を迎え、先の大戦について色々なことが語られ、特別な行事が行われています。また、毎年終戦の日を中心に平和という文字が溢れますが、文字にすることによって、かえって訴えが上滑りしてしまうような気がしてなりません。

筆舌に尽くせないといいますが、自らの体験を語れば語るほど、空虚な苛立ちを感じる方も多いことと思います。あんな経験はもう誰にもして欲しくないという思いを一〇〇%伝える難しさ。さらに言わして貰えば、マスコミがセンセイショナルに扱えば扱うほどうすっぺらな印象も増してきます。

じっと静かに、戦争で経験した悲惨さや悲しみを反芻し、身近な人に伝えていきたいと私は思っています。



吉田　敬一　昭和2年2月17日生　福岡県三橋町出身・北九州市在住
▽昭和25年九州大学工学部卒、国鉄入社、56年常務理事・九州総局長
▽現在九州キヨスク㈱代表取締役社長
〈好きな言葉〉「自然・悠然・偶然」

ひたすらに悔いなし

吉村慶元

日本国国体を・天地創造神の創りし国・天壌無窮万世一系の天皇・皇運（天皇家の繁栄）に尽くし国家に殉ずることが自己完結――と摺り込まれ、大東亜共栄圏樹立を大義とする戦争時に中学生となった。当時の年表をくると▽昭13　国家総動員令▽昭14　徴用令（店員さん徴用で人手不足の我家）▽昭15　皇紀二千六百年祝典（大政翼賛会で親父参列）▽昭和18　勤労動員令（一年上級まで軍需工場に）▽昭19　学徒動員令（きけわだつみの声）と続く。

小学高学年は農繁期に勤労奉仕、小昼（こびる）という田圃での間食の味覚はしっかりと記憶にある。戦いも負け込み本土空襲が始まり、体格がよく学校（現上野丘高）に近いということで緊急警備員に任命された。任務は敵機来襲で崖の横穴に奉安殿から御真影（ごしんえい）（天皇、皇后両陛下の写真）と勅語を移管し、監視哨（老桧の梢に設置）で情況を把握、そして被災時の対処活動である。

グラマンの急襲の他B29編隊の定期爆撃があり、日本の戦闘機（特攻戦術で激減）や高射砲（炸裂弾未到達）の効果なく、僅か一機撃墜の折、後手に縛られた乗組員捕虜に唾棄罵倒した想い出が苦い。そのうち被爆全焼の海軍工廠病院が、幸い残った当校舎に移転した。間もなく動員された上級生の働く工場が被爆して傷ついた先輩等を鬼畜アメリカ奴（め）と呪い、興奮して手術室（教室）に担ぎ込んだ記憶が生々しい。

勤労奉仕の大部分は河で篩った小石の山をトロッコで運び、被弾した滑走路の穴埋修復作業で、責任を果たし頬張った支給麦飯ニギリの味も忘れられない。また、急遽派遣された千歳村丘陵の頂上を均らしての陸軍飛行基地づくりでは、召集で我々と一緒に働く老兵が自分の子供の如き若い下士官に「中学生より働きが悪い」とひっぱたかれる情景。敵機来襲の報で予め用意の松枝で作業現場のカムフラージュ。干割れした孟宗竹輪切の食器の貴重な味噌汁を漏らさじと猫舌を火傷、押小麦飯での下痢続出、久方ぶりの休暇は丁度結実の桑畑に跳び込み食った桑苺の甘味等々鮮明な想い出が湧いてくる。人間、苦しみ・悩み・悲しみから学ぶというが、当時皆同様の苦労を味わったためか、飢・寒・乏の記憶はない。

あれこれと当時の政略の欺瞞、無益を批判できるが、私にとって百姓、土方仕事の習熟と重労働で培われた足腰のお陰で今日の健康と仕事の充実感があり、これを宿命に素直、従順であった結果だとするなら五十年前の境遇に感謝の他はない。



吉村　慶元　昭和6年3月18日生　大分市出身・北九州市在住
▽昭和29年京都薬科大学卒業、小倉薬品㈱入社、56年社長に就任
▽平成6年九州同業三社と合理化のため合併、キョーエイ薬品㈱となり、同社会長に就任
〈好きな言葉〉「忘己利他」

埋(うづ)み火(び)

変化とニーズ

安達昌弘

アメリカの著名な心理学者A・Hマズローによると、人は誰しも段階を追って欲求を高めて行くが、低次欲求がクリアされないと次の高次欲求にたどりつけないとされている。

今から二十数年前になるが、私はある研修で彼の「ニーズハイアラーキー」の講義を聴く機会を得た。日本が敗戦によってゼロから再出発し、今日に至った歴史を振り返った時、その変化があまりに彼の説に酷似しており、忘れ難い思い出としてその事にふれてみたい。

私達は物やサービスを売買する経済社会の中にいるが、それ等はその時々のニーズによって変化して行くのである。その時代々々の社会的ニーズの変化は個人所得が一、五〇〇ドルを超える頃から大きく変化して行くと言うのである。

戦後の歴史を辿ってみると、昭和三十年頃までは食・衣を求めて必死に働いた生理的欲求の時代であった。昭和四十五年頃に我が国の一人当たり国民所得は一、五〇〇ドルを超えるのであるが、この時代は家電品から高級耐久消費材を求めた物的欲求の時代であったと言える。これ等の欲求が充足されてくると、飽和水準のない自己実現の欲求が高まりだすのである。この欲求は心の満足を求める精神的欲求であり、人それぞれが「生き甲斐」を求め、感性、創造、差別化、名誉等を重視するようになる。従って自然との交流やサークル活動、ファッション、旅行等々、また社会的には

公害、交通、医療等広く社会環境の充実を求めるニーズが生まれてくるようになる。

日本はこれまでアメリカを見ていれば変化が読めていたが、基本となる個人所得がアメリカを追い越したのである。つまり教師がいなくなり、自らが道を探さなければならない時代になったのである。ニーズは更に多様化し高水準を求め未知の世界に突入すると言う難しい時代を迎えている。

私達がよく考えなければならないのは、日本は自己実現の豊かな時代に生れ育った人達が中心になりつつあり、この人達のニーズによって日本が成り立ち変化して行くということである。

豊かな時代しか知らない世代のことを考えると、余程政治も経済も考えて方向づけして行かないと大変なことになるような気がしてならない。

戦後五十年の来し方を振り返りながら、得難い研修の事を複雑な感慨をもって思い起こしている。



'94年、北京アジア大会競技場で

安達　昌弘　昭和5年6月2日生　大阪府柏原市出身・大阪府茨木市在住
▽昭和28年同志社大学卒、30年㈱日立物流入社
▽昭和59年日新運輸㈱代表取締役、現顧問
〈好きな言葉〉「人間万事塞翁馬」（淮南子）

ウイグルの絵

碇　浩一

新疆芸術学院院長のハザフメティ氏は偉丈夫である。大きな手足、太い首。喉にやけどをしそうな六十度のシンジャンマオタイをぐいと流し込むさまは、あたかも酒呑童子さながらである。

しかし大きな赤ら顔を近づけてウイグル語でまくしたてる氏の目は象のように優しい。ウイグルの人々がそうであるように、氏も踊りが好きだ。

同席の誰かが楽器を持ち出してウイグルの歌を唄い出すと、周囲の手拍子に乗り、巨軀を軽快にゆすりリズムに乗って踊りだすのだ。手拍子と哄笑。ウイグル独特の楽器の音色。どこか哀調を帯びた高らかな歌声に合わせて、それぞれ思い思いに踊り興じる人々……。

あっという間にさして広くない部屋の中はイスラムの民族の饗宴となった。

シルクロードの人々のからりとした陽性の雰囲気の余韻を味わいつつホテルに戻った私は、ハザフメティ氏からもらった氏の画集を開いた。ハザフメティ氏は新疆でも名のある画家である。中国美術家協会ウイグル分会主席でもある。

私は画集の中に息を呑むような光景を観た。めくる頁すべてから目に入って来る世界は民族の虐げられた生活の歴史であった。暗い色調の日干し煉瓦の土間で、人々は乾燥した土埃に汚れてうずくまっていた。無表情の男女の顔には深いしわが刻み込まれていた。漢族の官吏が威たけだかに仁

王だちになり、周囲で粗末なりをしたウイグルの人々が深い絶望をたたえた眼差しで労役をしていた。

一点だけ童話の世界のように明るく美しい絵があった。それはウイグル族の隆盛の頃の伝説中の美しい王妃の肖像画であった。きらびやかな錦糸銀糸の玉衣を身に纏い、宝石をちりばめた冠を戴いて清楚な佇まいで椅子に掛けた王妃。背景には、豊かな緑と水と動物とそして枝もたわわな葡萄が描かれていた。

十年くらい前から、ふとした縁でシクルロードに出会い、中国に多くの友人ができた私にとって、この時のことは忘れられない思い出である。



碇　浩一　昭和20年1月13日生　旧満州国奉天市出身・福岡県前原市在住
▽昭和46年九州大学医学部卒、神経精神医学教室入局▽宮崎医科大学精神医学教室、大分県立病院精神科副部長
▽昭和52年九大医学部講師、59年福岡教育大学保健管理センター所長
▽日中友好交流子どもキャンプ実行委員長
〈好きな言葉〉「我事において後悔せず」（五輪書）

兄

石川勝治

昭和七年生まれで七歳違いの兄と私は、大学が同窓、学部も一緒で、共通の師にも恵まれ、漸くこの頃から共通の話題で語り合うようになりましたが、兄は一貫して山登りに専念し、一年の大半を山で過ごし、一方、私はテニス一本に打ち込んでおり、休日等に顔を合わせることは本当に稀でした。また、社会人になってからも、互いに転勤等ですれ違いが多く、たまに顔を合わすと「久し振りだなぁ」という具合で、今考えますと縁の薄い兄弟だったという感じがしています。

昭和六十年八月十二日、私は札幌に転勤しており、当日は本社より来られた社長を囲み一杯やっていましたが、社長より「今日ジャンボが墜落し、多くの犠牲者が出たらしいよ」との話が出ていました。家に帰ると直ぐに家内から「父からの連絡で、兄が大阪へ出張で向う途中、墜落したらしい」と告げられました。「まさか」と思いながらテレビをつけますと、次々に映し出される搭乗者名簿の中に石川貞昭・五十二歳が出ており、一瞬自分の目を疑いました。翌日、早速現地に飛び、兄の家族と合流しましたが、現地は大混乱で、遺族は情報不足の中、むせ返る暑さの体育館でただじっと待つだけでした。私共は四日目の深夜に呼び出しが掛かりました。

遺体安置所に入りますと、夥しい数の白い布で覆われた遺体の入った棺桶と強烈なホルマリン消毒の匂いとで圧倒され、その状態は口では表現出来ません。兄の棺の前で、確認の為の調書取りに

三時間かかり、やっと兄との対面――棺の蓋を開けました。顔には若干の打撲の痕がありましたが、本当に安らかな寝顔の如く、五体も満足な状態で綺麗に保存され、何故か悲しみより、ほっとした気持ちになりましたが、同時に直ぐに涙で目の前が霞み、何も見えなくなったことを思い出します。

当時は、兄の家族と私の両親のショックは当然ながら大変なもので、とても立直りは無理だろうと心配致しましたが、十年が経って、当時中一から高三の三人の男の子は皆社会人になり、両親も父九十四歳、母八十三歳と今なお元気。兄の分まで頑張って長生きしており、兄も今ではほっと安心して眠っている事と思える様になりました。

毎年夏には、この事故が思い出されますが、このような悲惨な事故が再び起こる事のないように念願し、兄の冥福を祈っております。



石川　勝治　昭和14年6月17日生　東京都新宿区出身・福岡市在住
▽昭和38年学習院大政経学部卒、日本セメント㈱入社、平成2年同社九州支店長就任
▽平成4年同社退社、北九州運輸㈱入社、専務就任、5年代表取締役副社長兼村本商事㈱代表取締役社長就任、現在に至る
〈好きな言葉〉「努力」「不言実行」

最後の教え

石村僖悟

父（先代社長）が亡くなる年のことである。博多駅名店街の店を大改装する話が持ち上り、当時専務であった私に改装計画を作るよう父から指示があった。私も大いに張り切って、主力商品の鶴乃子は勿論、その年から始めた洋菓子のボンサンクや喫茶室を複合化した店舗のプランを練り上げ、約三千万円の見積り書を添えて父に提出をした。

ところが、このプランを見るなり父は「何だこの計画は。この位の店に三千万円も使うなどとはもってのほかだ」と私を叱りつけたのである。確かに二十余坪の店に三千万円の投資は今の相場でも過大である。しかし、それだけに立派な改装で鮮やかな変身を遂げ、売り上げアップを図ろうとする考えに私はいささかなりとも自信を持っていたわけで執拗に喰い下がった。

何度かのやりとりの後「じゃ一体いくらでやれと言うんですか」と言うと、何と「八百万円でやれ」とのこと。三千万円の計画を八百万円ではいくら何でも無茶苦茶な話である。「どうやれば八百万円でできるんですか」ときくと、その答えがすこぶるふるっていたのである。「ウチは鶴乃子屋バイ。店の前の方に鶴乃子のケースを並べて、後は幕でも張っときゃ良かろうが」。明治の人の知恵と言おうか頑固さと言おうか、さすがにこれには恐れ入って私も二の句がつげなかったものである。

結局親子ゲンカのような形で話がまとまらず、父はその直後このことも気に病んだせいもあり、不治の病いで入院することとなった。そして何度か入院先に許可を求めに来る私に最後まで首を縦に振ることなく他界したのである。

父の死後私は自分の考え通りにこの店を改装し、結果は大成功で会社全体も大きく伸びる引き金となったのであるが、私はそのことを私自身の考えが正しかったとして自慢する気などさらさらない。むしろ、父が身体を張って私に教えようとしたことがこのことの一番奥にありそうに思えてならないのである。経営とは自分の力不相応なことを無理にやろうとするところから破綻を来たす。決して自分の能力以上のことをやってはいけない、ということであろう。

父の死後十六年。引き継いだこの会社を大きな間違いをせずにここまでやってこれたのも、父のこの最後の教えがあってこそのことと有難く思っているのである。



石村　僖悟　昭和23年6月14日生　福岡市出身・福岡市在住
▽昭和46年東京大学経済学部卒、㈱石村萬盛堂入社、49年取締役、51年専務取締役就任
▽昭和54年㈱石村萬盛堂代表取締役社長、㈱イシムラ代表取締役社長、㈱萬年家代表取締役社長就任
〈好きな言葉〉「吾れ以外皆吾が師」

人の心——おむつのにおい

今田　章

日本は経済大国と言われる迄になったが、あまりの急激な成長で大切なものが忘れられ、見捨てられている。それは家族のつながりと、人の心である。物質的には豊かになったが、日本人の心は貧弱になった。日本は諸外国にうらやましがられてはいるが、尊敬されていない。相手の立場になって考えることは、一応は知っていても、実行が必ずしもともなわないきらいがある。

ある病院に友人の見舞いに行った時、看護婦さんがシーツの取替えに来た。患者はあとにして呉れと頼んだが、看護婦さんは、あとの仕事の時間の都合か、何の応答もせず、見事な手さばきでまことに手際よく、患者をクルクルと丸太の様にころがして、シーツを取替え、サッパリしたでしょうと、大声で言っていきおいよく病室を出て行った。

サッパリしたのはいったい誰でしょうか？

排便のにおい消しの薬が開発され、売出されている。おむつを替えることを義務的に、事務的に任務としている介護人には良いものが出来たということでしょうが、さる病院の治療と看護にあきたらず、無理に退院させて、自宅で七年間、舅の介護をしている奥さんが「便のにおいがなくなると、病人の調子を知る手だてがなくなる。においのいやさより、においのある便によって、介護の喜びを感ずるようになった。また、その喜びを私が感じたときは、患者にも判るとみえて、病人の

表情もなごやかになり、眼の動きに反応があらわれる」と申しておりました。

この言葉に私はいたく感動した。人の心のにじみでた、忘れられない言葉の一つである。心は大切にしたいものである。

私事で恐縮ですが、私は昨年十月と本年一月に実弟と義弟を癌で失った。

終末期から臨終まで四、五日付添った経験と実感だが、死期の迫った弟が、力をふりしぼって一生懸命喋舌っている。何かを訴えているようだが、何と言っているのかわからない。看護婦は勿論、奥さんでもわからない。疲れるから止めなさい、ゆっくりおやすみなさいと、無理に寝せつけようとしている。しかし、患者は止めない。しきりに何かを喋舌り続けている。

読唇術、読唇法と申しましょうか、唇の動きだけで言葉をききとる術はないものでしょうか。唇の動きだけで、人間最後の言葉を聞きとる人を至急養成する必要があると、つくづく思った。



今田　章　大正8年9月25日生　山口県玖珂町出身・北九州市在住
▽昭和17年上海の東亜同文書院卒▽旭興産㈱相談役
▽前日本保温保冷工業協会副会長、九州保温保冷工業協会会長、北九州商工会議所常議員・産業政策委員長▽小倉のまちづくりを考へる会、高齢化問題委員長
〈好きな言葉〉「千人の諾諾は一士の諤諤に如かず」（史記）

ふくよかな手

入谷節子

九四年一月二十五日深夜、数十年共に悲しみ苦しみ、ある時は感動し歓び、その時の流れの中に、多くの想いと共に歩んだ人生最大の同伴者である主人の、この世の最後の時でした。すーっと音もなく、この世界の空気を吸い終えた瞬間、私のまなこに強く忘れ難い印象としてのこっているもの、それは暖かく柔らかい手でした。

ふくよかな決して大きくはない手でしたが、何とよく働いた手でしょう。その手の中に一生の働きと想いがこめられている様に思える。子供が生まれた時駆けつけ抱きあげた手、お茶を飲み、そっと洗い場まで運んだ手、人との出会いの中互いにその想いを確かめ心を通い合わせた手、相手を励ます為そっと肩に置いた手。「やあー」挨拶代わりに交わす手、肩が凝っていそうな人を見ると揉みほぐしてあげる手、にこにこしながら好きな駄菓子を持ち帰る手、会社で受話器を取り、印を押し、書類をめくる手、想い起こせばその手の中にあふれんばかりの忘れがたい想いがはらまれている様に思えた。

主人は「唯心所現」と言う言葉の好きな人でした。想いと現れは一つと言う意味でとても深い意味がふくまれている仏教用語です。日頃は何かと厳しい人、冷たい人という印象さえ与えた人ですが、その小さな手の働きの中に、決して冷たくない生涯の想いの連なりがこめられていた様に思い

ます。今思えば、まこと心から暖かい人でした。常に人の事を思い、他の為に使った手、この世の最後の瞬間まで暖かさを残した手、この手で主人は一体何をしたかったのだろうか。もしかしたら縁あるすべての人の手と手を繋ぎ合わせたかったのでは。

戦後五十年という事もあってテレビや新聞等で過去の歩みにそれぞれの角度から焦点をあて、二十一世紀に向かう心構えの大切さを討議する場面をよく見ます。たしかに戦争は終り、一応の平和は続いておりますが、私達の心の内はいかがでしょうか。未だ競争原理だけで戦い続けているのではと思うふしが多々ある様に思われてなりません。決して内外共に平和とはいかない昨今ではないでしょうか。まわりをみれば不信を抱かざるを得ない様な出来事ばかり。一体どこに目標を持ち、何を信じて生きればよいのかと、とまどう人達が増えて来ているのでは。こんな時代だからこそ明るく暖かい手と手を結び合い、互いに助け合い補い合うということが大切では——と主人の声なき声が聞こえて来る様にも思います。



入谷　節子　昭和9年4月6日生　香川県三木町出身・山口県下関市在住
▽昭和28年香川県立木田高等学校卒、ドレメ女学院卒業
▽現在下関家庭裁判所調停委員、国際ソロプチミスト会員、関光汽船㈱役員
〈好きな言葉〉「創造」

身勝手な思い

入谷泰生

当社は今年で開業以来四半世紀を迎えますが、ふり返ってみますと、当然のことながら色々と紆余曲折がありました。

石油ショックの後の金融がタイトな時期だったと思いますが、グループの関係で設備投資が続き急激に資金調達がふくらんだ時がありました。従来から船舶の資金調達は、政府系金融機関を中心として民間の協調融資とで融資団を作るというのが通例でした。当時経理課長だった私は、専務と一緒にそのうちの一つの銀行に出向き従来通りの借入れの申込みをしました。

当社は社長の方針もあって、創業当初よりあまり借入先を増やさず、既存の借入先と友好な関係を保ってきたつもりでありました。そんな中で、その銀行は一番新しい取引先で二、三年前に先方から強力に取引を要請してきた経緯がありました。

その時同行した専務が「当社は借入先を絞って他へは浮気をしていません。ですから従来通り協調融資に応じて下さい」という旨を申入れた処、出て来た担当課長が「借入先を絞るといわれても困ります。こういう時には他にも窓口を増やすべきです」とつっけんどんに言われたのです。

当時若かった私は、今迄調子のいいことを言ってきておきながら、いくら金融事情が逼迫してきたからといって、こんな手の平を返した様な態度はないものだ、と怒ったものでした。

結局その後支店長に会い、傍系の生保の資金を導入することで借入金は支障なく調達できましたが、その生保の見返り保険がつくというおまけがつきました。そんな事もあって、その後の金融緩和期にもその銀行との取引は縮小しましたが、担当者も支店長も何代か変る中で、その熱意もあり最近は、少しずつ増えて来ています。そういう意味では銀行も損な判断をしたものだと思います。

しかし、後になって冷静に考えてみると、その課長の応対の仕方は気に入りませんが、言い分としては無理もないのかなと言う気がしてきました。

客観的な情勢が変っているのに我々は気がつかなかったのです。経営環境は常に変るのです。それと商売というものは自分の都合ばかりではうまくいかないのです。相手の立場、相手の身になってみないといけないということです。

今になって見れば当り前のこと乍ら、若い私にはいい教訓となりました。



入谷　泰生　昭和21年11月26日生　香川県坂出市出身・兵庫県西宮市在住
▽昭和44年京都大学卒▽45年6月新日本海フェリー㈱入社
▽平成元年4月日本クルーズ客船㈱代表取締役社長就任▽6年2月新日本海フェリー㈱代表取締役就任
〈好きな言葉〉「我を詛詬（てんゆ）する者は我が敵なり、我を非とする者は我が師なり」

不思議な縁

上田正昭

大学を卒業する時、毎年正月に会おうと誓い合った三人の友がいる。それぞれの会社に就職し勤務地もバラバラになったが、正月には必ず大阪に帰省し、四人揃って語り、飲み、励まし合った。十三年間続いた四人の会も、家族の都合等で集まれなくなり、その後自然消滅。めいめいが個々に会うことはあっても、四人が揃うことは当分ないのではないかと思っていたが、昨年の春、十七年振りに四人が顔を合わせ、旧交を暖めることができたのだ。

四人はと言うと、まずは一井捷二君。十年前より千葉に住み、現在は茨城の鉄鋼会社に勤める。中堅商社に就職したが、その後転職、数回に亘り勤め先を変えた波瀾多き男。

魚住正治君は、十五年前に大阪より熊本に転勤となり、お袋さん、妹さん家族も近くに呼び寄せ、今ではれっきとした熊本県人。

次に石田良典君。現在沖縄に住み、暑さと戦っている。東京、名古屋、仙台と各地を転々、その都度家族も大移動。

そして私は、一番長く地元大阪に居座って来たが、二年半前より福岡勤務となる。これで四人全員大阪から離れてしまった。こうした四人に再会の機会を作ってくれたのが魚住の長女の結婚式。熊本で楽しく懐しき一夜を過すことができたのは、望外の喜びであり、またの出会いを約して別れ

たのだった。この再会の前触れとして、友のきずなの強さを感じさせられる偶然の出来事が昨年の秋起ったのだ。

一つは、熊本の魚住宅を始めて訪れた時のこと。「一井はその後どうしているかなぁ」と、二人で話した直後、当の本人から突然の電話。当時、一井は勤め先が倒産し、個人的にも株で失敗、尾羽打ち枯らす状況。こちらから連絡することも憚られ、音信不通となっていたのだ。彼の職場決定の報に二人ほっとするとともに、あまりのタイミングに驚いたのだった。

もう一つは、その二週間前に起った石田と一井の大阪での出会い。一年振りに沖縄より出張した石田と職捜しのため大阪入りした一井とが梅田でバッタリ遭遇。大都会での奇跡の瞬間。

神の引き合わせとでも言うか、こうして半年後に四人の再会となったのだが、何か運命的なものを感じ、いつまでもこの関係を大切にしたいと思う。



上田　正昭　昭和17年10月18日生　京都市出身・福岡市在住
▽昭和40年3月大阪市立大学商学部卒、㈱日立製作所入社、63年2月関西支社情報システム営業部長、平成5年2月九州支社副支社長、6年8月九州支社長
〈好きな言葉〉「一期一会」

振り子

大木二郎

私の家に古い柱時計がある。ねじ巻きである。古いが捨てがたい。時々油をさす。今も忠実に動いている。ある想い出がその時計に愛着を覚える。

私は、旧制高校の入試最後の日の英文解釈にとり組んで居た。殆ど分明し、一問を残すだけになった。ところが、ペンジュラムという単語が私を悩ました。その一語で訳が出て来ない。前後の脈絡が不分明。私は焦った。限られた時間。両親の期待に反して不合格の運命に泣くのか。私は嘆き乍ら不思議に中世の伝説を想い起こした。

愁いの神が河辺で粘土の土塊（つちくれ）を見つけ一片で人形の土偶（でく）を造った。勿論、口がきけず、歩きもしない。あきたらなく愁いている時、魂を与える神ジュピターが通りかかる。お陰で土偶はピノキオの如く口をきき、歩きだした。でも愁いの神は再び、名前のないことに悩む。ジュピターは当然、吾の名前をつけよと主張。争いの最中、土の神が頭をもたげ、私にも名付け親の権利ありと主張。三人の争いが続いている時、時間の神が通りかゝり、時の氏神を買って出た。夫婦喧嘩最中の電話にも似ている。仲裁の判定は、ジュピターよ、此の土偶死せし時魂を取り戻せ。土の神はもとの土に返せ。愁いの神は土偶の創始者故、土偶の生きている間、愁い、悩みつづけさせよ、であった。

愁いの神は、名前はどうすると拘（こだわ）る。

名前は土から造ったのだからフムス（土）、と解決する。

ほんとに短い時間にぼんやりこの伝説を想起していた。私の運命はペンジュラム一字で不合格。愁いは尽きないのか。

その時、偶然にも、隣席の受験生の答案が机上からずれているのに気付いた。視るともなしに私の眼に「子」という文字が映ったのである。私は天啓の如く、振り子の子だと直感した。それからは残された短い時間を荒海を走る帆をちぎられた船の如く書き続けた。終末のベルよ、もうちょっと待って、と祈る如くに。

それかあらぬか、合格発表の日、掲示板に私の番号があった。隣席の人はその後戦死した由。

私は若い頃痩せていたので、軍隊の経験がない。戦後五十年、生死を共にした戦友がいない。私の忘れられない極限状況は従って平々凡々。鬼気迫るものがない。依然として愁いの神の支配下に。もしもあの時天啓がなかったら——顔を上げると、柱時計が夜半の二時を告げた。



大木　二郎　明治45年3月5日生　東京都千代田区出身・鹿児島市在住
▽旧制七高文、東京帝国大学文学部倫理学科卒、鹿児島大学名誉教授
▽著書『形而上的な罪意識』『鹿児島に於けるギリシャ正教』
〈好きな言葉〉「人を信じない。裏切られることがないから」

艱難汝を玉にす

大迫　忍

二十年前、創業者の父とともに二人三脚で血を吐くような苦難の道を乗り切ったことを、私は生涯忘れることはないだろう。

昭和五十年。当時三十歳、専務職にあった私は、社の浮沈にかかわる極めてショッキングな事件に遭遇した。白地手形紛失事件が発生したのである。父は直ちに役員会で対策協議に入った。先ずは事件のあった関西支社を閉鎖すべしという意見が大勢をしめた。いろんな意見が尽きると、父は「お前はどうするつもりだ」と私に意見を求めた。心に期するところがあり「閉鎖はしない。私は解決に死力を尽くしたい」と答えると、父は「どうせ後を継ぐ立場だ、やりたい方法でやってみろ」と私にこの難問処理を命じた。私は直ちに関西の拠点として神戸市に居をかまえ、手形回収に取りかかった。手形を追うというのは、当初雲をつかむような苦労と焦りを伴った。何処から？幾ら？出てくるのか。毎日が極端な緊張の連続だった。

父は資金調達に、或いは供託の準備に懸命だった。役員は、とにかく売上げの増加に最大限の努力を続けた。私は神戸と九州を往き来しながら随分怖い場面にも遭遇したが、一件一件気の遠くなるような厳しい交渉を続け、その場で決断を下しながら回収に走り回った。

紛失手形の中で一枚でも未回収があっては大変である。若いとはいえ血尿を出す程のハードな毎

日。父もさすがに心労がたたり入院したが、それでも父と私は二人三脚で必死に頑張った。

最後の一枚を回収し終えた時の喜びと安堵感は、筆舌に尽くし難い苦難の結果として、例えようもないものがあった。事件が起こってから既に二年半を経過していた。

父はこのことで寿命を縮めたのかもしれない。しかし苦難の道を辿りながら、父の経営姿勢や数々の教訓は、現在の私の経営の在り方に大きな影響を与えてくれたと考えている。父は言った。「苦難を解決するのは他人でなくオーナーがやるべきだ」と。

自ら信ずる道を前向きに、ひたむきに歩む。それが問題解決に通じることを学んだし、そういう努力には必ず援軍が現れるということも知った。銀行のご支援、友人を始めとする私共に関わりのある多くの方の励ましや援助がそれである。

「艱難汝を玉にす」と言う。私は事件から多くのことを学んだ。



大迫　忍　昭和20年8月13日生　大分県宇佐市出身・北九州市在住
▽昭和43年中央大学文学部卒、㈱ゼンリン入社、55年代表取締役社長
▽平成3年㈱サンライン代表取締役、4年㈱ゼンリンプリンテックス代表取締役社長、7年同取締役会長、現在に至る
〈好きな言葉〉「雨ニモマケズ」

継続は力なり

大野隆司

還暦を過ぎた歳になるせいか、このところ友人や知人から退職の挨拶状が届く事が多くなった。さらりとした葉書もあれば、友達の思い入れが十分込められた手紙もあり、奥さんや子供さんの心尽くしに感謝の気持を加えたのもある。いずれも仕事に情熱を傾け、金色に、ばら色にと輝いた人生を一段落させた友人達のまだまだ若い顔を思い浮べて、大変感慨深い。

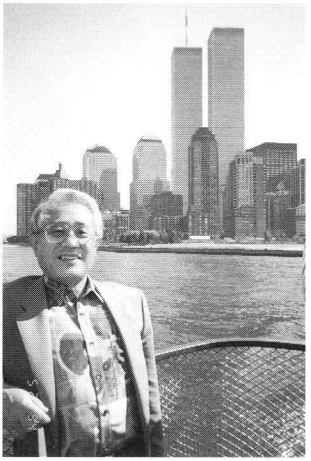
ふりかえれば、私共の子供の頃は、戦禍を避けての疎開や、敗戦による引揚げ等今の時代から思えば日本全体が耐乏生活の日々であった。

当社は祖父が大正十年、主に鉄道用品の販売店を創業以来、人間で言うならば喜寿を迎えようとする歳月が経とうとしている。その間、人生の如く、数々の紆余曲折があり、軍の命令によって昭和十九年工場も油須原に強制疎開となった。ところが、今度はすぐに終戦となり、昭和二十三年門司に復帰再開するまでに、血のにじむ苦闘が続く事になった。

父は常々「最悪の事態を予測して事に臨め」とか「嫌な事から先に解決する努力をせよ」と言っていた。これは、三十代で身を以て戦時下の激動の会社を支えた体験から得た言葉だったのだろう。世の中が落着き、少しずつ産業に活気が出てきた。私が学校を出た頃には、父のこの言葉はほとんど実感できなかった。

ところが、この言葉は、私が社長に就任したと同時に現実味を帯びたものとなった。国鉄民営化の直後で、まさに当社は大海に漂う小舟の様で、先の見通しも立たず、運を天に任せて、亡き父のこれらの言葉を思い起し背水の陣で臨む以外になかったのである。

現在、会社が継続しているのは、御得意様を始め多くの人生の先輩、知人、友人、社員、家族等の暖かい温情と支援のおかげであった事は言うまでもない。決してこれらの方に感謝の念を忘れてはならないと思っている。そして、もう一つ父が常々言っていた言葉が、厳しい状況のもとでは、本当に骨身にしみる助言となったのも忘れられない事である。「無理をして何もかも失う事になったら?」という漠然とした恐怖と闘いながら、しかし会社を継続していかねばならない責任と、会社を発展させたいという希望を胸に抱いて「線路は続くよ、どこまでも」という唱歌の様に、長く銀色に輝くどこまでも継続する会社にしたいものである。



'94年5月、ニューヨークで

大野　隆司　昭和9年11月2日生　北九州市出身・北九州市在住
▽昭和32年3月山口大学経済学部卒業、㈱小糸製作所入社
▽昭和34年4月九州鉄道機器製造㈱入社
▽昭和60年11月大野商事㈱社長就任
▽昭和62年6月九州鉄道機器製造㈱社長就任
〈好きな言葉〉「継続は力なり」

苦しみに克つ

岡本康夫

鍛冶屋の伜に生まれた私は、友達と休みの歩調が合わぬこともあって、一人でよく山に登った。登山は動的には身体を激しく動かし、体力の限界に挑戦することもしばしばあると共に、静的には花や樹木を眺め、新鮮な空気を胸一杯に吸い込み静寂のなかで思索する時を持つ。動と静を併せ持った趣味だと私は思う。

登山は自然のなかで行うもの。厳しさと優しさの両面があり、それなくしては自然とは言えない。人生に於いてもこの二つの面―快く、優しく、楽しい面と、厳しく辛い面を体験することが自然な人間ではないだろうか。片方しかみせぬのは不自然である。

私の場合、始めのうちは山が高くても低くても、その頂上に立つことが喜びであり、その為にのみ登ったといっても過言ではない。それは丁度、草野球のようにプレーの内容より勝つか負けるかが興味の焦点であったように。

「きつい。休もう」「さっき休んだばかりじゃないか。あの尾根まで行こう」「尾根に着いたぞ。腹が減って歩けない」「今、飯を食ったら帰る迄腹がもたんぞ」仕方なく歩く。「もうバテた。テコでも動かんぞ」「頂上迄一時間だ、頑張ろう」

頂上に着いてにぎりめしを食って元気が出た。下りになって又腹が減った。
「降りたらウドン食わせてやる」「俺はテンプラウドンがいい」「それより素ウドン二杯にしよう」
「俺はビールが飲みたい」「そんな銭はないぞ」　自問自答しながら独り歩く。

マラソンを走る人達。勝ち敗けは始めから、あらかたわかっているはず。苛酷とも言える体力の限界に挑戦することが楽しくて走るのだろう。

山歩きも同じこと。休みたい気持ちと頑張る気分。そのうちに「己に克つ」こと。次第に身につけて行くのである。

私が実社会に出初めた頃の忘れられない思い出です。



岡本　康夫　大正11年3月28日生　山口県下関市出身・下関市在住
▽仙台陸軍予備士官学校卒業、ビルマ戦線を転戦▽昭和25年㈱カネヤスを兄と共に創立▽下関山岳会会長、日本山岳協会第一種公認指導員、日本山岳会会員
▽著書＝自伝抄『自燈明』
〈好きな言葉〉「爺（じい）が死ね、親死ね子死ね孫が死ね」

エベレスト・トレッキング

緒方世喜子

夕暮、ローズ色から紫と変化して、急速に光を失ったかと思うと、まばゆいばかりの月と星。台地をとりまく近くの山々は黒いシルエットとなって現れ、エベレスト、アムダブラム、ローツェ、タムセルクなどのヒマラヤの名峰が太古の静けさをとり戻したように照らし出されている。私は一瞬、時の止まるのを感じた。

大自然の中で、人間の営みのなんという小ささ、また人生の短かさを考えさせられた。一九七五年秋、夫と私の小さなパーティのヒマラヤ・トレッキング——。

ネパールの首都カトマンズから小さな飛行機で三千四百米程のぼり、そこでシェルパ一名、ポーター兼コック一名、高山に棲むヤク（毛の長い牛）二頭にテント、食料、寝袋、酸素ボンベを積んでエベレスト・ベースキャンプ近くの山歩きである。

トレッキングの最初はシェルパの家に民宿することになった。家の外壁にはヤクの糞がベタベタと貼りつけられていて、軒下には乾燥してカラカラになった糞が並べられている。ヒマラヤでは大事な燃料ということだった。不思議に不潔感にとらわれないのは、澄み切った空気と青い空のせいだろうか——。

シェルパの家は一階が家畜小屋で二階が住居になっていた。かまどには赤い火が燃え、消えそう

になると、ヤクの糞を二個、三個入れるとパァッと燃えあがる。

夕食がすんだあと、子供達はローソクの灯りで唄を歌いながら家族団らんを楽しんでいる。

窓からは白い神々の座が月光を浴びて白銀色に輝いているのが見える。何という静けさであろうか。ここの子供達は、将来何になりたいかを問うと一様に、「お父さんのように立派で強く、たくましいシェルパになるんだ」という。

陽が昇り、翌朝私達が出発する頃、子供達は登校前で、すでに往復四時間もかけて渓谷からの水汲みを終えていた。

もう二十年も前の話ではあるが、多分ここの暮らしは今でも変わっていないのではと思われる。路傍の石に刻まれているラマの経文、厳しい自然の中で、自然と共に生きる人々、文明という名のもとに自然を破壊して生きる人々。地球環境問題がかまびすしい現代、私の心はエベレストの麓に帰る。



緒方世喜子　昭和6年9月5日生　福島県猪苗代町出身・福岡市在住
▽昭和26年旧制帝国女子専門学校（現相模女子大学）経済科修了
▽婦人新聞記者を経て38年西日本銀行入行、61年取締役就任、平成4年西日本銀行国際財団専務理事
▽著書　『女の忘れもの』『犬曲がり小曲がり』
〈好きな言葉〉「明鏡止水」

憧れの甲子園球場

沖　俊作

「二番、サード沖君」夢にまで見た甲子園球場にアナウンス嬢の美声がこだました。球審に一礼してバッターボックスに入ったものの、心臓の高鳴りは押えようもない。幸いにボテボテの内野安打で一塁ベース上に立った時、ようやくにして心臓の鼓動はおさまった。

それは、昭和五十九年の六月、私が四十六歳の時の出来事であった。

かつて新聞紙上を賑わした阪神球団の元社長である小津正次郎氏（現西宮甲子園ロータリークラブ会員）がコミッショナーとなって、全国ロータリークラブ野球大会なるものが甲子園球場で開催されていることを我がクラブ（兵庫県・南淡ロータリークラブ）の誰かが聞きつけてきた。確か昭和五十八年の暮れのことであった。

早速、野球好きの連中が集まり、ひとつ挑戦してみようではないか、と話はトントン拍子に決まり、即日クラブ内に野球同好会が誕生した。

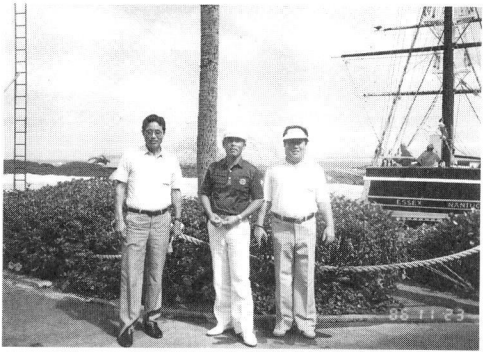
以後約半年、週二回、午後四時から六時の特訓が始まった。監督の指揮命令には絶対服従というのが我がチームの不文律であり、このトシになっても「ハイ」と従うのは、私にとってはある種の快感にさえ思えた。練習後の酒盛りも今では楽しい思い出である。

猛練習の成果があってか、その年初参加にも拘らず参加四十六チームの中、思いもかけず準優勝

することが出来た。更に翌々年の昭和六十一年には全国優勝にも輝き、田舎のクラブがこの道では一躍有名になった。薄氷を踏む接戦、殊に自ら逆転打を放ち勝利を物にした数試合は今も脳裡に深く焼きついている。

冒頭に書いた〝心臓の高鳴り〟、どうもこれは私だけのことではないようである。A君などは初出場の試合前十分間に四～五回も小便に通い、ナインの失笑を買っていたようである。私もその一人であるが、野球経験が多ければ多い程甲子園は血湧き肉躍る舞台のようである。爾来十年余り、引き続き甲子園でプレーをさせて頂いているが、あの時の感激を何時までも忘れずに甲子園を楽しみたいものである。

常に新鮮な気持で、同じ目的に向って、チームワーク良く、しかも互いの技量、持ち味をフルに発揮してこそ大きな成果が生まれる甲子園。フィールドこそ違え、事業もまた然りか。



友人とハワイで（筆者は左端－'86年）

沖　俊作　昭和13年4月10日生　兵庫県南淡町出身・同町及び北九州市在住
▽昭和38年国立和歌山大学経済学部卒、日本オリベッティ入社
▽昭和41年7月小倉冷蔵倉庫（現クラレイ）に入社
▽現在、クラレイ、菅原運送、沖物産、沖冷蔵、淡路協同冷蔵各社長、日本冷蔵倉庫協会評議員
〈好きな言葉〉「正解はひとつに非ず」

父親の死

香川孝志

一九八八年九月十日は前代の校長、藤井敏哉先生の命日です。翌年の一月七日に昭和天皇が逝去されました。「夏たけて　堀の蓮（はちす）の花みつつ　佛の教え　おもう朝かな」昭和天皇の辞世の一句として発表されたものです。

インスタントラーメンが出現したのは一九五八年です。同年の天皇誕生日、四月二十九日は私にとって忘れ難い日です。私の父親の命日です。

私が高校二年生、十七歳のときでした。お寺で生まれ育った私です。人の死は言葉の上ではよく知っていました。しかし、私の意識には「私の家は葬式をする家で、葬式をされる家ではない」の思いがあったようです。朝、一緒に食事をいただいた父が脳溢血で死んだのです。街の映画館でアチャコやエンタツが出演するドタバタ喜劇に笑いこけて、夕方帰宅した私に父の死が知らされました。私にとっては、父の死が、身内の最初の死でした。感情が先走り、親の死が実感としてピンときません。無性に胸が締めつけられ、涙が出てとまりません。本当に、うろたえました。

密葬後、父の遺体を火葬場に運んだときです。私は「遺体をもって帰る」といって、狂ったように泣き叫び、一時間余り、遺体に火をつけさせませんでした。理屈では知っていました。遺体をもって帰っても仕方の無いことを。九歳年上の長兄に叱られ、宥（なだ）められ、父の遺体を火葬にふしたこ

とを今でもはっきりと思い出せます。

私は、幼時期、一番嫌いなものが坊主でした。五人兄弟の末子ですからお寺を継ぐ身ではありません。しかし、この時からです。宗教が私自身の問題として考えられるようになったのは。

逃げることも、避けることも出来ない死の問題を、悲しみ嘆かれている遺族の方々と共に受け止め、宗教家としての法務を坊主の父はつとめていたのです。死んだ父が偉大に思えたものです。父の死は私の人生に確実な指針を与えてくれました。

中国の『礼記』という書物に「身は父母の遺体なり。父母の遺体を行う、あえて敬せざらんや」とあります。火葬にふし、お墓に納められた遺骨は脱殻であり、本当の意味の父の遺体ではない。今ここに現に生きている私のこの身こそが生きている父の遺体だと教えています。仏教の縁起法に通じたものです。合掌し、佛様を拝みながら、私が私自身を大切にして行くことこそ、父の恩恵に報いる道と、忘れ難い父の死を思うことです。



香川　孝志　昭和16年2月2日生　山口県新南陽市出身・北九州市在住
▽昭和38年龍谷大学真宗学科卒業
▽鎮西敬愛学園中学・高等学校々長
〈好きな言葉〉「遠慶宿縁」（遠く宿縁を慶べ）＝親鸞聖人

元横綱栃錦の一語

金子太郎

昭和三十年代の大相撲を盛り上げたのは、栃錦と若の花の二横綱で、今も栃若時代として語り継がれている。

その栃錦は、私と同じ大正十四年生まれだから、彼が現役で活躍している間は、「上司と意見が違って役所を飛び出しても、まだ土方をすれば食っていける」と思っていた。だから今から思えば、職場で随分言いにくいことをズケズケ言ったものだ。それで飛ばされることも無かったように思うから、若い頃勤めた大蔵省という役所も、ちょっとしたところであった。

ところが栃錦が「体力の限界を感じて引退する」と聞いた時は、何やら淋しい感じがして「俺もあまり我儘(わがまま)を言わない方がいいのかな」などと考えたことが、昨日のことのように思い出される。

その栃錦が引退して春日野親方になり、ついで相撲協会の理事長になった時、一夕、親方を囲んで懇談する機会をえた。

そういう得難いチャンスに恵まれた時、私は必ず日頃から質問したいと思っていることを遠慮なく訊(き)くことにしている。私は早速切り出した。

「親方、貴の花（現花籠親方）は、背中に叩かれた青いアザが消えませんね。天下の大関を、何も青竹で叩かなくてもいいのではありませんか。花籠部屋の荒稽古は有名ですけれど……」

それを聞いた春日野親方は、それまでの柔和な表情を、一瞬キッと厳しく変えて「それは違います。力士を鍛えるのに、例えば足が流れて投げを食らった時、起き上がってきたのをつかまえて『今はお前の左足が流れたから、上手投げをかまされたんだよ』と注意しても、利き目は全然ありませんよ。左足が流れた瞬間に、青竹でビシッと叩いてやらないと駄目なんです」

私は一瞬目からウロコの落ちる気持ちがした。それ以来、部下の躾に当たっては、ミスをした都度、厳しく注意するようにしている。少なくともこれから伸びると思われる若者には、ミスをしたらその場で叱るのが、本人の成長のためにも最も有効なことが分かった。

相撲協会が経営・資産の両面で今日あるをえたのは、歴代の理事長の経営方針が優れているからだ。その秘密についても春日野親方は「経営のことは何も分からないから、財界後援者のご指南どおりにやっているだけ」と謙虚であった。



金子　太郎　大正14年8月30日生　中国青島福山路出身・東京都目黒区在住
▽昭和24年東京大学法学部卒、大蔵省入省、55年環境庁事務次官
▽昭和56年丸三証券社長、平成2年同会長
〈好きな言葉〉「虚心担懐」

ペニシリンと長井先生

栗岡博良

六十年近くの人生を振り返ると、それこそ数え切れない程の思い出が浮かんでくる。その中でも特に忘れ難いのは、やはり今日の私を形作る原点ともなった子供の頃の思い出である。

それは大阪市東成区の片江小学校五年生の時の出来事だった。小学校の建物は戦争中碌な手入れもされず、ボロボロになっていた。そんな校舎で、私は運悪く錆びた釘が飛び出しているのに気付かず、足の裏にそれを突き刺してしまったのである。

私は骨髄炎を起し、それはひどい痛みを伴って眠れぬ夜が続いた。そんな苦しみの中、近くの外科医、長井先生が炎症を治すため、始めて何万単位もの多量のペニシリンを使用されたのである。

しかし一向に痛みはとれず、ついに大阪の日赤病院で外科手術を行うという事になった。入院の前日には、日赤病院の看護婦さんが私の枕元に針金で作った副木と多量の包帯を置いていった。

いよいよ入院の当日、奇跡とも思えることが起きた。ペニシリンの効果がドラマチックに現れたのだ。苦しい痛みは嘘のようにひいていった。

家族共々長井先生が大変に喜ばれたのは勿論である。片足を失うとか、足の発育がおかしくなるといったこともなく、今日五体満足でいられるのも、一九二九年に青かびからペニシリンを発見したフレミング先生のお陰である。ペニシリンはそれまでの医療を一変させた。そんなことがあって、

長井先生との間に親密な信頼関係が生まれた。

同じ五年生に関東の方から転校してきた河野君がいた。彼は脊髄カリエスを患っていた。たまたま長井先生がカリエスの専門医であったことから、私は彼を先生のところに連れていったのである。彼は即入院して治療に専念することになった。脊中の形をした石膏で作られた舟のような脊中当ての中に体を入れて寝たり、皮のベルトで作られた首巻きで懸垂し、脊髄を伸ばしていた情景が今でも目に浮ぶ。随分河野君の病室に見舞いに行ったように思う。

自らが画期的治療薬のペニシリンに救われ、また、子供ごころに長井先生の献身的な医療の姿勢、医師の世界を覗いていたことが、私の人生の原点になったのではなかろうかと思っている。生来、人様のお世話をしたり、お手伝いをすることの好きな性格と思うが、これからも自らの持ち味を生かし少しでも社会に貢献できればと思っている。



栗岡　博良　昭和12年7月15日生　大阪市出身・奈良県生駒市在住
▽昭和41年大阪歯科大学大学院卒、歯学博士
▽昭和42年医療法人和幸会阪奈サナトリウムを四条畷市に設立、53年阪奈中央病院設立、同年8月医療法人理事長、58年学校法人栗岡学園副理事長、同年社会福祉法人幸友会理事長
〈好きな言葉〉「和顔愛語」

知・情・意

河野嶺雄

私が浄土真宗本願寺派・金剛寺の住職に就任したのは昭和五十三年のことです。自坊の歴史を辿りますと、太平洋戦争末期の昭和二十年七月二十七日、米軍の空襲で本堂や付属建物が被災し焼失してしまったのです。しかし、市街地の戦災復興も未だ完全でない昭和二十九年、門信徒の皆さんの大変なご尽力によって、早くも本堂の再建ができておりました。そのことを仏祖のお陰と喜んでおりました前住職も平成元年に還浄いたしました。

私が住職を引き継いで十七年。戦後も五十年を経過し、この間社会も大きく変わりました。私共も、この時代の変化に対応し、門信徒の方々の利便性、ニーズにお応えするために本格的な本堂、庫裡を造営しなければということになりました。長い日時をかけて総代、門信徒の皆さんと研究、協議を重ねて建築に着工しましたが、お陰様で立派な建物が完成、平成六年五月五日に無事落成慶讃法要を営むことができたのです。

このことは恐らく、私にとって生涯忘れることのできない大切な思い出となることでしょう。

ところで、この一大事業を終え、振り返ってみますと、ふと今日の私を形作ってくれた父のことを思い出すのです。父はお浄土に還っておりますが、仏さまのように円満な人でした。よく申しておりましたのは、知・情・意の三つのことでした。

そういえば文豪夏目漱石は『草枕』の冒頭にこう書いております。「山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい」と。円満な人格の涵養に欠くことのできない知性、感情、意思の大切さを、ひと言で「知情意」と表現されております。漱石も言うように、この世はなにかと苦しいこと、嫌なことも多く住み辛いかもしれません。でも、難しい世の中を明るく住みやすくするためにも、人々が知識や感情や意思をよりよく、そして高度に育んでいくことが肝要と思います。父は「仏さまにお仕えする身には特にこのことが大事と心得よ」と子供の頃の私に教えてくれたのだと思います。

戦後半世紀を経た今日、人の幸せは物やお金ではなくて、心のあり方ではないのかと問い直す機運が高まってきたように思えます。そのためか、最近、宗教書や哲学書が若い方々にもよく読まれるようになったと聞きます。私も今改めて子供の頃に父が教えた言葉を思い起しております。



河野　嶺雄　昭和16年12月12日生　山口県萩市出身・山口県徳山市在住
▽昭和39年龍谷大学文学部真宗学科卒
▽浄土真宗本願寺派　金剛寺住職
〈好きな言葉〉「糸が強けれゃ強くて切れる、糸が弱けれゃ弱くて鳴らぬ、緩急正しく調子を合わせ、手振り足振りリズムで躍れ」

平成元年という年

是則宗興

道なかに　咲くやこの花
　花にだに　縁（えにし）なくしてわれ逢ふべしや

たしか金田一京助先生の歌だったと思う。道端に咲く一輪の花との出会いが実に感動的である。人との出会いは正にそれ以上であろう。

私が昭和四十八年宮司に就任して二年後、池田泉氏を氏子会長にお迎えすることができた。「私も丁度還暦、少しでも皆様のお役に立てば」とのおことばだった。その頃私は、昭和六十四年に迎える御鎮座千百年祭が一生の仕事と考え、実現できそうもない絵を描き続けていた。

会長がよくお詣りされる一畑薬師さんが戸上神社とほぼ同じ時期に千百年を迎えるということで御紹介いただいた原稿を参考に、事業目標として大きく「神社の環境整備」「施設設備の充実」と二つの柱を立て、社頭に早々と看板を立てることから始まった。

会長を中心に氏子会の和が大きく拡がり、さらに千百年記念事業奉賛会が結成され、募金活動も軌道に乗り展望が開けたとき、改めて池田会長の人徳の偉大さに驚嘆した。「絵が出来たら完成したのと同じだよ」と、いつも会長はさり気無く言われた。

目標の昭和六十四年も瞬く間にやって来たが、一月七日昭和天皇の崩御、御代も平成と改まりそ

の元年が奇しくも戸上神社御鎮座千百年に当たる忘れられない年となったのである。

一年間の諒闇も明けて、待望の千百年記念事業も着々と進行、境内整備・新社務所・職舎の竣工と、私の描いた絵が次々と現実に成って行った。

平成四年十一月記念事業落成、平成六年十一月池田会長を団長に二百名近い伊勢神宮記念参拝旅行団を結成、第六十一回式年遷宮を了え新装成った神宮参拝も済ませ一段落したのも束の間、明けて平成七年四月十日思い掛けず会長は卒然と逝ってしまわれた。

今、社務所から整然たる神社の佇(たたずま)いを眺めながら慌ただしく過ぎ去ったこの二十年間を思い、若し池田会長との出会いがなかったなら、これ程の記念事業はとても成し得なかったろうと会長の大きなお姿をしみじみと思い浮かべている。

私も今年は還暦、恵まれた人との出会いに感謝し、世の為人の為に、と思うこの頃である。



是則　宗興　昭和11年3月20日生　北九州市出身・北九州市在住
▽昭和33年國學院大学文学部卒、高等学校教諭を経て48年戸上神社宮司
〈好きな言葉〉「人生意気に感ず」

古く懐かしい日々

後藤達太

戦後五十年、人それぞれに思いは多いに違いないが、大正ロマンティシズムと言われる時代に生まれた私達の青春時代の追想が、いずれのも戦争の色濃いものとなるのは当然であろう。

戦局の悪化とともに急速に厳しさを増してゆく物資の欠乏と、軍隊生活経験者はもちろん、全国民に加えられた精神的弾圧の下で、またそういう時代であっただけに一層私達はファッショによる非條理な暴力の横行を憎みながら、家族や社会、そして美しい山河と厚い情誼に結ばれ、優れた独自の文化を生み出した民族の祖国を何としても護らねばという使命感によって、それまで以上に互いに強く結ばれていたことを思い出す。死を賭しても護らなければならない懐かしい祖国の姿が我々一人一人の胸の中に描かれていたのである。

戦後五十年、わが国の経済は、かって世界に例を見なかった程の急速度の発展成長を遂げ、経済大国を僭称するまでになった。しかし、冷戦終結後の世界の新秩序形成のリーダーとして担うべき役割について周囲の国々からその抱負を求められたとき、自信をもって世界に披瀝すべき抱負の用意がまだ政府になかったことは残念でならない。責任を忘却した自由ばかりが声高に主張され、物的な豊かさが怠惰をうみ、理想を高揚すべき精神はなお発育不全のままである。さきの戦争について多くの点で事実が確認されていないにも拘らず、侵略者は常に日本であり、戦地の残虐行為は

すべて日本人の将兵の仕業であるときめつけ、いわゆる戦勝国の国際法違反行為には、一言も触れ得ないトーンの、いわゆるわが国の進歩的文化人達の自虐的ともいうべき日本批判が、戦後五十年経った今日でもなお、ことあるごとに映像や紙面の大半を占領する状況下では、政府の姿勢も弱腰にならざるを得ないのかもしれない。しかし、このような状況が続くならば、若い次の世代に日本国民としてのプライドを求めるのはいよいよ無理なことになって了うだろう。

戦時体制下では、一部のファッショの横暴に屈していた庶民も、平和と民主社会の再来によって新しい活力の芽をふき、戦後経済の目覚ましい復興発展をなし遂げたが、わが民族の忍耐強い勤勉さはいつか経済のみならず、精神文化の再生を果たすに違いないと信じたい。そしてその原動力となるのは、新旧いずれの世代にとっても、いくつになっても忘れ得ぬ、古き良き時代を創ったわが国の歴史と風土であることは間違いない。



後藤　達太　大正12年10月7日生　東京都出身・福岡市在住
▽昭和22年東京帝国大学法学部卒業、大蔵省入省、50年関税局長、51年銀行局長
▽昭和54年日本航空常務取締役、59年専務取締役
▽昭和63年西日本銀行取締役頭取、平成7年同会長、現在に至る
〈好きな言葉〉「心に太陽を持て、唇に歌を持て」

教師の責任

酒井　清

現在八十五歳の私には、忘れ難いことも数えきれないほどあります。その中で、社会的な事件としては、新聞に出たとしても片隅に二、三行書かれる小さな出来事でありながら、六十年に及ぶ私の教職の生活に強烈な質的変化を与えた事件がありました。

昭和五年の初秋、山口県熊毛郡の中心的な平生町。その町の習成小学校五年生の男子学級の担任が私でした。その年の春師範学校を卒業し、五ヵ月の軍隊生活を終わり、九月一日赴任したばかりの、ほやほやの新任教師。二十歳でした。

ある朝出勤すると、すぐ教頭に呼ばれ校長室へ伴われたと思います。そこで「君の受け持ちのM君が亡くなったのでお悔やみに行くように」といわれ、突然のことに吃驚しました。しかし、そのときには、特定して、M君の死を驚いたのでなくて、担任の一児童の急死にショックを受けたのです。後で思えば、五十数名の児童の中で、M君はI君に次いで背の高い子で、I君より胴回りの大きい温厚な性質の人柄と見ていたのでしたが、M君のイメージは、死を聞いた瞬間には浮んできませんでした。ということは、就任一ヵ月くらいでは、まだ全児童を知り、把握するだけの能力と、職務への熱意や努力が不足だったということです。

間もなく朝日新聞だったか、新聞記者、警官、後には県から視学でしょうか、校長室に来て、何

か物物しい取り調べがあり、私も呼ばれていろいろ聞かれました。というのはM君の死は病死でなくて、一父兄の暴力が原因だったからです。

私はおだやかな子と見ていたM君でしたが、彼がある日一年か二年下級の子どもをいじめたらしいのです。その子は家に帰って父に告げた。それを聞いて怒った父親が翌日学校の昼休みに押しかけて、砂場でM君に撲る蹴るの暴力を振るった。他の子どもは取り巻いて見ていたらしいが、誰も先生には知らせなかった。M君は帰って寝込み、翌日休んだが、遂に内臓破裂か何かで死去した。

M君に暴行した父親はもちろん警察に逮捕されたが、問題は真昼間の暴行を知らなかった学校の責任である。担任の私は暴行の現場を知らず、欠席者に見舞いも調査もしていない。また、休憩時のグラウンドを見廻る責任のある週番の教師二人とも（一人は私）暴行を見ていない。この重大な学校、特に担任の過失責任を校長が負われた。しかし、この事件は、私の人生観を震撼するものでありました。



酒井　清　明治43年8月11日生　山口県光市出身・東京都世田谷区在住
▽山口師範・広島高師・広島文理大（心理学）卒▽小学校教諭、校長。鹿児島青年師範、鹿児島大学教授。東京都教育研究所員。明星大学教授（昭和61年退職、名誉教授）

いじめで強くなる

佐藤啓一

父の転勤で転校して間もなくの小学校六年生の算数の時間、私を含む三人が地球にかかわる大きな数字の計算を黒板でしていました。結果は私以外の二人が正解ということになりました。自席に戻った私は、どうしても納得がいかずやり直しをしてみたところ、答えが同じでしたので「先程の問題をもう一度やってみてください。私の答の方があっていると思います」と先生に頼みました。「そうか」と先生は黒板で自ら計算をした上で「そうだな、悪かった」と言ってくれました。

それからが実は大変でした。一緒に計算した生徒の中に勉強のできる、クラスのアイドル的存在だったS君がいたことが、私にとってはまことに不幸だったということが後で分かりました。連帯感を強く持っている故郷のアイドルを傷つけることはもってのほかなのです。それ以後、私が班長をしていた掃除当番グループは誰一人掃除をしません。教室でただ一人掃除をしている私に先生は「班長は人を使うのが仕事だ」と批判します。頭にきた私は、体育館で遊んでいる仲間を一人々々えり首をつかんで教室に引きずりこみ、強制的に掃除をさせました。この反動は当然のことながらすぐ現れました。家に帰ろうとした私を待ち伏せしたほぼクラス全員が荒縄をつなぎ合わせて私を取り囲み口々にはやし立てるのです。N君などは五寸釘で私のランドセルに穴をあけようとします。とにかくその場は振り切って家に帰ったものの憤懣押さえ切れず、彼の家に押しかけて母親に息子

の所業をなじりました。

今、一連の「いじめ」報道を見聞きしながら、形の上では似ていても、当時私にはそういう意識は殆んどなかったと思います。よそ者がしてはいけないこと、配慮すべきことをしなかった反省があったのかも知れません。自分の行為が原因と考えただけに先生に相談することもできず、両親にも報告せず、N君の家に行ったのも私の独断でした。「転校」が私の精神面を強くしてくれたのです。小学校一年の一学期から三年、六年、そして高一の三学期に転校し、その年の二年の生徒会選挙で会長になるなど、子どもの頃から見知らぬ地での新しい人間関係構築で鍛えられ、教えられ、助けられて今日の私があるのだと感謝しています。

生まれてから墓場まで故郷の連帯を持つ人々をうらやましく思いつつも、転校と転勤で得た私の唯一最大の財産「人間関係」のお陰で、今や滞在二十五年となった九州に故郷の連帯を感じています。



佐藤　啓一　昭和8年4月11日生　北海道函館市生れ・福岡市在住
▽昭和32年法政大学経済学部卒、NHKにアナウンサーとして入社、平成元年～7年NHK福岡文化センター次長
▽平成7年4月から飯塚市文化会館（コスモスコモン）館長
〈好きな言葉〉「生きている限りは青春」

父と私の北極星

四島　司

さて、「大切な忘れない言葉」と考えると、はたと困ってしまう。私は欲ばりだから、本を読んだり話を聞いたりして、気持ちにぴったりの言葉を見つけると、すぐに胸のポケットにいれてしまうからだ。

今日の私は昨日の私ではないし、世界も日々刻々に激変している。真理は変わらないだろうが、私は〝動〟の世界が好きだから、自分の内の細胞が躍り出すようなみずみずしい言葉を発見すると、ついいただいて身につけてしまう。

しかし、そうは言っても、それらを総括した自家製の根っこのようなものがあって、私の思い入れになっている。

それが「北極星を胸に」で、毎春の入行式で十年一日のように話している。と言って、日常で顔をあわしている支店長たちに説法している訳ではない。

なにか、炎のようなものを追っているひたむきな事業家の人たちにエールをおくりたいことは、彼らが十分に承知しているだろうから、私の風を自分なりの言葉に翻訳して受けとめてくれればいいのだ。

少々酒がはいってくだけたときに、A君が私をきっと見て、「私は頭取の顔を見ていない。私は

あなたの志につき合っている」と言った。酒のたすけはあっただろうが、その昂(たかぶ)りがまぶしかった。「北極星か、もう少し若ければ」と冷やかす悪友もいる。しかし、私は志に定年はないと思っているから、多分死ぬまで、この言葉を胸に温めつゞけていくだろうと思う。

年来、孫の可愛さはひとしおだが、同じ遺伝子によって、私に流れている志の、明日への伝承を期待しているからではあるまいか。

身辺のことで恐縮だが、父は生前に風変わりな大きな墓をつくり、墓碑銘のかわりに碑の正面に「祖先に対する最上の祭りは、道を守り業を励むにあり」と刻んだ。

気持ちを託した遺伝子が呆けてしまわないように、生前さんざん親不孝を重ねた私に、烈々の言葉を残したのだろう。親父流儀の「北極星」で、これがいちばん忘れられない言葉だなと思いながら、彼岸にはお墓参りで、頭をコツンと叩かれてこよう。



四島　司　大正14年1月1日生　福岡市出身・福岡市在住
▽昭和24年慶応義塾大学経済学部卒、26年福岡相互銀行入行、44年同行社長、平成元年より福岡シティ銀行頭取
▽昭和56年～平成元年全国相互銀行協会会長、昭和48年～平成元年福岡商工会議所副会頭▽在福岡イタリア共和国名誉領事、慶応義塾評議員
▽毎日新聞第六回経済人賞受賞

先　生

宗　勝憲

昭和三十三、四年頃、小倉市（現北九州市）は今と比べると結構豪雪で大いに雪に親しみ、雪に悩んだ日が思い出されます。

当時、私は高校受験の為福岡学芸大学附属小倉中学校で大好きな野球もやめて地元の小倉高校、東京の慶応義塾高等学校、早稲田学院を目指しており、なんとか慶応義塾高等学校に入学する事が出来ました。東京もその頃は長靴が必要な位積雪量が多く、その様な中で日吉に高校、大学と通う第一歩を踏み出しました。

塾高は男子高校で、その附属の中等部、普通部から進学する者と地方から進学してきた者とで構成されているのですが、何故か、雰囲気は私が今迄学んできた環境と比べてまったく異なったものでした。学内の掲示板には、しょっちゅう停退学の氏名が貼り出され、自由闊達の割には大変厳しいところがありました。

塾高一年生の時、私は言葉遣いを小倉弁から東京弁に、髪も丸坊主から長髪に、靴もズックから皮靴にして毎日、新鮮な空気を一杯吸い込んでいた感じでした。そういった中で英語の授業の時でした。

教師（女性、名前を忘れすみません）から私にこの文章を読みなさいと指され「はい、先生」と

答えて立ち上がった時、その教師から注意を受けました。

「先生」という人はこの学校には居りません。自分は貴方達よりも知識を多く持っているから教えているのであって当り前の事をしているのです。「先生」と呼ばれる立場に無く、居るとすれば「福沢諭吉先生」だけです。これからは、自分に対して「さん」でいいのですよ、と教わりました。この言葉に私は今迄なにを教わってきたのだろうか、頭をガッツンと撲られた様なショックを覚えました。これが「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」の事なのかと。

以来、私は実社会に入っても肩書の呼称でなく「さん」で言わして頂く事が多く、肩書で言う際、何故か、私はモゴモゴと言う状態が今も続いております。

年の上下、役職の上下は「人」の前では常に平等でなければ、と思っており、国会議員の方々がお互いに「先生」と呼び合っておられますが、「先生」の意味も多岐に亘って使われているのだなぁと思っている次第です。



宗　勝憲　昭和15年6月7日生　北九州市出身・北九州市在住
▽昭和38年慶応義塾大学商学部卒、住友金属工業㈱入社、同社小倉製鉄所副所長を経て
▽平成6年㈱ケーブルステーション北九州代表取締役社長就任、同年㈳北九州中小企業経営者協会副会長就任、現在に至る
〈好きな言葉〉「頑張れ！頑張れ！」

石田武雄先生との出会い

高城寿雄

私が未だ二十一歳で東京都大井職業訓練所のラジオ、テレビ科で勉強中のことでした。

当時、私の母は門司鉄道教習所に勤めておりました。母の同僚が東京にある国鉄能率管理研究所に転勤となり、私もその方を良く知っていた関係で時々遊びに家に伺っておりました。

ある日その方から、うちの所長宅の冷蔵庫が故障し捨てると言っているので、一度修理が可能か否かその冷蔵庫を見てきて欲しいと言われ、所長宅を訪問しました。

そこで紹介されたのが石田先生でした。石田先生は私に「修理出来ますか」と尋ねられた。私は「やるだけやってみます」と答え、八十キロの重さの冷蔵庫を単車に積んで品川の下宿に持って帰りました。しかし私は、冷蔵庫等を修理した事は無く、数日間考えた末、下宿の近くに老人が一人でやっている冷蔵庫の修理屋があったので、そこで修理の仕方を教えてもらおうと腹を決めました。

当時、電気冷蔵庫は一般家庭には未だ無く、その老人は熱海や箱根にある旅館や別荘の外国製の冷蔵庫の修理を専門にしていた様でした。

老人の飯の種である修理技術を教えてほしいという申込みがそう簡単に受け入れられるハズがなく、当然のことながら断られました。しかしながらあきらめることなく毎日頼みに行っていたある日、老人が留守で十坪ほどの仕事場には一センチぐらい埃（ほこり）が溜っているのに気がつき、それから

毎日行っては一時間ぐらいかけて掃除をしたところ、一ヵ月後には仕事場はピカピカとなりました。

ある日老人は突然「よし教えてやる。もってこい」と言ってくれました。それから二人で一週間程かけて焼けたモーターの巻線換、真空引、ガス入れ等を行ない修理は完了しました。

石田先生は修理の成功を大変喜んで下さり、それ以後何かと相談に乗って頂きました。ある時、私が会社を設立することになり、先生に出資をお願いしたところ「了解した。君に出資するのだから何に使っても良いが、共同経営だけはダメですよ」とのことでした。この〝一言〟はその後数度に亘る会社の危機において、経営権が私一人にあったためかろうじて破産を免れたことを思うと、石田先生の偉大さをあらためて感じました。

石田先生はその後青山学院に移られ、十二年後に学長になられました。そして今も健在で当社の監査役をお願いしております。



髙城　寿雄　昭和13年3月27日生　北九州市出身・北九州市在住
▽１９９５年立教大学法学部卒業
▽１９６１年北九州市において髙城精機を創立
▽１９７９年㈱タカギを設立、代表取締役となり現在に至る
〈好きな言葉〉「我、事において後悔せず」

パートのおばさんこそ特別焼香

高藤昌和

生前、権力嫌いだった父が折りにふれ、「葬儀で特別焼香というのがあるが、あれはなんだ。どんな基準で特別焼香者を決めるのか？」「時間給の仕事を休み、自分の収入を減らして線香を上げに来たパートのおばさんこそ特別焼香ではないのか――お前は葬儀に参加して給料を差し引かれるか？」と言ったものです。

「肩書社会」「名刺社会」ではあるが、肩書や名刺にまどわされるな。肩書はなくても、世の中には素晴らしい人がたくさんいる。学者、芸術家、医師、政治家など「先生」と呼ばれる人からサラリーマン、役人など、人は職業や社会的地位以前に一人の人間であることが大事で、裸の人間としての尊さ、価値を忘れるな――という戒めです。たしかに故人を哀悼し安らかな眠りを祈る惜別の心を職業や社会的地位でランクづけするのもおかしなことだし、人間ホトケになっても、〝肩書社会〟にがんじがらめというのも気の毒なことです。西郷南洲が好きだった父らしく、葬儀を引き合いに肩書主義をたしなめたのでしょうが、昨年七回忌を終えてなお時折り思い出しています。

自分の生命（いのち）を予感していたのでしょうか、旅立つ半年前にはこんなこともありました。

あまり過去のことをふり返らない父が、その時は自分の人生を総括するように「自分は貧しい家に生まれたお陰でいい人生を送ることができた。自分の思い通りにやりたいことはすべてやった」

と満足した面持ちでした。名もない貧しい家に生まれたから家格にも資産にも縛られず、自分の思いのまま全力を尽くすことができ、貧しいが故に見えたものがたくさんあったのでしょう。

そう自分の人生をふり返ったあと、「お前が社長を辞める時は相談せず自ら決断せよ」と教えました。そこで「いつ決断するのか」と問うと「お金に執着する時――お金を溜めたくなった時には社長を退け。その時お前は経営に自信を失っているのだ」「ライオンがいつでも餌を捕らえられる時は餌を蓄えなくていい。餌を蓄えるのは体力、気力が衰えて獲物を捕らえられなくなった証拠である。獲物を狙うことから逃げだしたその時は社長の資格を失った時である」と語りました。

日露戦争が始まった明治三十七年に生まれ、高等小学校を出て釜山の建築会社に弟子入りし、兵役が終わって復職後本格的建築家を志し早稲田大学附属工手学校で苦学して二十八歳で独立。敗戦により四十一歳ですべてを失って門司に引き揚げ、再起に奮闘した父ならではの片言。不肖の私にとっては至言と思っています。



髙藤　昌和　昭和8年7月3日生　大阪市出身・北九州市在住
▽昭和31年立命館大学経済学部卒、日本通運㈱門司港支店入社
▽昭和33年髙藤建設㈱入社、取締役総務部長、専務取締役を経て54年代表取締役、現在に至る
▽昭和63年福岡県建設業協会常任理事、同北九州支部長
〈好きな言葉〉「人生は成功か失敗かではない」

思い出の旅

田中丸　善昌

「田中丸コレクションの個展を開いてもらえないだろうか」――メトロポリタン美術館から文化庁を通じて依頼があったのは十九年前のある日のことでした。当初、母が大反対いたしまして、「日本ならともかく、海外なんて」と。九州古陶磁器のコレクションは、仕事一筋だった父（故・善八）の唯一の趣味でしたから「何かあったら」と心配でたまらなかったものと思います。最終的には「父の七回忌の最高の供養にもなるから」と母も納得いたしました。

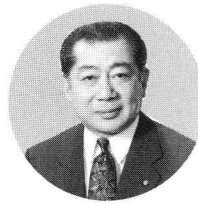
さて、実は私の方こそ凄く不安でした。陶磁器の歴史もわび・さびも知らない人たちが興味を示し受け入れてくれるだろうか……と。ところが、嬉しい事にふたを開けると大盛況で、コレクターの息子ということですごく詳しいと思われたのか、多くの人につかまっては説明を求められ、困り果てました。

生前、父は息子二人に一生懸命古陶磁のレクチャーをしてくれたものですが、不肖の息子たちで…。兄（福岡玉屋社長の善司）と二人で質問と言えば「いくらぐらいで売れるの?」でしたから。最後には父も「もう、よかよか」。案の定、メトロポリタンでは何を聞かれても I don't know ――後悔先に立たず、でした。

メトロポリタンでの五日間の旅は、私に大変大きな影響を与えました。「日本の美術品が世界的

に市民権を得ている」――情報としては知っていましたが、現地で感じた感動は大変大きなものでした。「デザイン」「カラーコーディネート」等々、アメリカの人たちは、ただ目の前にあるものを純粋に美しいと感じとってくれている。ありふれた言い方ですが、外から見て改めて日本の良さを実感し、ああ、日本人って昔から美的感覚に優れ感性豊かな人が多かったんだなぁ、と誇りすら覚えたものです。

経営の姿勢や人生の考え方も、この旅をきっかけに少しずつ変わってきた気がします。たとえば、三年前の私の店の改装では、大理石にシャンデリアという案もあったが、ぜひ木の床でいきたかったのです。古いものは、古い人が好き――そうじゃなくても、古いものを新しい切り口でとらえると、新しいトレンドが生まれるんじゃぁないか。これが、あの時に得た私の確信なのです。そうそう、古陶磁器についても、今なら少しは説明できるようになりました。



田中丸　善昌　昭和17年11月13日生　佐賀県牛津町出身・北九州市在住
▽昭和30年㈱福岡玉屋入社▽昭和33年㈱小倉玉屋へ転じ、53年代表取締役社長就任
▽㈳小倉法人会会長、㈳九州北部小型船舶安全協会会長、九州ニュービジネス協議会副会長、北九州文化連盟副会長、日本百貨店協会評議員

一瞬の恐怖

鶴原六郎

昭和三十一年、私は旧門司市の消防団長を拝命し、その後三十八年二月の北九州五市合併後も引き続き北九州市門司消防団長として爾来二十三年にわたってその職にあった。

その間、今思い出しても、ゾッとして冷汗が出そうな忘れたくとも忘れられない事件に出合ったことがある。その事件は昭和五十年頃であったと記憶している。

冬の一日、その日は特に寒かった。私は消防署の二階にある消防団本部へ出掛けた。早く部屋で暖まりたかった。ところが、いつもは部屋に居る事務員のH君の姿が見えず部屋はからっぽ。多分外出したのだろうと思ったが、無人の部屋は火の気が全くなく深々と冷え切っていた。

冷たい手をこすりながら暖をとろうとして、私はマッチを取り出し、ストーブに点火した。その途端である。「アッ」と驚く暇もなく、そのストーブは火だるまになって燃えあがったのである。炎は天井にとどく程に高くあがった。

突然の出来事に一瞬頭がボーッとなり、全身の血の気が引く思いであった。

真赤な炎があるのに、それこそ目の前はまっくらになる。次の瞬間、ハッと気を取り直すと部屋の隅に設置している赤い消火器が目に入った。夢中でその赤い筒を抱えこんでバルブを握った。筒先からは消火剤が鞭のように威勢よく噴出した。それからである。やっと落ち着きを取り戻し平素か

ら指導し実施していた通りに火炎の裾の方から掃くようにホースを向けると、凄まじい炎がみるみるうちに消えていった。辺りは消火剤がたちこめ白雲もうもうたる状況。ホッとしたその時、天井の火災報知器が突然けたたましい響きをたてて署内に鳴りわたった。「ソレ一大事」と署内の十数名のヘルメット姿の署員が消火器を抱えて駆け上がってきた。前後の状況から考えると、発火、消火、そして署員が駆けつけるまでほんの短時間だったと思う。その短時間の顛末の後私は腰が抜けて床にへたりこんでいた。

調査すると、事務員が灯油を注入したが、古いストーブのためか、うまくいかず、油がこぼれたまま外出し、それとも知らない私が点火したのであった。もしも、あの時消防署から火事を出していたらどんな厳しい批判をあび、また近隣にどれ程迷惑を及ぼしたことか。二十数年たった今でも思い出すと命が縮む思いがする。



鶴原　六郎　明治41年4月29日生　滋賀県彦根市出身・北九州市在住
▽昭和6年彦根高等商業学校卒
▽昭和57年鶴原消防設備㈱会長、平成6年鶴原吉井㈱相談役
▽㈶北九州ＹＭＣＡ理事長、㈻下関梅光女学院監事、社会福祉法人いずみの園九州後援会会長

祖母のひと言

鶴丸大輔

昭和二十年暮れ、北海道、帯広の山中より復員した。列車の窓から見る国土は廃墟と化していた。広島を通過する時、今世紀いっぱい草木も生えないと聞かされたが、山手は緑が美しい。それにひきかえ、広島の市街は瓦礫と化し、僅かながらも裸木の間に緑の草木が萌え出ていた。救われた気持ちと、これから帰ってゆく故郷のことが気にかかる。

「国破れて山河あり　城春にして草木深し」の感慨が胸に湧いてくる。

生命ありて帰り来にけりふるさとの
　駅ちかくしてあけぼのの色（昭和二十二年　詠進歌より）

駅から蓮根畠を通り、家が近づくと連絡もしていないのに祖母が家の前に立っていた。

私は二歳で母を亡くし、祖母の手一つで育てられた。こみあげてくる帰り着いた安堵感と祖母のよろこぶ姿に心はなごんだ。本当に帰って来た実感がわいて来た。「よう帰ってきた。腹いっぱい飯を食べろ」。この祖母が改まって、「お前の父親は死んだ。あとはお前がしっかり継いで会社をもり上げてくれ」。

この祖母の一言は、私の一生を決めた。

亡父と祖母から引き継いだ事業である。「絶対につぶしてはならない」。そう志を立てた時私は二十

七歳だった。

しかし、道は決して平坦ではなかった。戦時中に喪失してしまった船舶群の再建に苦労しながら、戦後復興のエネルギー源であった石炭の輸送に超多忙の日々が続いた。だが、やがてエネルギー革命の時代がやってくる。昭和三十年代に入ると、これまで日本の産業を支えてきた石炭産業の斜陽化が始まった。会社は大不況に直面、厳しい経営の場に立たされることになった。岸壁には石炭専用船、機帆船、鋼船三十隻が活動の場を失って係留されたままの姿をさらしていた。

私は「つぶしてなるものか！」と、自ら立てた志を胸に、セメント、鋼材、木材、機械、プラントと、脱石炭の道を求めて必死に頑張り続けた。

長期にわたったストライキ、あるいはエネルギー革命と、いろんな厳しい経営に遭遇しながらいつの間にか五十年。片時も忘れることのない祖母の一言が支えてくれた半世紀である。



鶴丸　大輔　大正7年9月11日生　佐賀県久保田町出身・北九州市在住
▽昭和17年9月日本大学法学部政経学科卒
▽昭和19年11月鶴丸海運㈱社長（現会長）、鶴丸航空観光㈱外七社経営▽日本船主協会九州地区船主会議長他海事・青少年育成団体役員を歴任、藍綬褒章受賞
〈好きな言葉〉「行動も思考も反復こそが力である」

「地球社会」への出発

寺島京子

十数時間の飛行の後にトロント空港に降り立つと、夕暮れの太陽がギラギラとまぶしい。思い立って、その日の夕方をオンタリオ湖の散策で楽しむことにしました。湖は豊かな水を満面に湛え、遥かかなたに水平線を成して地球の丸さを浮き彫りにしています。水辺は涼を楽しむ多くの人々で賑わっていました。そこではフランス語や英語、イタリア語やスペイン語、中国語に韓国語、そして聞き取ることのできない多くのことばが話されていました。民族衣装もあでやかに映えていました。コスモポリタン、トロントはいつの間にか「小さな村」の地球社会へと変貌していたのです。

このような光景を目前にして、私はふとチェコのハベル大統領の講演を心に浮かべていました。一九九四年、米国独立記念式典に招かれた大統領は、その演説の中で、独立以上に諸国民の相互依存の必要性を訴えていたのです。そして、多様な民族と文化や相対する宗教が共存できる社会を実現するために、地球規模の意識に生きる大切さを強調していました。また、彼は「人類には太古の部族社会にあった確実さへの回帰がやがて起きる」と確信をもって話していましたが、その予言的考察はもうここに現実している思いがしました。

近代社会は科学的知識と物語的知識（生活の中の常識）を区別し、前者に優位を与えてきました。二十一世紀への戸口に立って、その社会は今大きな転換期を迎えています。科学的知識の絶対性が

揺らぎ、部族の物語的知識が浮上してきたのです。

トロントを去る前夜、テレビ放送はイギリス共和国スポーツ祭典の開会式を放映していました。開催地ビクトリア州の原住民がカナダ首相をはじめ参加国の選手を堂々と歓迎し、自分たちの歴史と物語を劇的に再現している光景が感動的でした。それはかれらの誇りと同様、協調と相互依存、対等と共存の現実を物語るものでもありました。

一国の主張が世界を支配する時代はもう終わりを告げました。各々の国は各自のアイデンティティを洗い直し、その文化、伝統の再創造に取り組む時代です。私達は真の日本人として、大きく開かれた心と目をもって、異なる文化、民族を受け入れ、異質なものに感動する心を養いたい。多民族から成る社会の一人としてより良く貢献するためにも、母国語以外のことばの修得に努めたい。自分を知り、自分の国と世界を知る新たな心の旅が今始まろうとしています。



寺島　京子　昭和11年5月25日生　福島市出身・北九州市在住
▽昭和42年上智大学大学院西洋文化研究科終了、49年コロンビア大学TC終了
▽昭和51年学校法人桜の聖母学院中高校校長、62年学校法人明治学園理事長、学園長▽コングレガシオン・ド・ノートルダム修道会会員
〈好きな言葉〉「愛はいつまでも絶えることがない」（コリント書）

お慈しみに浴して

出口次年

それは昭和六十一年八月、山口県で全国高等学校総合体育大会が開催された年の事です。開会式に御臨席になられた皇太子殿下と紀宮（のりのみや）様が宇部空港から御帰京になられる御予定の日でした。

「間もなく皇太子殿下が空港に向って通過されます」と、近くのスピーカーから有線放送の連絡が聞こえた。「おや、此方をお通りになられるのだ」。丁度弟の法要に集まっていた親族達は、近所の郊外料理店でお斎（とき）の席についたばかりであったが、早速お見送りに立ち上がった。

布の日の丸の小旗が一本しか用意されていなかったので、おさない子供達には料理店で紙の風車（かざぐるま）を買って持たせ、道路に出た。道路は国道から空港通りに繋がる短い坂道で、お見送りに出ているのは坂の中頃にお待ちしている私達だけであった。

間もなく先導車が坂道を下り始め、後続の車の開いた窓から紀宮さまの手を振るお姿が見えた。子供達は紀宮様に向って一斉に風車を振った。その時、一瞬紀宮様が車の内に向かれると、車は速度を落し、皇太子殿下が身を乗り出す様にして笑顔をお見せになられ、子供達にお優しい眼差しを向けてゆっくりと手を振ってお応え下さるのであった。子供達は夢中になって風車を振り、私は溢れそうな涙を辛抱して旗を振った。皇太子殿下と紀宮様は坂下の角を曲るまで、振り返って手を振って下さり、お車は角を曲ると速度を早めて見えなくなった。車の列が遠ざかると、子供達は私の

方を向いて、「お姉ちゃんが手を振ってくれた」「おじちゃんも」「そうか、よかったな」「うん、よかったぁ」。子供達は目をキラキラさせ、足取りも軽く元の席に戻った。

皇太子殿下が子供に向けられたお慈しみ溢れる眼差しは、子供達の純真な眼にどの様に映ったであろうか。また、この子供達が成人して、手を振って応えて下さったお方が、どなたであったかが解る頃まで、あのお慈み溢れる眼差しを覚えていてほしいと思いながら私も席に戻った。

皇太子殿下はお見送りをした僅か十数人に対しても、全心全霊を尽してお応え下さった。その時のお慈み溢れた尊い御容姿は私の心に焼き付いており、十年を経過した現在でも昨日の様に思い出す。正に私の「忘れられないこと」なのである。

当時の皇太子殿下が現在の天皇陛下である。全霊を尽して国民を慈しまれる天皇陛下の存在、それが我国の国体の真髄であると私は信じている。



出口　次年　大正11年12月22日生　北九州市出身・北九州市在住
▽旧制九州専門学校卒
▽昭和38年サンエス工業㈱を設立し、現在代表取締役社長
〈好きな言葉〉「省―かえりみてはぶく」（安岡正篤）

ある先輩

中尾禮二

昭和三十五年頃の我が社（現ニチモウ、当時日本漁網船具㈱）は、北洋鮭鱒を含め日本の水産事業が最盛期であったこともあり、本業の漁具、資材の供給に多忙を極め、その上、石油元売り会社に指定されていた事もあって、会社の資金操りも超多忙であった。

総務部会計課に所属していた私は、毎月後半になると毎日残業の連続で、土、日の出勤はもとより、午前様になることも珍しくなかった。

丁度その日は月末の土曜日で、普段の月末より仕事の段取りがスムーズに進んでいたらしく、先輩、同僚皆帰ってしまい、広い事務所に残っているのは私一人であった。夜七時頃、事務所をロックし、割り引き用の約束手形を持って銀行に出掛け、十時頃帰社した。

当時、会社は旧丸ビルにあった。その時間になると皇居側の裏門から三菱地所管理人の誰何（すいか）をうけてビルに入るのが常であった。

事務所の前で驚いた。閉めて出たはずの鍵が開き、中に一ヵ所明かりがついていて、誰かいるではないか。

「やあ、ちょっと忘れ物をしてね、管理人に頼んで入れてもらったところだよ。遅くまでご苦労さん」

さりげなく私に銀行との交渉結果を聞いて帰って行ったのは、当時の私から見れば雲の上の人、藤岡取締役であった。

昭和四十三年、人事課長として私は労働組合との熾烈な交渉に明け暮れていた。決裂した春闘交渉を何とか軌道に戻そうと、深夜までかかって三役交渉を終え、部下の待ってくれている自席に戻った。

全く人気（ひとけ）のない役員室から、ブラリと出て来た藤岡常務が、ニコニコしながら我々にねぎらいの声をかけ、さりげなく交渉経過を確認して帰った後、ハッと私は前回の事を思い出したのであった。

藤岡さんとはそういう人であった。今は亡き藤岡先輩の思い出が、熱く蘇るこのごろである。



中尾　禮二　昭和6年6月26日生　鳥取県若桜町出身・東京都目黒区在住
▽昭和30年香川大学経済学部卒、日本漁網船具㈱（現ニチモウ㈱）入社、52年取締役就任、56年常務取締役就任
▽平成元年専務取締役就任、6年取締役社長就任

「価値観の違い」という落とし穴

中谷哲郎

とくに、ここ四、五年のことであるが、三十歳代あるいは二十歳代の若い人と接したときに、礼儀・服装・態度・言葉遣いなどで、「それは価値観の違いです」と、すまして答えられて唖然とすることが多くなってきた。

日頃若い学生と接触する機会の多い仕事をしているため、服装や言葉遣いが時代と共に変化することは心得ているつもりであるし、また世相が急激に変化している過渡期には、その変化が混乱とみえることも理解できるけれども、「価値観の相違」という言葉を遣って、無反省なエゴイズム、社会的ルールの無視など、手前勝手がそこに含まれていることは、おおげさに言えば、日本文化の保存のためにも放置してよいとは思えない。

例えば、電話をかけるとき、まず最初に自分の名前を告げて、それから話題に入るのが礼儀であろう。匿名の手紙、批評のたぐいは卑怯この上ないと思う。

日本の文化は「罪の文化」に対して「恥の文化」と言われている。M教授が学生に対して、「恥を知らなければ駄目だ」と話したら、学生から「恥とはなんですか」と答え返されて驚いたという話を聞いたことがある。罪を知ることの少ない日本人が、恥を忘れたらいったいどうなるのだろうか。

列車に乗ったとき、まるで家庭の応接セットに腰をかけているような姿勢で、足をなげだしている若者が多い。足が長くなったということもあろうが、腰を引いて姿勢を正せば、前の人に迷惑をかけることが少ないはずである。

相手に対する思いやりの気持、謙虚さ、誠実さ、時と場所を考えた服装、自分が言ったりしたことに対する責任感、こういうことは「価値観の違い」という考えで、無視してよいものでは決してない。

また社会的な問題の場合、もしルールが正しくないと思ったら、ルールに従って改める努力をすべきであって、自分勝手にルールを破ってエゴイズムを通すべきではあるまい。

神ならぬ人間の中には善と悪とが同居している。百パーセント正しい人も百パーセント悪人もいない。個人的な好き嫌いは別として、二人以上で生活する場合は家庭内でも、「価値観の違い」という言葉は、できる限り遣わないようにすべきであろう。



中谷　哲郎　大正15年11月26日生　福岡市出身・北九州市在住
▽昭和26年旧制九州大学経済学部卒、熊本商科大学講師
▽昭和38年北九州大学商学部教授、現在学長
▽著書『少数精鋭主義の経営』『経営管理論』
〈好きな言葉〉「辞譲の心は礼の端なり」（孟子）

J君への手紙

中村昭三

J君、就職内定された由。よかったですね、おめでとう。ご両親も愁眉を開いておられることでしょう。

今、ホーチミン市（サイゴン）のホテルで、この手紙に向っています。注目のベトナムをこの目で見たくてやって来ました。政治の中心ハノイ市と経済の中心ホーチミン市を三日間づつの短い日程でしたが、刺激に満ちた、印象深い旅でした。

この国は千年以上も中国に侵略されては撃退する紛争を繰り返し、近年になってもフランス、アメリカと戦い、更に南北統一後もカンボジア出兵を余儀なくされるなど、つい六年前までは戦いに明けくれていた不幸な国です。それなのに人々の表情にその翳（かげ）りはみじんも見られず、むしろ、フランスにもアメリカにも「勝った」という民族的な自信が面（おもて）に表れているようにすら思えました。東欧の社会主義国が崩壊する（一九八九年）十年も前『ドイモイ』運動は始まったと聞きました。そこにも、この国のしたゝかさがうかゞえます。

ベトナムの一人当たりGNPは二百五十ドル、日本の約百二十分の一の規模です。南部の慢性的電力不足、港湾施設の不備など、インフラの面でも未だ農水産業国の域を脱していませんが、石油、ガス、石炭、亜鉛、アルミなど資源に恵まれ、その上何より、勤勉で、忍耐強く、聡明な七千五百

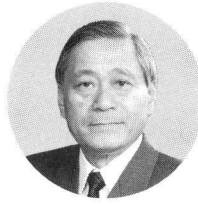
万人の人たち。この国の将来はすごいぞと、戦慄のような予感がします。特に若者たちの目的意識に燃えた目の輝きは印象的でした。

今度の旅の間中、爛熟して行き場すら見失ってうろうろしている日本のことを何度も翻(ひるがえ)って考えました。こうしている間にも、ベトナムに限らず、東南アジアの国々は、着実に歩を進めている。十年後はどうなっているのだろうか、二十年後は……。我々は次の世代に不安のないように、ちゃんとバトンタッチが出来るのだろうか。若い人達はしっかり引継いでくれるだろうか。日本こそ「ルック　ウエスト」だなとつくづく想いました。

J君の新しい旅立ちのはなむけに、三十七年前に就職試験用に読んだシュバイツァーの伝記の中に見つけた言葉で、私の処世訓にしていることばをあげよう。

「認識は悲観的に、行動は楽観的に」

このあと、スリランカを廻って帰ります。その頃には、日本は秋になっていることでしょう。



中村　昭三　昭和9年3月18日生　山口県下関市出身・福岡市在住
▽昭和35年九州大学経済学部卒、電気化学工業㈱入社、東洋化学㈱出向
▽昭和60年児島㈱社長就任、現在に至る
〈好きな言葉〉「夢」

少年時代と鎮西橋の明治屋

永木睦文

私が小学校に入学したのは第一次世界大戦が終わって間もない大正十年だった。老松公園は兵隊と軍馬であふれていた。私の家は公園東側の明治町にあり、家の前は大分銀行門司支店の代々の支店長次長の社宅があって、当時は第二十三銀行と呼ばれた。

母が人力車で街に出るとき、「一緒に連れて行く」と声がかかるとうれしかった。母より先に人力車に乗り、玄関から出てくる母を待った。行く先が明治屋のときは余計にうれしかった。母の膝に腰かけたり、足もとのゴムマットの上にすわったりして走った。

桟橋通りから鎮西橋までは本町通りだが、ロンドン通りとも呼ばれたこともあった。広い道の両側にはモダンな建物が並んでいた。明治屋は戦災で焼けたが、外観は今も変わらない。

明治屋は店内においしそうな輸入食糧品がいっぱい並んだきれいな店だった。店の奥の棚には色とりどりの瓶が天井近くまで並んでいた。小さな身体で見上げると、今にも自分のほうに倒れてきそうな感じがした。

今考えると、スコッチウイスキーやブランディだった。きれいなレッテルを貼った缶詰などもたくさんあった。店の入口にはガラス張りのショーケースがあって、チョコレートやハム、ソーセージ、ベーコンなど、うまそうなものが並んでいた。子供のころのことは、どうも食べ物の印象が強

いようにある。

私の父は門司港に入る外国船に燃料炭を売り込む石炭商だった。ときどき金髪や銀髪のきれいな外人の奥さんたちが家に来て、ホットケーキなどを焼いてくれたりした。母が明治屋に行くのは、この人たちを歓待する料理の材料を買うためだったようである。

数年前から始まった門司港の街のレトロ開発では、昭和初期までに建てられた施設や建物は、市として大切に残したい方針であり、調べて見ると、明治時代のものでは、青浜の部埼灯台の灯台長官舎の明治五年を筆頭に七軒。大正時代のもの十一軒。昭和初期から十二年までが十軒。合計二十八軒が残っている。

明治屋の建物は明治四十二年（一九〇九年）に建てられたもので、その外観は今も当時のままの姿であり、ポート門司として世界に知られた往時のことがなつかしく偲ばれ、忘れられないこととして多感だった少年期を思い出す。



永木　睦文　大正4年3月2日生　北九州市出身・北九州市在住
▽昭和10年3月法政大学工業学校電気科卒、㈱芝浦製作所入社、24年退社
▽昭和24年門司港運㈱入社、平成6年常勤相談役
▽著書『和布刈公園の山頂に立って』『中国船船員との友好交流と日中貿易の拡大』

〈好きな言葉〉「人の短を言わず、自分の長を言わず」（空海）

門信徒の熱い気持が

長谷川裕一

昭和四十二年の本願寺鎮西別院（北九州市門司区）の本堂再建の折のことです。明治四十四年、建立に着工した同院は造営途中の昭和六年火事で仮本堂などを消失したままでした。その本堂再建に際して、当初は募財が集まらず須弥壇は元のままとなっていたのですが、途中で再建委員や門信徒の方達が「須弥壇が古いままでは申し訳ない」と急遽須弥壇も新調することになり、京都と地元の各二店と当社が選ばれ見積り提出の指示を受けました。しかし既に落慶法要が決まっており時間は四カ月足らずです。だがやるからには日本一のものを。それも他業者の見積りのように落慶法要は古い須弥壇で、その三カ月後に須弥壇を納入というのではなく、最初から落慶法要を新しい須弥壇で、と腹に決め必死に走り出しました。

まず京都にとび情報を集め、指定からもれた老舗の仏具屋さんに有名な飾り金具師とご宮殿（くうでん）の原形を作る宮殿師を紹介してもらいました。当時私共は漆塗りと金箔張りだけで彫金と宮殿は京都に依存していました。

紹介はもらったが一面識もない地方の無名の業者の仕事を引き受けてもらえるかどうか？当時京都の職人は直接地方の仕事はしないのが仏具業界の不文律。しかも親鸞七百年忌で仕事は手一杯。そこに常識外れの短い納期です。夜も昼も頭が一杯で眠れない日々でした。しかしなんとしても引

き受けてもらわねばなりません。当時私は二十七歳でした。もし引き受けてもらえないなら割腹自害も辞さぬ気持ちで訪ねた飾り金具師の久木盛雄さんは、まず私が若いのに驚かれたようですが、「私は鎮西別院の崇敬区域―門司、小倉、筑豊、豊前の門信徒の方達の熱い思いのお取次ぎとして参りました」という私の必死の思いを聞き、即座に「お引き受けしましょう」と快諾されました。

後の話ですが、価格のことしか言わない業界で価格のことは言わず「日本一の仏壇をという門信徒の熱い願い」に感動されたということでした。

お陰さまで、本堂仏壇納入のご指命をいただき直方から手伝いの職人を送り、京都の職人との共同作業が始まりました。職人の意志の疎通には特に意を注ぎながら無事落慶法要に間に合わせることができました。その後職人達は京都で一年間お礼奉公をさせ、お陰で直方に京都の宮殿、彫金の技術が根づき、京都西本願寺の昭和の大修復では須弥壇の修復をさせて頂きました。鎮西別院の仏壇納入は当社の今日を築いた大事でした。



長谷川　裕一　昭和15年10月10日生　福岡県直方市出身・福岡市在住
▽昭和38年龍谷大学文学部仏教学科卒
▽昭和57年㈱はせがわ代表取締役社長
▽現在九州経済フォーラム会長、C&C21研究会会長、九州ニュービジネス協議会副会長
〈好きな言葉〉「心は身体の真似をする」

博多署の夜

花田　衛

旧制中学を出る時、友人に誘われて広島高師に入った。まだ戦火の傷痕が深く、校舎も旧陸軍の倉庫だった。昼も電灯をつけるほど暗くて蒸し暑く、勉学の意欲をそがれた。教師への迷いもあった。半年で中退し、新制高校になっていた母校に舞い戻り、翌年、中央大学法学部に入った。こんどは経済的に続かず、一年で帰郷した。ぶらぶらしていたら山向うの村の小学校の代用教員に誘われた。当時は教師不足の時代だった。

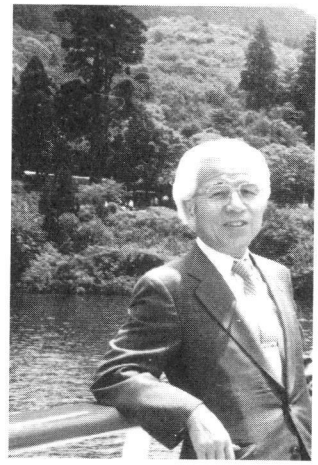
自転車で一時間、通い始めたが、気持ちは鬱屈していた。某日、同僚のM（こちらは正規の教員）と二人で博多へ出た。ビアホールで酔ったMは隣席のアベックにからみ、テーブルをひっくり返して荒れた。彼も何かがあったのだろう。すぐパトカーが来て二人とも東中洲の交番へ連行された。Mは大酔して長椅子にのびてしまい、私が調書をとられた。と、Mが突然、横になったまま一物を出して放尿を始めた。時間も長いし量も多い。警官たちも唖然としている。外には人だかりがし、中に中学の友人の顔もあった。

私とMは博多署に連れて行かれ、Mはブタ箱入りとなった。その時、何か書いていた一人の男が顔も上げずに「お前ら二度とバカなまねするなよ。書いたら一発でクビだぞ」と浴びせてきた。後でそれがサツ回りの新聞記者だったと知った。

「明朝もらい下げに来い」と警官に言われ、私はさっき顔を見た友人の所に泊り、翌朝迎えに行った。二人とも二日酔いで山の小学校へ戻った。

それまで私は自分が何をしたいのか、何になりたいのか分らず、一人で荒(すさ)んでいた。「そうだ。新聞記者という仕事があるぞ」と思った。大学をちゃんと出てないと受験できないと気づくと、すぐに学校を止めた。そして西南学院大学に入り直した。ここならバイトしながら家から通えるからだ。新聞部があったので、大学のほとんどはこの部室に終始した。さしあたり英文科卒でなく新聞部卒である。

新聞社の入社試験は、当時は年齢制限二十五歳で、ぎりぎりで滑り込んだ。以来、取材記者一筋で定年まで勤めたが、私の原点はあの博多署の夜にあった気がする。Mも教師としての一生を全うしただろうが、私は好きな仕事を見つけ、思う存分の仕事ができたのは、何よりの幸せであったと思っている。



箱根の遊覧船で（S62年）

花田　衛　昭和6年1月9日生　福岡県篠栗町出身・福岡市在住
▽昭和31年西南学院大学文学部英文科卒、西日本新聞社入社、編集委員、大分総局長、写真部長
▽新聞三社連合事務局長、平成2年から㈶九州文化協会と福岡文化連盟の事務局長を兼任
〈好きな言葉〉「火急の用なれば心静めて」（森蘭丸）

店はお客様のためにあり

深町勝義

私が商業を志して四十年。「忘れられないこと」とはなんだろうと、振り返る時、数多の思い出は、どうしても「店はお客様のためにあり」ということに集約されるのです。仕事上の勉強にしても、日常の思考、行動にしても「お客様のために」という商業道の原点に帰結する思いがしてならないのです。この思いは私が根っからの商業人の所以なのでしょうか。その視点に立つと、昭和四十五年、チェーンストアの勉強のために初めてアメリカを訪れた時のことを思い起します。

戦後五十年。廃墟と化した日本が、今日の経済発展をみるに至った過程では、経済先進国のアメリカを見習って努力すればよかったのです。つまりアメリカが先生だったのです。

ところで、当時のアメリカは既にモータリゼーションの時代。ショッピングセンターでは、とにかくクリンネスが最高、フレンドリーも優れたものでした。当時の日本といえば、まだ大量交通機関の時代であり、物を作れば売れる時代でした。

私はこの視察を通じてこう予感したのです。高度成長時代に入ろうとする日本も早晩アメリカ並に車社会がやってくる。そうなれば郊外型ショッピングセンターが生れ、さらにロードサイドには広大な駐車場。そんな姿が脳裡に浮んだものでした。お客様にとって、店は広々として美しく、従業員が親しみやすく、快適に買物を楽しんでいただく。そのような店づくりを常々心掛けてはきま

したが、この視察でさらにその思いを深めたことでした。

それから四半世紀を経た今日、特に百貨店、量販を核とするショッピングセンターでは一五〇〇台の駐車場を、ホームセンターや専門店でも一五〇台前後の駐車場を持たないと商売にならなくなっているのです。

車社会の到来は小売業の形態を確実に変えました。また、海外商品を含む商品の多様化が流通の世界を大きく変え、さらに変化は続くでしょう。今後は競合というより真の競争時代です。

しかし、この変化への対応策「答」はあるのです。それは、店の第一線におけるお客様とのコミュニケーションの中から出てくる「生の声」「お客様の声」を一つひとつ拾い上げて次の経営戦略に生かすことです。お客様の「クチコミ」にならない店に発展はないのです。「店はお客様のためにある」、その理念を肝に銘じてこれからも歩み続けるつもりです。



深町　勝義　昭和7年11月16日生　山口県下関市出身・北九州市在住
▽昭和26年深町家具店入社
▽昭和42年㈱ナフコ代表取締役社長、現在に至る
〈好きな言葉〉「プラス発想」「店はお客様の為に有り」

やさしい先生

福山庸治

今でも文箱の中に入江侍従長の便箋二枚にペン書きの歌があります。

おくて田のたり穂きばみてひかる日や　周防ながとを風ふきとほる

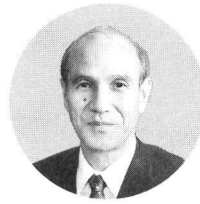
ほか二首は吹上御苑で詠まれたもので、この歌は、侍従長が昭和三十八年十月の山口国体の時に詠まれ、私方にお泊まりになられた際、揮ごうされた歌の解説をされた時のものであります。その時、周防長門は雄大すぎるかなと笑っておられたご様子は、今でもありありと脳裏に刻まれています。私方の茶室で筆いっぱいに墨をふくませて、水の流れるような見事な筆はこびにただ一生懸命紙をおさえていました。大変穏やかな、威張ったところのない慈父のごとき印象をもったのであります。歌は人なり、書もまた人なりと申しますが、急逝された後、入江家は世々歌道をもって皇室に仕え、また、父為守氏も昭和天皇の皇太子、摂政時代の東宮侍従長であり、父子二代にわたる側近であることを知り、むべなるかなと思った次第であります。

また、その折、高貴な方がお泊まりになられた際のお部屋の調度品はどのようなものを置いたらよいでしょうかとお尋ねしたところ、掛軸は贋物や今で言うコピーものでなく、本人の描いたもので季節にあったもの、季ちがいのものなら、例えば夏なら冬の雪景をかけるとか。そして書は出来るだけさけた方がよい。もし掛けるなら、亡くなった方のものにしなさい、と言われました。私も

三十二歳の若さでもありましたが、子供にものを教えるようにやさしく懇切に話されたことを思い出します。

その後、高松宮ご夫妻様、三笠宮ご夫妻様、常陸宮ご夫妻様とご宿泊をいただき、また、平成二年四月には皇太子殿下のご宿泊の名誉にあずかるなどいたしましたが、そのたびに入江侍従長を思い出し調度品になやむことはありませんでした。

因みに皇太子殿下のお泊まりのときの掛軸は、殿下にご縁のある東大寺元管長・清水公照氏が当方で描かれた春爛漫の絵と賛のあるものにしましたが、殿下もなつかしくご覧になった、と侍従の方よりお伺いしてうれしうございました。これもひとえに入江侍従長のお陰であると共に、ホテルの主をしてよかったと思うこの頃であります。



福山　庸治　昭和6年1月23日生　山口県徳山市出身・徳山市在住
▽昭和29年関西大学文学部史学科卒、山口県立徳山商工高等学校に奉職、37年同校退職、㈱丸福ホテル入社、52年社長就任
▽徳山商工会議所副会頭、山口県食品衛生協会会長、山口県旅館環境衛生同業組合理事長

欲しいもの　必要なもの

松本　攻

結婚式に招ばれると、よく祝辞をおおせつかります。それで、はなむけの芯に、たびたび引用するのが「欲しいものは買うな、必要なものを買え」です。じつはこれ、当行を創立した四島一二三の言葉です。

少壮時に孤立無援のアメリカで途を拓いた一二三は、次から次に格言をつくって自分を律していました。表現も飾りがなく、リアルで、すべてが自家用ですから、周辺への公害は絶無でした。

健康格言もユーモラスで、「病気は新芽のうちに徹底的に摘み取れ」はいいとして、「一日一時間は歩くべし、ただし一分間約九十五歩」「入湯は摂氏四十度」と徹底しています。

一二三は格言マニヤでたくさん生産しましたが、そのなかでの出色はこの平凡な「欲しいものは買うな、必要なものを買え」でしょう。

質素な日常で一本数百円のネクタイを平気でしめていました。しかし、例外があって、車だけは外車の大型リンカーンを愛用していました。

そのちぐはぐがとてもおかしかったのですが、車は〝安全一番〟がモットーで、昭和三十年代の日本車はこの面でまだまだでしたから、彼の「必要なもの」は安全期待のリンカーンだったのです。

あるとき、こちらの車線に対向車が突っこんできたので、運転手さんがやむなく横の田んぼに車

をジャンプさせたことがありました。乗客は高齢者ばかりでしたが、全員無事で、その時の得意顔がいまでも目に浮かびます。「必要なものは……」の効用を見事に実証して愉快だったのでしょう。

新婚の若い二人が欲しいものを全部満たせば、新生活はたちまち破綻してしまうでしょう。じっと我慢が大切で、そのかわりに必要なものは思い切ってそろえる。これは現代に通用する大切な生活設計の知恵だろうと思います。

平凡な言葉ですが、明治生まれの頑固者がアメリカ時代の辛酸と、銀行創立後の奮励を経て到達した言葉だけに、かみしめれば味があり、うなずけるものがあるようです。

銀行屋さんらしい祝辞だ、と冷やかされていますが、案外に共感されてもいるようで、これからも風のままに、大切な言葉として若い人たちに捧げていこうと思っています。



松本　攻　大正12年6月16日生　熊本県玉名市出身・福岡市在住
▽昭和21年福岡経済専門学校卒
▽32年福岡相互銀行（現福岡シティ銀行）入行、61年より同行代表取締役会長
▽現在、福岡県警察を励ます会会長、北九州カントリー倶楽部理事長

アッ私の帽子が……

松本政敬

私の母校は門司市立庄司小学校である。男子は制服制帽。特に帽子には当時憧れであった旧制高等学校の一高や五高によく似た白線が一本入った自慢の制帽であった。

昭和十二年七月、日中戦争が始まり、翌十三年五月、六年生になった私達はその戦勝祈願と修学旅行を兼ねて宇佐神宮、別府へと一泊二日のワクワクする旅行へと出発した。門司港発の鈍行列車には沢山の父兄が見送りに来ていたように思う。何しろ当時は悪名高い単線の日豊線である。それでも私達の夢と希望を乗せてガタゴトとリズミカルな音を響かせて列車は一路別府へと走った。

途中宇佐神宮参拝のため軽便鉄道という明治時代を思わせる更にオンボロ列車に乗りかえた。背もたれも座席もすべて板であったと思う。柳ヶ浦駅に停車している時、私にとって忘れられない一つの事件がおきた。ガタゴトときしむ列車の窓を大きくあけて退屈まぎれと運だめし、と体を車窓からのり出して自慢の帽子をポーンと真上に投げた。帽子はスッポリと私の手許に帰ってきた。オッ！今日は運が良いぞ。よし、もっと高く高く投げてみよう。次は更に良い運があるかもしれん。今度は大きく身を乗り出して投げてみた。とたんに「シマッタ！」ボーゴトンと汽車が動き出した。アッ手が届かない。私の帽子は無残にも線路の枕木から見る見る遠くなって視界から消えてしまった。あざ笑うかのような女子生徒の視線を背中に感じる。アーア一巻の終わりである。運が良いと

か悪いとか、小学校六年生の私は一体何の運を試したのか、単なる退屈しのぎだったのか悪ふざけだったのか、分からない。たしかに何かに夢をかけた瞬間のスリルと、しっかり摑んだあの帽子の感触は最高であった。宇佐神宮での数々の記念写真には女生徒達へカッコをつけるため、おとなしいS君の帽子をむりやりに借りてすまして写っている。そしてS君にはただ一人帽子がない。何だかさみしそうだ。私はS君に礼を言って帽子を返した。自責の念と、やはり他人の帽子は私の頭になじまないという気分と。翌日の地獄めぐりからは私の頭には帽子がない。いいや一人目立つからと自分に言い聞かせ胸を張ることにした。

カッコ悪かった五十数年前の修学旅行記念写真を見るたびに子供心に何かにかけたあのゾクゾクする思い出と先生、両親にこっぴどく叱られたホロにがい思い出があざやかによみがえってくる。



松本　政敬　大正15年8月2日生　北九州市出身・北九州市在住
▽昭和22年3月善隣外事専門学校卒業、松本写真工芸社入社、24年4月㈾松本写真印刷社無限責任社員
▽平成元年2月㈱マツモト代表取締役社長、6年7月代表取締役会長就任、現在に至る
〈好きな言葉〉「夢」

還暦祝い

右田久幸

平成三年十月に私は還暦を迎えた。自宅では家族でお祝いをしてくれた。また、会社でも職場の皆さんからお祝いをしていたゞいた。還暦といえば六十歳であるから、人生五十年の昔ではむしろ長寿の方ではなかったかと思う。建物では六十年の耐用年数のものは鉄骨のビル類であるから、人間の体はよく長持ちするものだと思う。いろんな長寿の祝いがあるが、最初にくるのが還暦の祝いである。

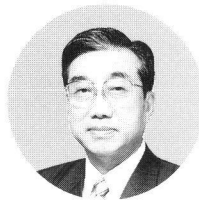
さて、自分ももうそんな年になったのかと思うと、何だかしんみりした気分になる。昔は赤いチャンチャンコを贈る習わしであったが、今はその習慣は見られないようである。私にもさすがに赤いチャンチャンコの贈物はなかった。

職場でお祝いをしていたゞいた翌日、庶務の女子社員が「本社から小包が二個届いております」といって小包を二個もって来た。開いて見ると、二個とも還暦のお祝品である。「よく私の誕生日を覚えていてくれたものだ。誰からのものかな」と期待と好奇心で熨斗を見てみると、二個とも労働組合の歴代（十数年前から現在まで）の幹部の名前が書いてある。一個は委員長や支部長クラスからのもので、一個は若い書記長や執行委員クラスからのものである。私、その当時は人事課長から人事部長をしていた時期で、労働組合は言わば敵方（？）である。その敵方からの贈物である。

思いがけないという言葉があるが、まさに、思いがけない贈物であった。一瞬涙が出た。

人事課長とか人事部長という職は労働組合との直接の交渉相手であるが、今と違って当時はまだ労働運動が激しい頃で、お互いの立場を主張し合うタテマエ論が幅をきかせていた時期である。私、各社の人事課長・人事部長と同様のことをしたまでで、特別のことをした覚えはない。たゞ、タテマエだけでは解決しないので、幹部と個別に会ってホンネを聞き出し、それをもとに会社の上層部と相談しただけのことである。

職場の皆さんからお祝いをしていたゞくだけで有難いのに、十数年前の労働組合の幹部から、しかも平成三年当時、北九州事業本部長であったので労働組合とは直接関係がないのに、心のこもったお祝いをしていただいたことは、六十年の人生で最も忘れられないことであった。お祝いの一個がゴルフのピンパターで、今でも愛用させてもらっている。



右田　久幸　昭和6年10月4日生　熊本県人吉市出身・福岡市在住
▽昭和30年九州大学経済学部卒、西部ガス入社、59年取締役、平成2年常務取締役北九州事業本部長、5年専務取締役
▽平成7年西部ガスリビング、西部ガスエンジニアリング各取締役社長
〈好きな言葉〉「己の欲せざるところを人に施す勿れ」

父の言葉

三島正一

父は昭和三十三年頃自宅の離れに造った「新月庵」と呼ぶ茶室で毎朝お袋と共にお茶を点てるのを日課としていました。昭和四十九年頃から父は「会社を経営していく上で、精神的に高める茶道は非常に役立つのではないだろうか。お前も茶道を嗜み、一緒にやらないか」と誘いました。無縁のものだと思っていた私は即座に断っていました。

其の後父の持病であった糖尿病が次第に悪化し入退院を繰り返すようになり、昭和五十一年、私の社長就任を機に、親孝行のつもりでとうとう茶道を始める決心をしました。父から手ほどきを受けて作法を覚えたのですが、覚える事よりも、出張以外毎日欠かさずお茶を点てる事を継続することの方がはるかに辛いものでした。早朝、つまり出社三時間前に起き、お茶室の掃除をし、レンジで種火をおこし、そして炭点前をする。約一時間でお釜の湯が湧くとお点前に入る。お点前以前の準備に随分の時間を必要とするので、深夜帰宅の多い私にとって継続するにはかなりのエネルギーが要求された訳です。

「動」の準備とは打って変わり、「静寂」そのもの、お茶室で、亭主は客に対して如何に美味しく点てるかに心砕き、お湯の加減（温度や量）に気遣い、客は亭主の心こもる気配りを汲み取り、お茶を頂くことに感謝し頂戴します。この双方の気持ちが和やかな楽しい雰囲気をかもし出し、茶

道の境地に浸れるのではないかと思います。

この双方の関係こそが、社会・会社・家庭に於いても大切なことだと考えます。我を張らず、相手に対する心配りを忘れてはならない事を、私は茶道を通じて教えられた感がいたします。

茶道は型から入るのですが、型にとらわれない豪放磊落な大きな世界が存在する様に思います。その大きな世界に身を置き、ひと時を無心の境地に、或いは本来の自分を取戻し自然体で過ごせることが本当に有難く、父の勧めてくれた言葉なくして今の自分があり得ないことに、改めて父に感謝しています。

昨今の企業競争は激しさを増し片時も気の休まる間もありません。このような時こそリフレッシュし「ゆとり」を持てる茶道は貴重な存在です。

父から言われて始めた茶道でしたが、その奥義の深さに益々魅(ひ)かれ、父の意志を大切に今後も精進してまいりたいと存じます。



三島　正一　昭和14年8月22日生　北九州市出身・北九州市在住
▽昭和37年中央大学経済学部卒、三島光産㈱入社
▽昭和51年三島光産㈱社長就任
〈好きな言葉〉「何事も一生懸命」

初仕事

溝口　昇

北九州市の八幡に皿倉山という山がある。海抜は六二二米程度だが、平地の幅が狭く、0米からそのまま真直ぐに立ち上った感じの山である。

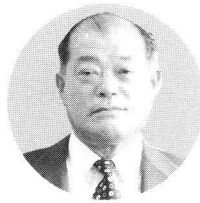
昭和三十二年、この山にケーブルカーの新設工事が始まり、電線路の設計を含めた電気工事の担当を命ぜられた。昭和三十年に西日本鉄道㈱に電気技術者として入社して、大牟田線での現場研修期間を終え北九州へ転勤になったばかりの、未だ鉄道電気の何たるかもよく分かっていない頃である。今は亡き当時の上司が、よくも任せてくれたものだと感謝している。指名された以上は、足りないものは足で稼ぐしかないと、一日に二回は山を昇り降りしながらそれぞれの部門の専門職の人達に随分と教えを乞うたものである。上司にも陰に陽にと助けをいただいたことは勿論であるが、なんとか仕上げることが出来た。上下二台の試運転車が、行違い個所のポイントをうまく渡ってすれ違っていった時の、心震えるような感激を今もはっきりと思い出す。その日は何回試乗したことか。企業における技術者としての初めての仕事であった。今も麓を通るたびに必ず見上げて、動いていることを確認すると、ホッとするような思い出の山である。

電気の基本的な論理においては何ら違いはないが、学校では絶対に経験し得ない、現場における実学の勉強である。いろいろ失敗もあった。山の傾斜路の鉄柱における応力計算がきちんと出来な

くて、鉄柱の斜材に座屈の心配が起こったために、後から補強材を取りつけざるを得なかったことなどは、その最たるものである。

目的とする仕事を成功させるために、参加した全ての人達の連帯感は、それぞれの工程においてフルに発揮された。人、物、皆師である。何も分からない不安な気持ちからスタートして、あの張りつめた気持ちの緊迫感。そしてなんとか試運転に漕ぎつけた時のフッと気の抜けていくような安堵感。何ものにも代え難い達成感や充実感に深い感動があった。社会人としてのスタートに当たって、本当にいい体験をさせて貰ったものである。その後の人生の大きな自信になった。

初心忘れず。当時のこの一途な気持ちを忘れないようにしたい。そして、これからの若い人達にも、いろんな感激を味あわせてやりたい。そのための場作り、環境作りが、今の私の一番大事な仕事である。



溝口　昇　昭和8年1月11日生　北九州市出身・福岡県大野城市在住
▽昭和30年九州大学工学部卒、西日本鉄道㈱入社、電車局電気課長
▽昭和56年西鉄電設工業㈱出向、常務取締役営業本部長、平成2年6月社長就任、現在に至る
〈好きな言葉〉「フェスティナ・レンテ（ゆっくり急げ）」

最後の夢

光永　徹

昨年二月、高知市での学会の帰途、日曜日の朝に念願の「須崎市上分小・中学校」を訪れることが出来ました。

この「上分」は、父が病後、国立療養所で健康回復に努めた後に、国保診療所の医師として赴任し、わずか二ヵ月後に客死した所です。我々は学校の関係で遠く長崎に住んでおり、暑い盛りに地元の方のお世話で葬式も終わった後にやっと着きました。後からの話で、色々と地区の方々や須崎市の関係部署の方に随分お世話になったようです。父の三十三回忌を機に須崎市に僅かばかりの寄付をすることにしましたが、市長さんのお話では学校の講堂に〝緞帳〟をと、京都に依頼されたそうです。完成後写真を送って戴きましたので、その緞帳を拝見することが目的でした。日曜日ですので校庭に来ている子供に一番近い八木先生を紹介して貰い、家族でお寛ろぎのところ学校まで来て戴き、講堂を開けて戴きました。西陣織の立派なもので「ささやかながら地区の皆様にお礼が出来た」と、長い間背負っていた肩の荷を降ろした次第です。

父の後任に来られた先生が、大学から診療所に後期分授業料三千円の督促状が届き、学業が続けられる様にと代わりに納付された事を、当時の看護婦明神さんに聞いておりました。その先生が行橋市にご健在とのことで、昨年やっとお尋ねすることが出来まして、幾許かの気持ちとお礼を申し

上げ、心の隅に残る思いを果たせました。先生ご夫婦は、授業料の件は自分たちは完全に忘れていて、年賀状の主は誰だろうと話をしていたそうです。先生も長年の疑問が氷解したこととお尋ねしたことを喜ばれ涙された次第でした。

未だ果たせぬ、心に残る事が一つあります。

四十六歳で早世した父が、花岡（下松市）にできた広島の陸軍病院の分院に、赴任していたころ、八月六日の原爆投下で、八日に兵隊収容のために広島に入り、帰途の列車の中で熱傷のため次々と落命する人の対応と収容出来る人の選別をしたそうです。ただ花岡の病院の記録さえも全く残されてなく、その資料収集と全容を明らかにしたいとは思いますが、母も一昨年他界、年々証人が少なくなり残念です。戦後五十年の夏には果たせませんでしたが、場所は特定しましたので記念碑を建てる事が最後の「夢」となりました。



光永　徹　昭和9年11月8日生　山口市出身・山口県徳山市在住
▽昭和37年長崎大学医学部卒、同第一外科入局長大付属病院中央手術部
▽昭和45年徳山記念病院外科、46年学位授記
▽昭和49年現在地で開業
〈好きな言葉〉「浮雲流水」

失敗に学ぶ

南　康博

もう二十年近く前のことである。ある夜私は父に連れられて、父の友人高藤昌和社長と食事をご一緒させて頂いた。その時の高藤社長の話の中で、二十年経った今でも忘れられないことがある。

突然、高藤社長は「王選手と他のプロ野球選手の違いは何か、判るかい？」と、高校生の私に尋ねられた。私には「王選手は世界のホームラン王であり、特別な野球選手」という程度のことしか思い浮かばなかった。高藤社長の後に続く言葉は、私には思いもよらなかった。

「よく野球の選手が、審判の判定にクレームをつけるのを見たことがあるだろうけど、王選手が審判の判定に不服を言うのを見たことがあるかい？つまり『大人は己を責め、小人は人（他人）を責める』ということなのだよ」と、こう仰言った。

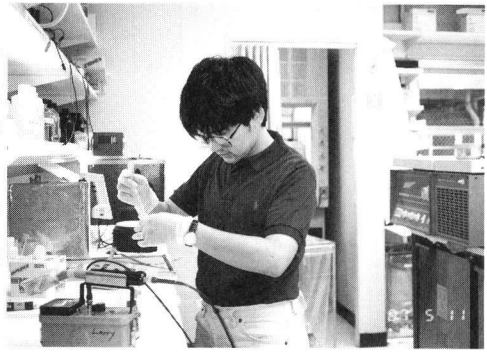
私も医学研究に従事するようになって十年あまりが経過した。

医学研究において〝実験〟は欠かせないものであるが、一度は成功した実験が次にはうまくいかなかったり、あるいは自分の思い通りの結果が得られなかったり、ということがしばしばある。そのような時、実験に使った試薬や材料にその原因を求めたり、あるいは自分のアイデアが正しいと思い込むあまり、他のことに失敗の原因を求めてしまうことが多い。自分以外のものに失敗の原因を求める方が、気楽で簡単だからである。

しかしながら、当然のこととはいえ失敗の原因を突き詰めてみると、自分自身のケアレスミスあるいはアイデアに問題がある場合が多い。

人は成功者を見る場合、その人の表面的なもの、つまり華やかな地位や世間からの評価に目が向きがちである。むろん、その人の生まれ持った才能もあるだろうが、それ以上に重要なものは、ひょっとすると、失敗に際してのその人の姿勢、即ち失敗の原因をまず自分に求めるという厳しさと謙虚さではないだろうか。

私はまだまだ若輩者ではあるが、これからも出会うであろう多くの失敗に際して、「大人は己れを責め、小人は他人を責める」という髙藤社長の言葉を忘れずに立ち向かっていきたい、と思っている。



'87年、米国国立衛生研究所で

南　康博　昭和35年1月28日生　北九州市出身・神戸市在住
▽昭和60年東京医科歯科大学医学部卒、61年米国国立衛生研究所研究員
▽平成2年大阪大学助手
▽平成7年神戸大学医学部助教授

セピア色の思い出

宮田浩子

昭和も一桁前半の生れとなりますと、戦前、戦中、戦後と日本が辿った歴史と共に様々な忘れ難い思い出があります。両親、友達、学校、戦争、恋愛、結婚、出産、夫の死、そして仕事。人生の過程で体験した数多の通過儀礼的な出来事を思い起こしているうちに、ふとセピア色になってしまった小学校での遠い日の記憶が懐かしく蘇ってきたのです。私が通った田舎の小学校は三年生まで男女共学、四年生からは男女別々の教室でした。

セピア色の思い出とはその三年生最後の日の教室での出来事なのです。

担任の石田先生が出欠をとったあと、「男子は全員教室の後ろに立つ!!」と命じられたのです。そして、そのあとの先生の言葉に私達女の子はびっくりしました。「今日一日だけ好きな男子と並んで勉強する!!」。私は最後尾の席、びっくりしながらも、とっさに近くに立っていた級長のAさんの腕をつかんだのです。Aさんと机を並べたその日、私の頭には多分お勉強は少しも入らなかったことと思います。でも女の子泣かせの悪童にとっては最悪の日、むしろ忘れたい思い出かもなど考えると思わず口許がほころんでしまいます。

その頃は「男女七歳にして席を同じうせず」という言葉がありました。七歳にもなれば男女の区別をわきまえ、みだりに親しくしてはいけないという『礼記』の教えだったと思います。勿論今で

はこんなこと通用しませんよね。でも終戦まではこの言葉通りの教育を受けていたのです。

戦争が終わって、それまでの価値観は大きく変わり、この言葉も今日では死語になってしまいました。

でも振り返ってみますと、私達の世代にとっては「男女七歳にして……」の節度があったからこそ青春は美しく、恋は素晴らしい感動として人生を彩ってくれたように思えるのです。男性も女性も、それぞれに分をわきまえ、礼儀正しく、節度ある社会生活が営まれていたような思いもいたします。

戦後五十年。この間、女性の地位も向上し、現代は男女それぞれの特性を生かし、役割を担いながら相互に協調して社会で活動する時代なのです。そんな時代の中で私は来し方を振り返り、遠い日の教室での出来事をこう思いたいのです。

石田先生は、半世紀後に男女共生の時代が来ることを予見なさり、三年生最後のお勉強でそのことをユーモラスに私達に教えて下さったのだと。



宮田　浩子　昭和3年6月5日生　福岡県田主丸町出身・福岡県太宰府市在住

▽昭和20年浮羽高等女学校卒、同22年九州大学付属科学研究養成所卒
▽昭和39年～平成3年㈶福岡県消費者協会勤務。その後食生活コンサルティング・アカデミー勤務、現在に至る
▽著書　『ご存知ですか』
〈好きな言葉〉「努力は天才に勝る。不言実行」

祖母との対話

山下真理恵

祖母が旅立ってから四十年の歳月が流れ去ったにもかゝわらず、夜空を眺めると、月の光と、やさしかった祖母の笑顔が二重写しとなり、時空を越えて今も私に語りかけてくるのです。

九人家族の私の家では祖母は重要な存在でした。六人の子育てに追われ通しの母は、何でも「おばあちゃんにお聞きなさい」だったのです。

長女の私は、誰よりも接した時間が長かったせいか、祖母から聞いた物語が懐かしく思い出されるのです。当時は、テレビもなければファミコンもありません。長い夜をお月さまを眺めながら、月に戻っていった「かぐや姫」の話や、満月に向かって吠える「狼男」のおそろしい話などを、幼い胸をワクワクはずませながら聞き入ったものでした。

明治の初期生まれの祖母は寺子屋の出身だったのでしょう。仮名文字は読めても漢字が読めないから、と小学生の私に新聞を読んで頂戴と頼むのです。私は大好きな祖母の依頼なので、一日も早く新聞を読んでやりたい一心から必死で辞書を引く練習をし、国語の勉強に気力が入ったものです。

併し、今にして思えば、あれ程の物知りだった祖母は、字が読めなかった筈は無い。きっと私に向学心を燃やさせる為のありがたい策であったのではないかしら——と。今の子供達のように、やれ塾だ、家庭教師だと詰め込み主義の勉強でなく、祖母と孫との〝ギブ・アンド・テイク〟の楽し

い毎日だったのです。

成長した私は、何時のまにか「気学」という目には見えないけれども、大きなエネルギーを持つ気に強烈な関心と興味を抱き始めました。これは幼い心に、しっかりと刻みこまれた祖母との会話が根底に流れているのです。

「嘘をつく子供や、人の悪口を言う子供は地獄に連れて行かれて閻魔さまに舌を抜かれてしまうとよ」「痛いからイヤーン」「お利口さんは、お釈迦さまが極楽に連れて行って下さるとよ」

こんな幼稚な対話が現在の私の支えなのです。激しい競争社会を生き抜かねばならない現在、私の心の中は地獄、餓鬼、畜生、修羅、天上の六道輪廻の毎日のような気がします。心の持ちようで、地獄から極楽浄土までを行ったり来たり、何とまあ忙しく目まぐるしいことなのです。一日中が佛タイムの連続という訳にはなかなかいきません。併し私は一日の終わりに必ず夜空を仰いで祖母に話すのです。「おばあちゃーん。今日の私は鬼タイムはなかったよ。ありがとう」と。



山下　真理恵　昭和3年10月26日生　福岡市出身・福岡市在住
▽昭和23年県立福岡女専（現福岡女子大）卒業、ぷりんせす洋装店経営
▽昭和53年朝日カルチャーセンター及びＮＨＫ文化センター気学講師、ＫＢＣラジオ、ＲＫＢラジオパーソナリティー
▽著書『幸せのパスポート』『気学ゼミナール』『気学ハッピートーク』等
〈好きな言葉〉「輪廻転生」

フェアかどうか

山田康雄

父から教えられた言葉としては高校生の頃だったでしょうか、「男として卑怯なことはするな」と言われた事が、ずーっと頭にこびり付いて残っています。男性間の事なのか女性との間の何かを注意されたのか記憶にないのですが、いずれにせよ私にとっては「男として」が大変に重い意味を持っており、その後の私の人格形成に大きな影響を与えたようです。

大学卒業後たまたま商社に入りましたが、商社では一貫して貿易関係の仕事に携わって来ました。御陰で十年間程海外勤務も経験させてもらい、欧米系の外国人の考え方にも色々と慣れ親しむ貴重な体験も得ることができました。海外で教わったことは沢山ありますが、その中でも特別に忘れ難いのが、「フェアかどうか」という思考形態です。思考形態と言うほど大げさな事ではないのかも知れませんが、米国を中心とした白人の社会では、単に「公平かどうか」という以上の重い意味を持って使っているようです。時にはフェアが「正義」そのものであり、又「善」であったりしますが、「正義」とか「善」をも含んだそれ以上の重い意味を持った社会倫理とでもいうのでしょうか。

例えば、西部劇で有名な悪漢のビリー・ザ・キッドが、保安官のパット・ギャレットに誤って背中を射たれて死亡するのですが、フェアじゃないという事で、今もってビリー・ザ・キッドに人気があるのは、「正義」以上の重みを持っているからだと考えられないでしょうか。

白人の使うフェアという意味を未だ正確には理解していませんが、私自信は社会生活、人間関係、会社経営等の全てにおいて、一番重要な判断基準として大切にしていきたいと考えています。

昭和六十二年にたまたま経営者の端くれに加わりましたが、経営者の心構えとして、一番自分に合う指針を幕末の佐藤一斉先生の「重職心得箇条」に見い出し座右の書としていますが、日常は半歩前進一歩後退のくり返しで、人間として段々退化して行っているのではないかと、ふと考えさせられることがあります。

そんな時、この座右の書をじっくり繙（ひもと）くと共に、親父に教わったわすれ難いひと言「男として……」を思い起し、また海外勤務で体験した「フェアかどうか」を自ら問い直すことにしております。

忘れられないことと言うより忘れ難い言葉というべきでしょうか。



山田　康雄　昭和16年1月18日生　福島県会津若松市出身・北九州市在住
▽昭和39年3月東北大学経済学部卒、三菱商事入社
▽昭和62年山田港運倉庫㈱代表取締役社長、現在に至る

祖父の臨終

山田宜弘

昭和四十年三月上旬、私の祖父喜平の臨終のことである。

喜平は、若い頃から健康で小兵の男ではあったが、気力の強い性格であった。還暦を過ぎた頃より、呉服屋の暖簾を息子義信に譲り、飄々として欲のない好々爺として近所の人々からは〝仏の喜平〟と言われる程いつも笑顔を絶やさず、愚痴も零さず、毎日を感謝して生きてきたという感じの男であった。その祖父喜平の臨終の様子である。

二、三日前までは数十年楽しく嗜んできた湯呑一杯の晩酌の日々であった。しかし、今日は常になく体の調子がおかしいと言って夕刻より床についた。家人もどうも様子が日頃と違うと感じ、掛かりつけの医者に往診を頼んだ。診察した結果、先生はこう語った。「これは病気ではありません。老衰です。注射も薬も要りません」。そして「何かあったら知らせて下さい」と言って帰っていった。喜平は診察をしている先生に「先生、長い間有難うございました」と死を予感したのか御礼の言葉を言い、私の妻の臨月の腹を観て「生まれる赤子は男の子じゃ、大切に育てなさい」等と言ったり、周囲の家族、親族の連中に一人ずつ御礼を言っていたが、「目が見えなくなった」と言い、そのうち「眠たくなった」と言って眠り始めた。周囲の一同は騒然として顔を見合わせていたが、今度は「耳が聞こえなくなった」と言ったので、皆は「お爺ちゃん」「お父さん」と大声で喜平の

魂を呼んだが、顔は平然としていて反応はなかった。最後に私の長女(曾孫三歳)が「お爺ちゃーん」と大声で叫ぶと、聞こえたのか、ニコッとうすら笑顔を見せた。これがこの世の最後の反応となった。

その後は眠るが如く、五分、十分、三十分と時間が経つにつれ、呼吸の回数も少なくなり、約一時間後には息が絶えていた。側で見ていても本当に自然で苦しみも無く、むしろ笑顔で今生を旅立った姿は側にいた親族に大きな感銘を与えたのは言うまでもない。これこそ「大往生だ」、「こういう死に方をしたいものだ」と一同は思ったことであったが、その後今日までその場の数人は既に鬼籍に入ってはいるが、喜平のような死に方をした人はいない。

貧農の次男として産まれた喜平の生涯は波乱の人生のようであったが、そのことに苦情一つ言うことなく、己の人生を真摯に生き抜いた結果がこのような臨終になった気がする。臨終のその夜は、〝喜平の死〟に話の花が咲き、御祝だと言って酒盛りをしたのが今でも忘れられない。喜平は享年八十六歳であった。その約一ヶ月後、吾が家に長男が誕生した。



山田　宜弘　昭和8年12月9日生　北九州市出身・北九州市在住
▽昭和34年早稲田大学第一文学部史学科卒業、八幡市役所（現、北九州市役所）入職、43年退職、九築工業㈱入社
▽昭和46年取締役副社長、54年代表取締役社長就任、現在に至る
〈好きな言葉〉「中庸」

人生を変えた出会い

山本敬一郎

忘れられないことは、狂瀾怒濤時代を生き抜いてきた私達世代には多々あると思うが、その中から現在のように体罰とかいじめということが問題にならなかった時代に、私が経験し心に刻みつけられた少年時代を振り返ってみたい。

「こらあ、山本、お前教室を出て銃器庫（教練用の銃を格納してある倉庫）で立っとれ！」、激しい叱責の声が担任のK先生から飛ぶ。私は机に縋りつく。引きずり出されない為の抵抗の姿である。

隣に座っていた級友も机に縋りつく。私が引きずり出される時に机が倒されない防禦の為だ。K先生は教壇から下りてきて、机に縋っている私の腕を机からひっぱがして体ごと教室外に突き出し、背中を突いたり、腕を引っぱったりして銃器庫に閉じ込めた。私は薄暗い銃器庫の中で級友が呼びに来るまで立ちつくすのであった。私には何故叱責されるのか理解出来なかったが、私の挙動が授業の邪魔になっていたのではなかろうか。

叱られてばかり、立たされてばかりの毎日は、学校に行くのが厭で、通学もとぼとぼ歩くので遅刻することも多く、一年生から三年生迄の学校生活は薄暗い靄に包まれ、K先生の叱責の声と懲罰を受けたこと以外は思い出すことがない。自分では悲しく辛いのだけど、不思議なことに両親にも

姉にも話せないのである。今で言えば登校拒否の一歩手前まで来ていた。

四年生になって担任が変わった。大谷先生である。新学期になってしばらく経った理科の時間に「この問題、答えられる人は」と質問され、私もおずおず挙手をして答えた。「山本、君は出来るじゃないか」と賞められた。初めての経験であった。前日、姉の参考書を拾い読みしていた時、偶然眼に触れた箇所の質問であった。その後大谷先生から家に遊びに来いと招かれ、級友三、四人で先生宅に行った。境内の広い大きなお寺が先生の家で、のびのびと遊んだことを思い出す。薄暗い所から明るい春の光が注ぐ野原に出た思いである。三年生までの劣等生が五年生になった時級長に選ばれた。四年生の時に大谷先生と出会ったことで私のその後の人生が変わったと考えている。

現在、教師の体罰が問題になっているが、生徒の性格に対する好悪感に支配され、感情の抑制力が乏しくて、叱られる生徒側の気持ちを考えてやる余裕が不足しているのではあるまいか。私は大谷先生に出会って救われた。故人になられた大谷先生に深い感謝を捧げる。



山本　敬一郎　大正11年9月21日生　北九州市出身・福岡県大野城市在住
▽昭和23年九州大学法文学部卒、福岡銀行入行、審査第一課長、長崎支店長、秘書室長、審査部長
▽昭和46年正金相互銀行専務就任、58年社長就任、平成元年福岡中央銀行頭取
〈好きな言葉〉「泥臭くてもいいから誠実でありたい」

一枚の新聞紙と「一日10分」

渡辺守将

私は十二年前、ある神父から登山に誘われ、近くの標高五百八米の戸ノ上山に登った。この位の山ならば、日頃から鍛練した身体だから、楽に登れるだろうと出発した。登り初めて登山がこんなに苦しいものかと思い知らされ、自信を失うと同時に体力の衰えを見せつけられた。早速下山しながらその対策を考えていた。

私はこれまで、「如何に人生を楽に生きてゆくか」をモットーにしてきた。登山は苦しく、体力を必要とする。そこで、楽に登山をするためには日頃から登山に適した身体づくりをすれば良いと近くのアスレチッククラブに入会し、以降八年間通うこととなった。

この頃、六十歳を人生の一区切りと考えていた私は、五十九歳で約五千九百米のキリマンジャロに登ることにより、その体力と気力を試し、六十代からの生き方を考えようと決心し、更にトレーニングに励み、平成四年八月にキリマンジャロ登山を実行した。

いよいよ、当日、午前零時、四千七百七十米の小屋を出発し山頂に向かった。ところが五千米少々の所で高山病に罹り、急ぎ下山命令に従った。登頂に失敗し、下山をしながら後を何回も振り返っていたが、いつの間にか雪化粧している山頂が涙で見えなくなり、それを最後に二度とその姿を見ることはなかった。後日その原因が体力に慢心した結果、歩くピッチが早過ぎたことが判った。

この経験は私にとって大きな疑問となり、暫らく六十の迷いとなっていた。その時、元東大教授、ロケットの開発、組織工学研究所所長、東京交響楽団理事長等々の数多くの肩書で、現在八十三歳で大活躍されておられる糸川英夫博士の一文に接した。先生は、人間はたとえ一日数分であっても、毎日何かを続ければ、必ず進歩する。学ぶことに年齢は関係ないとして、六十二歳からバレエを練習し、足を上げるために、一日一枚の新聞紙を毎日重ねて高くしていき、これを五年間繰り返した。練習時間は一日十分以下で、貝谷バレエ団の舞台に立つことができたという。この一文は私にとって大きな一撃となり、更に勇気と希望と活力を与えて呉れた。同時に、スピードの早い今日の時代だからこそ、この事が大切なことだと、これからの時代を担っていく若者たちに生きる知恵を教えているのではないだろうか。



渡辺　守将　昭和8年1月24日生　北九州市出身・北九州市在住
▽昭和30年早稲田大学商学部卒業
▽㈱ワタナベプリンティングセンター代表取締役社長
▽北九州商工会議所情報メディア部会部会長、日本電子製版工業会常務理事
〈好きな言葉〉「継続は力なり」

あとがき

太平洋戦争に敗れて既に五十年を経ました。この大きな節目に当たり、激動の二十世紀における皆さまの貴重な歴史体験や忘れ難いことばを語っていただき、若い人達に伝えたいという思いから本書を企画いたしました。

お陰さまで、ご多忙にもかかわらず沢山の玉稿をお寄せいただきました。ご寄稿賜わりました皆さまのご厚情に心から感謝申し上げます。

編集に当たりましては㈠題名文はなるべく見出し文に改めさせていただき㈡漢字は当用漢字にこだわらず原稿を尊重し、難しい漢字にはルビをふりました㈢玉稿の内容を歴史のわたつみとの関わりの深さによって「汀（みぎわ）」と「埋み火（うづみび）」の二部に分けました。

本書が歴史の正史に書き尽くせない激震の二十世紀に生きた「市民史の語り部」として二十一世紀に語り継がれることを希っております。

平成八年二月

創立五十周年記念図書編纂委員会

後藤　泰久
松中　宣夫
野津　順子

忘れられないこと　非売品

平成8年2月25日発行

編　纂　創立50周年記念
　　図書編纂委員会

編集者　加治屋　知　暁

発行者　高　藤　昌　和

発行所　高藤建設株式会社
〒800北九州市門司区東新町一―一―三〇

印刷　瞬報社写真印刷